

槐南森大來著

唐詩選評釋 下卷
一三二

東京新進堂發行

唐詩選評釋

唐詩選評釋下卷の首に書す

客年の十月始めて本書の上巻を梓して世に問ひ、爾來一裘葛屨に其の下巻の小半を脱稿することを得たり、烏免倏忽我を待たず、得る所僅に此に止る、何ぞ慚愧に堪んや、
兔を搦つに全力を用うるは獅子の愚なり、我れ豈に獅を以て自から居らん、唐詩選の一書の如きは譬へば猶ほ兔の如きのみ、蓋し小子久しく支那歴代の詩史を修するに志あり、本書の評釋を借りて聊か其の一部の材料に資す、故に頗る功を獮祭に用う、
詩に本事あるものハ之を正史に考へ野乘に照し、力めて其の源を探ぐり、其の委を討し、毫髪も遺なきを期す、然れども家に名山なく、腹笥従つて乏し、盜を見て索を綯す、時に臨んで遽かに檢點を試む、一を掛けて萬

唐詩選評釋下卷の首に書す

客年の十月始めて本書の上巻を梓して世に問ひ、爾來一裘葛絺に其の下巻の小半を脱稿することを得たり、烏兔倏忽、我を待たず、得る所僅に此に止る、何ぞ慚愧に堪んや、

兔を搏つに全力を用うるは獅子の愚なり、我れ豈に獅を以て自から居らん、唐詩選の一書の如きは譬へば猶ほ兔の如きのみ、蓋し小子久しく支那歴代の詩史を修するに志あり、本書の評釋を借りて喲か其の一部の材料に資す、故に頗る功を懶祭に用う、

詩に本事あるもの、之を正史に考へ野乘に照し、力めて其の源を探ぐり、其の委を討し、毫髪も遺なきを期す、然れども家に名山なく、腹笥從つて乏し、盜を見て、索を絢す、時に臨んで、遽かに檢點を試む、一を掛けて萬



を漏さる鮮し大雅の君子姑らく笑て之を置け、
詩法を講して脈理の在る所に注意す未だ豊干の饒舌を免れず一友人
謂ふ評釋出で天下の詩人を毒する砒霜より甚しと此の言大に理あ
り藥能く人を活し亦能く人を殺す詩話興て詩亡ふるものは固より詩
話の罪に非ざるなり

詩故事に泥するを忌む故に古詩及近体の評釋する多く之を擧げず獨
り長律に到つては然らず作者方さに故事を活用するを以て能事と爲
す勢箋釋に入らざるを得ず而して長律を説くの難亦知るべし

仍ほ七言律詩一卷五七言絶各一卷を餘ます本書完成の期は則はち明
春花事正に耐なるの日に在るべし既に拙而して遅自から省みて慙
す世固より倚馬千言の才に乏からず僕の如きは豈に其人ならんや

癸巳

槐南醉史大來偶拈

唐詩選評釋卷四

五言排律

送劉校書從軍

楊炯

天將下三宮。星門列五戎。坐謀資廟略。飛檄佇文雄。赤土流
星劍。烏號鳴丹弓。秋陰生蜀道。殺氣繞湟中。風雨何年別。琴
樽此日雨。離亭不可望。溝水自西東。

排律を讀まんと欲す須らく先づ排律の名義を一定すべし蓋し唐時
固より未だ所謂る排律なるものあらざるなり

明 李攀龍 原本

日本 森大來 評釋

此の體の平仄四句毎に一粘す。粘とは上四句仄起なれば下四句仄起を用ゐ、上四句平起なれば下四句平起を用ふ、其の法純然たる五言律にして、而して彼れは只八句に限り、此れは則ち演じて五十韻百韻に至るも、此法一定して寸毫の出入を容れず、然れば其の五言律に異なる所のものは全く唯八句以上の長篇たるを以ての故のみ、故に唐人を稱して長律と曰ふ、是れ其の名目の尤も穩協なる者なり、長律之已に律詩の長篇なること其の名の如くなるときは、是れ實に五言律を以て五言古詩を兼ねるものなり、夫れ古詩は其の體たる固より多しと雖、要するに聲律排偶の拘束を受けず、直ちに我が言はんを欲する所を縦横に發揮し、言盡きて而して止む、其の長短參差に至つても亦唯我が意の欲する所運用は一に己れに由れり、五言律に至つては聲律排偶の檢に就かざるべからずと雖、己に限るに四韻八句

を以てすれば、少こしく精を研かき思を練りて之を作爲するときは、則ち四十位の賢人君子を得ること、寔に難とせず、才力稍薄きものと雖、亦勉強に湊成して以て其の醜を掩ひ拙を藏くことを得べきなり、長律に至ては然らず、氣局は嚴整ならざるべからず、屬對は工切ならざるべからず、段落は分明ならざるべからず、五十韻百韻に至るも其の間に一屠估兒を容るゝを許さざるべし、一に四韻八句の律詩の如くならざるべからず、而して又排纂縱橫動盪變化之を極整極密極嚴極工の中に行ひ、開闔相生、節奏相和、鋪叙の痕を没し、過接の跡を化し、讀者をして殆んど其の排偶の文字たるを忘れしめて、實は一字一句規矩準繩の外に踰越するものなきを要す、詩の諸體に於て蓋し是より至難なるは莫し、李太白の仙才を以て終に此の一體の堂奥に上る能はざりしは洵とに以あり、初唐應制贈送の諸作、多く五言

律を用ゆ、尤も多く、五言長律を用う、亦其の至難なるを以ての故に、此に因て以て其の宏富の才藻を君父朋友の前に摘揆せんと欲するが故のみ、是を以て王楊盧駱にして下、陳子昂杜審言沈佺期宋之問張說張九齡輩に至るまで、概ね力を此體に致し、獨り其の集の過半を長律を以て填められたるのみならず、聲律排偶に關なき五言古詩と雖、亦多少此の躰の風味を帶ばざるなきに至れり、杜少陵出づるに及んで、瑰奇鴻麗難を視て易と爲し、險を行くこと平地の如く、大に故常を一變す、是れ實に千古の一人前に古人なく後に來者なきものなり、既にして唐制終に詩を以て士を取る、則はち此の至難なるものを取て科場の試式に中て以て人材を選拔するの具と爲したり、是に於て乎、試律なるもの始めて興る、其の體純然たる八股時文にして、題を相て言を立て、格を佈き句を琢す、初めより自家の性情を吐露するに意なく

して、斷斷然として唯、題目以外に半歩を失墜せざらんことを力む、長律の精神は此に至つて全く泯滅に歸し、唯、其の形式を存して以て秀才が仕進を圖かるの資と爲り、風雅の道を距る管に天淵のみならず、るものと爲りたり、夫れ然かり、然かれども未だ所謂排律の名あらざるなり、

其の名あるは則はち明の高廷禮より防まる、廷禮が唐詩品彙を撰するに當りて、五言長律の部目を立て始めて命じて排律と曰ふ、以爲らく排とは之を排して開かひる、一行軍排陣の如く然かり、故に此の躰、起聯尾聯の二韻を除きて、中間の聯句は皆を緊に題より排入せんことを要す、或は題面より排し、或は題位に在つて排す、或は分排し、或は合排し、或は古を引て排す云々と、此の説一たび出で、七子の徒皆な奉じて圭臬と爲し、終に長律を目するに排律を以てし、相沿襲し

六
て今に至る、殊に知らず、廷禮が所謂排とは、試律の形式を以て、長律の精神を掩ふものにして、後人終に試律長律を混じて一格とい甚き、斥け、て、場屋の文字なりとい、之を作くるを屑とせざるものあるに至り、いは、全然排の一字の之が罪魁と作りたるものなることを、元微之少陵の長律を評し、盛んに其の鋪陳排比を稱す、是れ或は高廷禮の命名の自てする所なるべし、願ふに微之輩が長律、工穩流動を極むと雖、鎔裁未だ足らずして、往往淺率に病む、此れ亦安んぞ少陵の長律を學んで専ら其の鋪陳排比の處に心酔したるの過に非ざるを知らんや、馮鈍吟は則ち云はく、長詩に叙置次第あるは、此れ文章の自然の勢なり、其の妙處は全く此に在らず、品彙の作、高棟聲病を解せず、便はち長律を以て排律と爲せるは無識の妄作のみ、然れども、今人は則ち排の字已に骨に入れり、板拙にして貫穿せざるは、只排の字に

七
誤了せらると、此れ眞に能く箇中の消息を識別するの言なり、卓越の見と稱して愧なかるべし、後人此等の反駁あるに拘はらずして、一概に廷禮の妄を襲ひ、排律と稱して其の非を悟らず、殊に解すべからざるものとす、今より以往、嚮學の士は願はくは意を此に留め、長律を以て鋪排の死文と爲す勿れ、試律と同一視して、其の卑格を蹈むこと勿れ、予自から此の跡に短なるを知ると、雖亦請ふ鞭を執て之が後に從はんのみ、若し夫れ于鱗が排律の名を襲ひたるが如きは、固より深く答むべきなり、何んとなれば、渠が唐詩選は即ち高が唐詩品彙の應聲蟲なればなり、
楊盈川が此の作六韻十二句、劉校書の從軍を送る所以のもの、備寫せざるは無し、頭より尾に至るまで、之を當時の情理に揣かるに、皆な宜しく有るべきの語にして、一語の敷衍に涉り一字の冗贅に屬すべき

ものあることなり、即ち其の序置次第に至つても、一々然らざるを得ざるの勢ありて、氣脈流注し、精神一貫す、何處よりしてか所謂排なるものを見出すことを得んや、則ち之を評釋する一に古跡の例に沿り、仍ほ分ちて三段とす、

天將下三宮より起つて、飛檄付文雄に至る是れ一段、劉が文官にして軍幕に従ふ所以に溯り、先づ劉が將に倚らんとするの主將より着筆して、落ちて劉が身上に到り、重を主人に歸す、赤土流星劍より殺氣遠渾中に至る是れ一段、劉が從軍の正文にして手に随つて、又其の從軍の地方を點出す、風雨何年別より、潯水自西東に至る是れ一段、都て送別の意を以て歸局とす、而して風雨離亭、潯水鳴咽、上段の秋陰殺氣より線索を引き來つて、眞に黯然として首を回らすに堪へざるの情ありなり、

天將は天上の將星、以て天子の將に喩ふ、星門は將府の軍門、以て天上の星官に擬す、上句に星を省き、下句に將を畧するは、文を互にして、義を見はすなり、三宮は明堂辟雍靈臺を謂ふ、以て五戎に對す、五戎は戈、矢、戟、酉矛、夷矛の五種の戎器を謂ふなり、起二句の意を總括すれば、大將軍將さに軍旅の事あらんとするを以て、正に殿陛に參朝し、畢つて其の軍門に歸へれば、戎器盡く整頓して、出陣の裝已に完しと云ふに過ぎず、而して其の闕庭を下るに他の諸宮殿を言はず、猶り三宮を擧ぐるものは、一面は對を五戎に取るが爲めと雖、又一面には明堂辟雍文臣の當さに趨踰すべき所なるを以て、暗に劉校書を其の中に隱躍するなり、是れ文心の極微極妙の處、坐望の句は、忽ち一筆を開く言ふこゝろは、軍旅の事固より大將の責と雖、籌を帷幄に運し、坐ながら千里を謀りて、以て廟堂の策略を資けんものは、必ずや幕府の良佐

十
なかるべからず、而して此の良佐の任に堪へんものは亦斷して武臣の能くする所に非ずと如此に一開去りて劉校書已に筆先に逼出す。故に飛檄行文雄と曰ふて之を闔つ、則はち大將軍親から檄を飛ばして以て此の文雄劉校書を招致せざるべからざるなり、佇と云ふものは佇立して待つ義なり、或は貯に作る義に於て通ずと雖、佇に從ふもの尤も文勢を得たるが如し、一段

劉校書既に將軍の聘に應して之が幕佐と爲る、則はち其の左右に見る所のものは復た明堂辟雍の圖書筮鑰に非ずして、終に身を星劍月弓の武器の間に置くこととなりたるなり、故に赤土烏號の二句あり、此の二句意は如此なるも、其の線索は仍ほ上段の五戎より引き緊に之に照應す、妙言ふべからず、赤土なるものは用て劍を磨く所以、晋の張華豊城獄底の寶劍を得て、華陰赤土を以て之を磨きしに、其光彩益

精明を加へたりと云ふ、是れ此の句所用の故事なり、流星は以て劍光に喩ふるなり、黃帝鼎を鑄り龍に乗じて天に上る、群臣從ふことを得ず、遺弓を抱て號泣す、故に烏號弓の名あり、烏は嗚咽の鳴に同じ、此句は借りて烏黑の義と爲し、上句の赤土に對す、意匠工絶と稱すべし、明月と云ふは亦弓を狀するのみ、時に於て秋陰蜀道の險に生じ、賊氛漸やく猖獗にして、殺氣湍中の野を繞ぐれり、今大將軍出兵の事あるは、則はち此れが爲めにして、劉が從つて以て坐謀の偉略を試みんとするものは、正さに此等の地に在り、二句已に劉が從軍の地を點じ、兼て大將出兵の因由を補寫し、以て上段の未だ言ふに及ばざりしものを追言す、而して殺氣秋陰、悽慘の象、不言の中に下文の別意を逼出せり、二段

風雨と云ふも必ずしも別時適、風雨の日に値ひしものと死定する勿

れ。風。飄。へ。り。雨。散。ず。皆。を。以。て。別。離。聚。散。の。悲。緒。を。興。す。る。所。以。な。り。何。年。別。と。は。茲。に。一。た。び。手。を。分。ち。て。後。正。さ。に。何。年。ま。で。の。別。れ。た。る。や。を。知。ら。ざ。る。の。義。な。り。琴。樽。此。日。同。は。是。れ。離。筵。の。正。文。上。句。に。再。會。の。期。知。る。べ。か。ら。ざ。る。を。突。起。し。て。送。別。を。開。ら。き。下。句。に。此。日。の。琴。樽。を。共。に。す。る。を。喜。ぶ。の。意。を。言。つ。て。送。別。を。闔。づ。然。れ。ど。も。上。句。ハ。突。出。に。似。て。其。の。實。上。段。秋。陰。殺。氣。の。語。路。を。承。け。兜。轉。過。峽。の。跡。を。露。は。さ。ず。下。句。は。叙。し。て。送。別。の。筵。に。至。り。て。以。て。下。文。離。亭。の。二。字。の。總。束。の。地。と。す。此。等。の。章。法。渾。然。に。し。て。天。成。香。象。河。を。渡。る。の。觀。あ。る。な。り。結。二。句。は。既。に。別。か。る。後。の。蒼。茫。の。意。緒。を。點。じ。て。煙。波。杳。杳。無。限。の。情。あ。り。溝。水。東。西。は。古。樂。府。白。頭。吟。の。今。日。斗。酒。會。明。且。溝。水。頭。蹀。躩。御。溝。上。溝。水。東。西。流。と。云。へ。る。に。基。つ。き。君。は。西。我。は。東。に。留。ま。り。て。側。目。遠。送。す。れ。ば。肝。腸。寸。斷。す。る。意。を。曲。盡。せ。り。三。段

長律の作法を審にせんが爲めに特に詳密に開卷の一篇を分説す。則ち五十韻百韻の長篇を作らんと欲するも皆な此の一端を以て類推するを得べし。九原作こすべくんば盈川其れ我を以て知言と爲さん耶否耶

靈隱寺

駱賓王

驚嶺。鬱。岩。堯。龍。宮。鎖。寂。寥。樓。觀。滄。海。日。門。對。浙。江。潮。桂。子。月。中。落。天。香。雲。外。飄。捫。蘿。登。塔。遠。剝。木。取。泉。遙。霜。薄。花。更。發。冰。輕。葉。互。凋。夙。齡。尙。遐。異。披。對。滌。煩。鷺。待。入。天。台。路。看。余。渡。石。橋。

史に稱す賓王徐敬業の義兵を擧げ武后を撃つに及んで出て、之が幕佐と爲り敬業敗れて終る所を知らずと而して唐の孟榮が撰する

所の本事詩頗る傳聞異辭多し。曰はく宋之間既に事を以て累りに貶黜せられ、後ち放ち還されて江南に至り、西湖の靈隱寺に遊ぶ時に於て、夜月極めて明きらかにして、松筠泉石と互に映ず、之間長廊の間を吟行して、興自から禁せず、則ち驚嶺巖、龍宮鎖寂寥の二句を得たり、因て第二聯を作らんとして、頓りに奇思を搜すれども、終に意の如くあること能はず、忽ち一老僧あり、長明燈を點じ、來つて大禪床に坐し、問ふて曰はく、少年夜深るまで寝ぬずして、吟諷の甚だ苦なるは何ぞや、之間答へて曰はく、弟子は詩を業とするもの、適偶此の寺に題せんと欲するも、興思屬せず、此れが爲めに爾かく苦しめり、僧の曰はく、試に上聯を吟ぜよと、之間即ち吟じて之を聽か、一めりに老僧は再三吟諷して、乃はち曰はく、何ぞ樓觀滄海日、門對浙江潮と云はざるやと、之間愕然として、其の適麗を訝り、又續で篇を終へて曰はく、桂子

月中落、天香雲外飄、云と僧の贈くる所の句、即ち一篇の警策たり、明朝更らに之を訪へば、則ち復た見えず、寺僧に知る者ありて、此れ賂賓王なりと曰ふ、之間其の故を詰れば、答へて曰はく、敬業の敗るゝに當りて、賓王と俱に逃亡し、之を捕ふれども得ず、當時の將帥、大魁を失せば、不測の罪を得んことを慮り、戦死の兵卒二人を戮し、首を函して以て獻したり、後ち賓王等の死せざる事世に昭白したれども、敢て追捕せず、故に敬業は、衡山の僧と爲り、年九十餘にして卒し、賓王も亦落髮じて、名山に遊び、靈隱寺に止まること、周歲にして卒す、二人の事は一敗したれども、唐室恢復を以て名としたれば、人多く之を護脱す、云と、此の説に據て考ふれば、本篇の前後は皆を宋之間の作にして、賂賓王が手に成りしは、寔は樓觀滄海日の一聯に止まり、而かも亦唯賓王が死後、其の精靈を月下に顯はして、以て之間を展酬したり、

過ぎず。則はち本篇を擧げて駱賓王が作とせるは極めて非なるもの、如し才子傳を覆査するに其の説全く本事詩に同じ、而して宋の葉石林の詩話此と稍異なり、以爲らく之間が作る所は唯、起頭の二句にして、以下十二句は盡く賓王の續成する所なりと、且つ此の詩の賓王集中に見ゆる旨を言ひ、賓王集は當時の古本なれば若し後人の補録に出でざる限りは信據すべき旨を辨じたり、然れども駱宋二人聯句の説は全く孟榮の本事詩より昉まりしものにて、其の他の傳記には之を録するものなし、彼の樓觀以下十二句盡く賓王に出でしと云ふは想ふに深く、本事詩を精究せざるの過にして、本事詩の文、又續終篇曰、桂子月中落、云云とある語勢を誤り解して、彼の老僧が又續で篇を終はりしとせしにより、謬迷を生ずるに至りしなるべし、此の聚訟の説俱に其の根據逸焉として究詰すべからず、讀者乃ち疑を其の

間に闕て可なり、若し強て予が所見を陳せんとすれば、予は一切此等の説を廢して、獨り本篇を駱賓王が詩なりと斷言するに憚らざらんとす、

何となれば宋之間は好んで人の美を攘ふものなり、已に七言古詩の部に詳悉したる如く、渠は曾て劉希夷が年年歲歲花相似、歲歲年年人不同、を奪はんと欲して得ず、怒つて之を虐殺せしものなり、同時親昵の朋友すら此の如し、况んや時代相去る稍遠く、殊に兵を擧げ亡命して往く所を知らざるの駱賓王に於てをや、渠必ず夙に駱が此の篇を傳誦して、愛慕の餘、乃ち奪つて自己れが有と爲さんと欲し、詩中披對云云の句の宛から人と相對吟せるが如き意あるを幸として、終に靈隱奇遇一段の荒唐の話を捏造し、自己れ親しく賓王の精靈に邂逅して、此の一篇を得たる旨を假構し、事を神奇に托して、剽攘の跡を模稜

に附。去らんと欲せしむるべし。然れども宋も亦能く自から其の伎倆を知り、樓觀門對の一聯の偉麗にして到底自己が力の及ぶ所に非ざるを以て、終に此の一聯のみを賓王に屬して、時人の指斥を免かれんことを圖りしに疑なし。孟榮が本事詩は唯、異聞奇事を收録して談助に資するもの、初めより事の眞偽を計するものにあらず、其の録する所の李杜相忌むの説の如きも、前賢多く以て小説家の言なりとせり、之問が假構の説大に訛異すべきものあるを以て、彼れ亦採つて以て諸を書に筆せしのみ、榮は唐人なるを以ての故に、其の説憑據するに足るべしと云は、予は寧ろ其の識見の太だ卑きを笑はんとするなり。

本篇七韻十八句、起結各四句を以て一段とし、其の間は六句を以て一段としたり。蓋し中間六句は靈隱寺中の風物を叙し、本題の正面たるを以て特に詳密ならんことを要すればなり。首句先づ鷲嶺深高の

狀を以て起る、是れ靈隱寺の在る所、西湖の鷲嶺は天竺靈鷲山の小嶺飛んで此の地に來りしものなりと傳ふ、故に此の名あり、次句龍宮鎖寂寥、は是れ靈隱寺、此の句にて寺たる既に明かなれば、次聯は其の登覽の宏遠なるを言ひて、更らに寺の位置方向を明瞭したり。是を起段とす。

相傳ふ月殿に桂樹ありと、而して寺内に入れば、只此の天上の奇香の馥郁として人を襲ふを覺ふ、是れ即ち桂子の月中より墜ち來る母らんか、否らずんば何ぞ爾かく雲外に飄へる此の如くなるや、此の接法殊に妙、蓋し前段の觀日對潮已に高曠の狀を實寫し得て盡く、是に於て寺内の一桂樹より忽然筆を空際に放ち去り、月に一番の虚描を成せり。月中雲外已に其の寂寥の意を承け、又極めて岩窈の神理に協

ふ。其の。觀日對潮の。一聯と表裏を相爲すもの實に不即不離の間に在り。而して寫す所のもの寺内の桂樹たれば筆路は已に不知不識の中に轉じて寺中の景物に入れるなり。故に以下の四句又各寺中の一事一物を實寫して以て之に接す。總て高曠の氣味を離れず、此等の作法唯之を純ら神を以て行ふものと謂ふの外、他に適當の妙贊辭あるを知らざるなり。列木と云ふものは木を列て以て筧を爲して泉水を導くを云ふなり。花更々發するときは終に衰謝の時あることなし。葉互に凋むと云ふも亦此の如く、一葉纔かに凋むときは他の一葉代り發し、全然盡落の期あらざるを謂ふ。地東南の海に面して日光を受くる極めて多ければ、秋末寒冷の候と雖仍ほ和煦なること此の如し。是に於て上段觀日對潮の句の特に位置方向を點出せし必要を冥々裏に悟透するを得べきなり。是を中一段とす。

遐異とは遐地異境なり。鷲嶺の岩窈たる靈隱の寂寥たる樓に登れば泉泉たる皎日の東海滄溟の裏より上るを觀門を開けば浙江の信潮朝夕來往するに對す。月桂雲香蘿塔筧泉以て花葉紛披として四時斷ざるに至るまで、寺内の幽景一として塵境に遠ざからざるは無し。洵とに所謂る遐地異境なり。故に特に遐異の二字を着して前十句を總束し。此の遐異の景は即ち作者が早歲夙齡より愛尙するものなり。一の意を以て上段の景語を化して作者の情語と爲したり。披對は披襟して以て此の遐異の景に對するの義なり。今や披襟して夙齡より愛尙する所のものに對し、胸底の煩囂を一洗し去る事を得たれば、此より愈進んで天台の仙境に入り、將さに石橋を渡り、絶頂に登りて、以て世外の隱栖を求めんとす。因て結ぶに其の希望を以てす。是れ結一段なり。天台は靈隱を去ること遠からず、上に石橋あり、廣さ尺に盈た

ず、下萬仞の淵に臨めり、若し能く之を濟過するものあれば、即ち應
 眞游現の域に造ることを得ると云ふ、賓王既に敬業の難を逃れ、禍を
 山水の間に避く、自から當さに厭世離垢の念あるべし、故に此の意を
 結處に見はずなり、句意頗る飄逸にして、李青蓮の風あり、且つ披對と
 云ひ、看余と云ふ、人と應對する所あるが如し、吾れ之間が假托の説口
 を、賓王の精靈と應對せしに、藉しは、全く此等の語あるに由ると謂ふ、
 甚だ武斷の見ならざるを知るべし

樓觀の一聯唯、其の位置方向を點出するに過ぎずと、唯、渾雄偉大に、
 て、岩窈の山勢と、宏壯の寺觀とを宛として、目前に湧出せるが如し、是
 れ此の二句の千古に傳誦して、絶唱を推されし所以なり、桂子、天香の
 句の、神妙亦之に副ふ、霏雪録に載す、宋の天聖中、秋月甚だ朗らかなり、
 靈實を靈隱に降だす、狀珠璣の如し、璀璨として、目を奪へり、異人あり

之を識り、因て曰はく、此れ月中の桂子なりと、想ふに、此れ亦小説家の
 言にして、賓王が此の聯、流傳殊に久しきを、以て假構して、句意を實せ
 いものなるべし、坊刻の俗解、天聖は宋の仁宗の紀元たるを知らず、誤
 つて之を唐の年號なりとし、終に賓王が此の句は、全く其の當時に在
 りし實事を咏じたるものなりとす、杜撰誕妄、眞に一笑を發すべし、初
 學の或は爲めに、誤認を致さんことを恐るゝを、以て特に之を辨ず、

宿温城望軍營

虜地寒。膠折邊城夜。柝聞兵符關。帝闕天策動。將軍塞靜胡。
 笳徹沙明楚。練分風旗翻。翼影霜劍轉。龍文白羽搖。如月青
 山斷。若雲烟。踈疑卷幔。塵滅似銷氣。投筆懷班業。臨戎想顧
 勳。還應雪漢恥。持此報明君。

此の作賓王未だ事を擧げざる以前のものにして蓋し渠展上書して用ゐられず、軼軌として志を得ざる時の作なるべし。讀んで結段に到れば自から滿腔の慷慨、武后の擅制を惡んで唐室を既傾に匡復せんとするの志を見るなり、殊に雪耻の二字を以て篇末に置く、斷じて苟作に非ず、班業、顧勳は其の意中の事事を擧げて成ることなかりしも、亦斷々書生が紙上の空談と其の科を同うするを得ざるなり、

全首仍ほ三段に分つ、起六句、中六句、結四句、各一段なり、起六句は總て題位を點ず、中六句は望中所見のもの、結四句は之を望で懷に觸るゝ所のものなり、凡そ如此に詩を拆説するときは讀者或は試律の法と同一たらんを疑ふものあるべし、然れども彼れは題ありて而して後詩あり、此れは先づ詩ありて而して後題あり、換言すれば彼は題目を刻畫するに止まりて、毫も作者の性情を吐露する能はず、此れは作者

の性情を抒寫せんと欲して題目を借て以て發す、死活の別毫厘の差、是れ一隻眼を具する者に非ざるよりは、徃徃其の軌轍を異途に陷誤りて自から知らざる所以なり、此の事便宜を以て茲に一言す、前後の評釋皆な此の意を離れずと知るべし、

結六句題位を總點するものは、此の作本と温城に宿して其の地の兵營を望むの作たり、故に先づ温城より叙起し、次に兵營に及ぶ、温城は唐の靈州にして疆は胡域に接す、是れ虜地の邊城たるなり、寒膠折は自已が此地を經過せし時序を點ず、胡地北風の栗烈たる漆膠の固と雖亦盡く凍折せざるなし、夜析聞は明らかに躬其の地に宿したるなり、此の二句を以て題位の宿温城は盡く領起せられたり、此より將さに寫して軍營に到らんとして先づ軍營を此の地に置く所以を點ず、兵符關帝闕天策勳將軍の二句是れなり、軍國の事盡く廟堂の議に關

からざるなきを以て、天子親から策を畫して將軍を各地に移動し、時
 を計り宜を制して封疆の守を爲さしむ、是れ二句の意なり、上句兵符
 に由て帝闕を出す、是れ下よりして、上下句天策に因つて將軍に及ぶ
 是れ上よりして、下、點次錯落筆姿生動す、此に於て軍營の此地に在る
 所以已に明故に下、二句は軍營を正寫せり、然るに猶ほ塞靜胡笳徹
 の一句を陪して豫め軍營嚴肅の狀の爲めに勢を蓄へ、以て文の平直
 に涉らんことを避く、是れ斯道に沈浸して細かに其の中の鹹酸を嘗
 めたる者に非んば未だ遽かに識り易すからざるの妙味なり、白練の
 甲、明沙に相映じ、其の色整然として分つべし、純はら軍營を寫すもの
 唯、此の五字にして、而して望見の意已に下段に過渡せり、則ち題意
 の「望軍營」と云ふもの盡く領起せられざるは無きなり、
 然れども此の詩果して何んが爲めにして作る、温城に宿するが爲に

あらざるなり、軍營を寫すが爲めに非るなり、唯、其れ之を望んで
 以て、我が胸懷を觸發するものありしが爲めのみ、望の字は是れ一篇
 の精神たるを知るべし、故に中六句專ば望中の物を以て力を極め
 て鋪叙し出したたり、風旗の片片たる、飛禽の翼影を翻へすが如し、陣勢
 の堂堂たる知るべく、霜劍の煜煜たる、蛟龍の鱗文を轉ずるに似たり、
 兵威の肅肅たる想ふべし、白羽は羽扇高く、空中に撃げたれば、搖如月
 と云ふ、青山斷若雲とは前に軍營あるが爲めに遙處の青山は遮隔せ
 られて宛かも白雪の爲めに中斷せられたるが如きを謂ふ、特に此の
 句を點するものは讀者にして其の望中の景たるを忘れざらしめん
 が爲めなり、時に天氣霽朗にして煙塵動かざれば、軍營の狀一として
 望見すべからざるものなり、故に煙疎疑卷幔、塵滅似銷氛と曰ふ、卷幔
 の字、是れ煙を形容するの語と雖、自から平沙列幕の狀に切なれば、絶

て浮泛に涉らず、氣は兵氣なり。似の字味ふべし。上陳する所の軍容兵威熾盛ならざるに非ず、靜肅ならざるに非ず、洵とに以て塞上の風煙を靖めて萬里の兵氣を一掃すべきに似たり。然れども亦安んぞ今は武后司晨の世にして唐室の危殆なる恰も懸旒の如きの時たるを知らんや。是れ此の似の一字實に結段感奮の意を惹起すべきの導火線たるなり。文字の秘蘊は要するに此等の處に於て尋繹すべきなり。班業は班超の事業、所謂る筆を投して萬里封侯たるもの是れなり。顧勳は顧榮の功勳なり。晋の時廣陵の相陳敏反す、南將さに揚子江を渡らんとす。時に於て顧榮潛かに謀り、兵を起して敏を攻む。敏渡ることを得ず、其の衆潰散すと云ふ。是れ其の事實なり。顧勳或は召勳に作り以て周の召伯淮夷を平くるの事とす。顧榮の事史傳に見ゆと云ふと雖原と甚だ顯著の典ならず、則はち單に其の姓一字を擧げて以て

上文の班業に對するときは、召勳に作るもの是なるに近かし、今義に於て碍なきを以て肯て舊本を竄改せず、仍ほ顧に従つて疑を此に存す。還應雪漢耻。持此報明君。駱賓王歌歌の懷。唯此の十字、獨り本篇の精神たるのみならず、亦以て渠が畢世の精神を見るなり。文義昭晰復た解を費すべきなきなり。我が上來評釋する所のものに照らして、反復沈吟せば、自から領略し得べし。起段に「塞靜胡笳徹」とありて、兵氣は已に銷し、漢耻は已に雪きしもの、如し、而して後に「似銷氣、還應雪」と云ふ、則はち上文は全く只一時軍營の氣象を形容したるに過ぎず。作者の本意は覺えず。似、還應の三虛字に因つて吐露せられ、隱隱約約の間に無窮の感奮を寓す。此れ即はち我が所謂る望中の事物に由つて作者が胸懷を觸發するものなり。

在廣聞崔馬二御史並登相臺 蘇味道

振鷺纔飛日。遷鶯遠聽聞。明光共侍漏。清覽各披雲。喜得廊
廟舉。嗟爲臺閣分。故林懷柏悅。新幄阻蘭薰。冠去神羊影。車
迎瑞雉群。遠從南斗外。遙望列星文。

蘇味道は李嶠と名を齊うし時に蘇李と稱す又杜審言と善し崔融を
合せて文章四友の目あり則天武后が延載中鳳閣侍郎と爲り聖曆中
進んで同鳳閣鸞臺三品と爲る鳳閣は中書省なり鸞臺は門下省なり
神龍の年中宗の復位に及んで其の張易之が黨なるを以て貶せられ
て邢州の刺史と爲り還た益州の長史に遷されしと云ふ其の廣州に
在りしは未だ何の時なるやを知らざれども細かに詩意を考ふるど
きは斷として是れ謫貶後の口氣ならず想ふに味道武后擅制の時に
在つて鳳閣の侍郎と爲り官命を以て廣州地方に巡遊し適崔馬の二
人が侍御史に因つて入つて相臺に登りしの信を聞き遙かに此の詩

を裁いて以て此の故友を同僚に得たるを喜びしものなるべし相臺
とは門下中書尙書の三省を併稱す二人なるもの此の三省中の孰れ
に屬するやは知り難けれども並に相臺に登ると云へば即ち此の
三省中の侍郎と爲りしは明らかなり詩は前後の兩段に分かつ毎段
各六句前六句は二人が相臺に上るを謂ひ後六句は自己が廣に在つ
て此の喜信を聞くを述べ

振鷺は詩經に本づく振振は群飛の貌以て朝中の班列に喩ふるなり
遷鶯も亦詩の出自幽谷遷于喬木の語に本つき二人の進官に比する
なり二人已に省郎と爲る則ち宜しく日に明光殿に早朝して以て
漏刻の終はるを待つべし清覽各披雲と云ふは晋の樂廣尙書郎と爲
りしとき衛瓘之を稱して曰はく此人を見る毎に雲霧を披て青天を
覩るの想ありと此の故事を用ひて二人が省臺諸官の刮目する所と

爲るを謂ふなり、唐人省官を稱するに多く清を以てす、清覽とは猶ほ
 臺閣中の望と謂ふが如し、起二句進官を領起し、次二句共各の二字を
 用ゐて明らかに其の兩人たるを點す、喜得廊廟擧、又之を一束し、嗟爲
 臺閣分と云ふに至つて筆を折りて作者自己の身に一照す、言ふこと
 ろは自己も亦臺閣の官と雖、適出、廣州に使せるを以て、二人が此の
 榮遷の日を見る能はざるを憾むなり、則はち當さに同じく臺閣に居
 るべくして而して獨り分別して他境に在るを嗟するの意なり、一説
 に此の句を解して彼の岑參が分曹限紫微五言律の部に見ゆと同一義なりとし、
 二人なるもの並に相臺に登るも、一は中書に屬し一は門下若しくは
 尙書に屬するが故に晨夕相往來するを得ざるを嗟するの意と爲す
 ものあり、按ずるに門下省尙書省は當時鸞臺文昌臺と稱し、中書省は
 鳳閣と稱す、臺閣の二字に拘いて之を分別せば、此の解甚だ當れるが

如し、然れども臺閣は原と要路の泛稱にして如此に拘定したる文字
 に非ず、况んや單に崔馬の二人が爲に之を言ふものどせば下文自己
 が廣に在つて之を懷ふの意を逼出すべき針線を欠き、文義甚だ板滯
 のものとなれり、故に余は此の説に従ふ能はず、
 吳の陸機が賦に、松美にして柏悅の語あり、悦とは欣欣向榮の義なり、
 漢代御史の府中に柏樹を樹ゆ、故林懷柏悅と云ふものは二人なるも
 の並に侍御史に由つて相臺に登りしを以て、其の御史の舊府を辭し
 去りたるに因り、之を懷ふの義なり、又漢代の尙書郎は香を握り蘭を
 懷にして以て丹墀に趨走す、其の天子に近接の官たるが故なり、新幄
 蘭薰並に此の事を用う、阻と云ふものは上段、臺閣分の意を承け、自己
 遠く天涯に阻隔せられたるを以て、崔馬の二人が新たに此の蘭薰を
 懷にして省臺に趨奉するを見るを得ざるの義なり、神羊は獬豸なり、

鹿に似て一角あり、性忠直にして人の鬪ふを見れば則ち不直の者に觸れ、人の論ずるを聞けば則ち不直の者を昨む、人君の刑罰宜しきを得れば此の物乃はち朝廷に生ずと謂ふ、故に御史の冠之を象どる、今二人已に御史の官を去りたれば宜しく此の獬豸の冠を脱すべし、因て冠去神羊影と曰ふなり、漢の蕭芝は孝を以て聞ゆ、其の尙書郎に除せらるゝや、雉數十頭ありて飲啄宿止し、上直に當つてハ送て岐路に到り、下直に及んでは門に入りて車前に飛鳴す、是れ瑞雉の事、其の省臺の郎官に適切なるを以て之を用おたり、廣州は今の廣東にして支那の最南に位す、又漢の明帝に郎官は上列宿に應ずるの勅語あり、因て南斗を以て自己が居る所の地を點じ、列星を以て崔馬二人に擬す、措詞皆な工緻を極めたり、

蘇味道相臺に在ること前後數載、阿諛逢迎を以て事とし、一も見るべ

きの業なし、嘗つて人に謂ふて曰はく事を處するは明白なるに宜しからず、但、摸稜にして兩端を持すれば可なりと、時人之を蘇摸稜と綽名するに至る、是れ渠が長く其の地位を保ちたる畢生の秘訣なり、武后の長安元年三月、東都大雪、味道以て瑞と爲して、百官を帥おて、入賀し、侍御史王求禮の呵罵する所と爲る、其の醜態此の如し、又父の喪に丁りて郷人の墓田を侵毀し、葬事の役使度に過ぎたるが故に、蕭至忠の爲めに劾奏せらる、其の人と爲りの取るに足らざること亦此の如し、然れども當代の賢相狄仁傑、武后が佳士を薦用せんとするの問に對へて、文學の縕藉なるは則ち蘇味道、李嶠、其の選なり、云云の語あり、渠が詞藻の才に至つては實に亦超凡にして、狄梁公を服せしむるに足るものあるを見るなり、此の作巧に崔馬二人が進官を寫すの外、別に奇構とすべきなきに似たれど、用うる所の故事皆な典贍にして、

莊麗館閣の好文字と推すに愧なし武后の能く之を優容せし亦全く此に頼らすんばあらざるなり

奉和幸韋嗣立山莊應制

李嶠

南洛師臣契東巖王佐居幽情遺綬冕宸眷囑樵漁制下峒
山蹕恩回灞水興松門駐旌蓋薛幄引簪裾石磴平黃陸烟
樓半紫虛雲霞仙路近琴酒俗塵躑喬木千齡外懸泉百丈
餘崖深經鍊藥穴古舊藏書樹宿搏風鳥池潛縱壑魚寧知
天子貴尚憶武侯廬

中宗の景龍三年十二月帝驪山の温湯に幸し歸駕同中書門下三品韋嗣立の山莊に臨む因て嗣立を封じて逍遙公と爲し群臣を合して詩を賦せしむ是より先き中宗修文館を闕廷に置き公卿以下の善く文

を爲くる者を選んで之が學士に充つ李嶠實に其の冠たり禁苑の游幸或は宗戚の讌集毎に學士畢く従はざるハ無く詩を賦し和を屬し上官昭容をして其の甲乙を品第せしめ優なる者ハ金帛を賜ふ時に於て諸武權を専らにし韋后制を稱す則天已に崩じ嬖豎誅に就くと雖帝の優柔なる日に荒職を事とす是の故に天下靡然として争つて文華を以て相尙び初唐の麗藻實に其の極盛に達したり開元天寶の世に及んで詩仙詩聖武を接して出で唐の文學終に千古に冠絶せし所以のもの亦源を此に發せりと云はざるべからず韋嗣立は韋后の遠族なり是を以て帝眷殊に渥く則ち駕幸山莊の事あり張燕公説文を作つて之を紀す極めて此の詩と相發明すべきものあり其の畧に云はく韋公體貞靜を含み思幽曠に叶ふ東山の曲に別業あり焉嵐氣野に入り榛煙谷を出つ石潭竹岸松齋藥碗虹泉電の如く射り雲木

虚に吟ず。恍惚として夢かと疑ひ。間關として術を忘る。茲れ所謂る丘壑の夔龍。衣冠の巢許なり。皇上聞て之を賞し。即はち公を逍遙公に拜し。其の居を名づけて。清虚原幽棲谷と曰ふ云云と。先づ此の文を觀て。當時の状を仿像し。然かる後。本篇を取て之を展讀せば。釋義を須おず。いて想已に半に過ぐべし。

本篇四句を以て一解とす。首四句は章嗣立が山莊と其の聖願を蒙る殊に厚きを言ひて。全篇を領起す。制下峒山蹕の四句は即はち臨幸の正文。石磴平黄陸の四句は山莊御醺の状。喬木千齡外の四句は莊中の勝概を括す。結四句は仍ほ莊中の風物に由つて比興の義を借り。首四句の意を申言して以て總束とせるなり。

起一解。南洛の句は是れ章嗣立に由て。聖願。東巖の句は是れ嗣立の山莊。幽情の句は是れ山莊中の嗣立。宸眷の句は是れ聖願に由つて。山莊。

叙置次第緩緩として起る。並に以て。行幸を引出すべきの楔子たるなり。武后制を東都に稱す。東都は古の洛陽にして。長安の東南に在り。故に南洛と云ふ。中宗の即位は仍ほ東都に於てす。神龍二年に於て始めて長安に還る。章嗣立は武后の朝より。歴事したるの老臣なり。故に帝南洛に在りし日より。早く嗣立と師臣の契ありし事を追言して。以て今日の聖眷を得たる所以を點醒す。師臣とは臣下にして之を師とする猶ほ伊尹太公の類の如きを謂ふなり。山莊は驪山鳳凰原の鸚鵡谷に在り。故に帝驪山の温湯に幸せし歸途を以て之に蒞む。而して驪山は實に長安の東に位す。故に東巖王佐居と曰ふなり。帝已に師臣を以て嗣立を遇す。其の王佐の才たる知るべし。然れども彼れは今此の東巖の山莊に住へり。自から應に衣冠絨冕の貴を遺れて。以て丘壑煙霞に嘯傲するの幽情高致あるべし。是の故にころ天子亦特に宸眷を

垂。れ。て。以。て。彼。れ。が。樵。漁。に。隨。伴。す。る。の。狀。を。囑。ん。ど。は。せ。ら。る。ゝ。な。り。如。此。に。立。言。し。て。天。恩。の。優。渥。嗣。立。の。襟。度。兩。な。が。ら。其。の。絶。頂。に。臻。ら。ざ。る。は。無。し。洵。と。に。辭。令。に。妙。な。る。も。の。三。四。二。句。は。即。は。ち。燕。公。が。文。中。の。邱。壑。夔。龍。衣。冠。巢。許。と。同。意。な。り。と。知。る。べ。し。

第二解四句前二句は是れ車駕山莊に幸す後二句は是れ山莊車駕を迎ふ制は勅旨なり昔黄帝崆峒の山に上り廣成子を見て至道の精を問ふ今帝驪山に幸して嗣立の山莊に臨む因て此の事を用おたり瀾水は即はち驪山の麓を流るゝもの帝特旨を以て優恩を垂れ瀾水より車駕を枉げて以て山莊に幸す是に於て松門閭寥の地遽かに天子の鳳旌羽蓋を駐め薛幄幽僻の居却つて朝臣の簪纓裳裾を引くことゝなりたり松門の二句僅かに十字のみ則はち山莊行幸の意を狀し盡くして遺憾なし何等簡練の筆なるや薛幄は猶ほ蘿帳と云はん

が如し楚辭に曰はく罔薛荔兮爲幄と即ち其の出所なり

第三解四句前二句は車駕の止まる所後二句は其の製醢の狀なり黃陸とは黃は土の色なり門に入り石磴を登ること數級則はち弘敞の園庭に出づ故に云ふなり庭に由つて進めば樓あり高く紫虛の中天に聳ゆ上に御坐を設け宴を此に張る故に雲霞縹緲として仙路に接するかと疑はれ琴酒の清興一として俗塵に遠ざからざるなきを覺ふ上文松門薛幄に緊接して以て石磴を出し又煙樓紫虛に緊接して以て雲霞を出す用筆の自在なる所謂水到り渠成なるものなり第四解四句毎句各一景物を寫す莊中の勝概を悉くす所以なり蓋し莊には重甍洞壑飛流瀑水の勝あり燕公の記文に石潭竹岸松齋藥碗虹泉電射雲木虛吟と謂ふもの是なり木は千齡の外に超ゆ其の甚だ古なるを知る泉は百丈の餘より懸る其の甚だ高きを見る崖谷の深

幽なる。殆んど仙者が煉藥の跡かと訝る。巖穴の古奥なる。乃ち神人
 藏書の所なる。母らんや。經は會經の意なり。會稽に禹穴あり。中に太古
 の書を藏す。是れ「穴古」の句の用うる所。俗注周の穆王書を大酉小酉二
 山に藏するの事を引くは當らざるに似たり。
 上文四解、一路叙して莊中の景物に到り、當に詠すべきの事此に盡き
 たり。因て結一解を以て通篇を束ね、起一解の意に應せり。然れども文
 勢若し上數解と月に一種の筆墨を成せば、稍散漫に涉り、索然意盡く
 るの憾あり。是を以て仍ほ上解景語の線を承け來り、樹鳥池魚を借て
 主人の身分を比況す。曰く樹に宿る所は即ち風に搏つの大鳥なり。
 池に潛むは即ち壑に縱なるの巨魚なり。山莊に幽居する所のもの
 は、即ち王佐師臣の大宰相たるなり。接續の跡渾然化し去つて筆力
 萬仞の石を轉ずるが如し。結句諸葛孔明卽廬三顧の事を用う、尤も山

莊の行幸に切なり。寧知天子貴。遙かに宸眷囑樵漁。と相首尾す。而して
 此の格外の恩を辱くする主人の榮耀言下に躍如たり。

韋嗣立山莊の行幸、實に當代の盛事。陪醜の文士、李嶠にして下。沈佺期
 宋之問等皆な侍蹕の列に在ざるは無し。今其の二三を後に繋げて、以
 て此の種應制莊重の文字を研究せんとするもの、一考に供ふ。宋之
 問が詩に曰はく

樞掖調梅暇。林園藝權初。入朝榮劍履。退食偶琴書。地隱東巖室。天廻北
 斗車。旌門聽霹靂。輦路屬扶疎。雲罕明丹壑。霜笳徹紫虛。水疑投石處。溪
 似釣璜餘。帝澤頒卮酒。人歡頌里閭。一承黃竹詠。長奉白茅居。

蘇頌が詩に曰はく

縱金寒野躡。步玉曉山幽。帝幄期松子。臣廬訪葛侯。百工徵往夢。七聖扈
 來游。斗柄乘時轉。台階捧日留。樹重巖瀨合。泉迸水光浮。石徑喧朝履。瑣

溪。擁。釣。舟。恩。如。犯。星。夜。歡。擬。濟。河。秋。不。學。堯。年。隱。空。令。傲。許。由。
是。れ。皆。な。長。律。を。以。て。す。る。も。の。而。し。て。沈。佺。期。武。平。一。等。は。絶。句。を。以。て。之。を。出。せ。り。沈。云。は。く

東。山。朝。日。翠。屏。開。北。闕。晴。空。綵。仗。來。喜。遇。天。文。七。曜。動。少。微。今。夜。近。三。台。
武。云。は。く

鳴。鑾。赫。赫。下。重。樓。羽。蓋。道。遙。向。一。邱。漢。日。惟。聞。白。衣。寵。唐。年。更。親。赤。松。游。
凡。う。同。時。に。在。つ。て。同。事。を。賦。す。る。者。は。之。を。駢。觀。し。て。其。の。立。言。命。意。の。異。處。を。咀。嚼。し。細。か。に。對。較。を。下。す。と。き。は。其。人。の。才。分。此。に。由。て。窺。ふ。べ。く。其。詩。の。工。拙。此。に。由。て。判。す。べ。し。其。の。功。實。に。千。百。言。を。累。ね。て。詩。法。を。辨。ず。る。に。勝。れる。も。の。あり。予。が。好。ん。で。此。を。爲。す。は。斷。じ。て。博。を。誇。り。多。を。貪。る。に。非。ず。亦。其。の。良。法。た。る。を。信。じ。て。疑。は。ざる。が。爲。め。の。み。讀。者。諸。を。諒。せ。よ。

白帝城懷古

陳子昂

日。落。滄。江。晚。停。橈。問。土。風。城。臨。巴。子。國。臺。沒。漢。主。宮。荒。服。仍。
周。甸。深。山。尙。禹。功。巖。懸。青。壁。斷。地。險。碧。流。通。古。木。生。雲。際。歸。
眺。出。霧。中。川。途。去。無。限。客。思。坐。何。窮。

白帝城は蜀の夔州に在り、後漢の初、公孫述の築て以て據りし所のものなり、山に據り江に臨み、三峽の險を扼す、展前賢の題詠に見ゆ、蓋し成都より荆南に赴くの第一勝絶の地たるなり、伯玉も亦蜀の梓州の人、詩意を審するに、舟路將さに楚に行かんとして、此を過ぎ、乃は是の作あるなり、起結各二句、起は白帝城を喚起し、結は懷古の意を收住す、中幅は各四句、前四は白帝城の古跡、後四は現時所見の景なり、懷古の地は岸上の城、懷古の人は舟中の我、故に滄江停橈を以て始まり、中に碧流歸帆を點じ、川途を以て之を一束す、是れ全詩の脈理なり、

落日滄江、橈を停めて以て問ふ。懐古の端を發する所以なり。城は三巴の地に臨む。三巴は周代の巴子國なり。故らに其の古名を用うるものは、懐古の本意なり。此の城公孫述始めて之を築き、三國蜀漢の時に及んで、劉玄、德、吳を撃ち、大に陸遜の敗ぶる所と爲り、遂に船舫を棄て、還つて此の城に至り、永安宮を作つて以て居る。後、竟に此に殂す。所謂る漢王宮是れなり。巴子國は元と邊鄙の境、五服の中に在つては、自から荒服に屬せり。然れども、亦猶ほ周家の疆土たるなり。禹の洪水を治する、三巴三峽の所在に於て尤も其の神功を見る。故に少陵が禹廟の詩亦、早知乘四載、疏鑿控三巴。と云へり。深山峭壁、幾百歲を經過すと雖、禹の功業は、則ち尙ほ儼然として見るべし。二句感慨反復、仍尙の兩虛字に於て其の神理を見る。尤も玩味に耐へたり。語尾禹功を出して下文現時所見の景を開らく。亦文字の過峽なり。

巖勢倒まに懸りて、青壁斷へんと欲す。乃ち是れ荒服深山の氣象。其の險や如此にして、而して碧流一綫、中間を疏通し、滾滾として絶ふる期なし。禹の大功に非ずんば、那んぞ此あるを得んや。古木は籠葱として高く、雲際に叢生し、歸帆は隱約として遙に霧中に出没す。一派峽中晦冥の景、寫し得て、雅健を極む。此の蒼茫に對して、百端交集る。則ち又焉んぞ懐古の情を起さざるを得ん。故に川途去無限、客思坐何窮。とは曰ふなり。此の種沈雄峭拔の筆、是れ伯玉の擅場を推す。李嶠、杜甫、徐宋、問之、盡が専はら、舖綴藻績を事とするに視れば、體製の同じからざるに坐すると雖、亦定とに其の敵に非ざるを見るなり。伯玉武后の重用する所と爲ると雖、時に箴規の言を進む、一味依阿して容を取るものに非ず。獨異記に載す、子昂初めて京に入るとき、人の爲めに知られず、適、胡琴を賣るものあり。其の價百萬、豪貴傳觀して、能く辨ずるもの

なし、子昂突出して左右を顧みて曰はく、千縉を聳して之を市はんと、衆驚き問へば即ち余此の樂を善くすと答ふ、皆な曰はく聞くことを得ん乎、曰はく明日宣陽里に集まるべしと、期の如くに偕に往けば、酒筭畢く具はりて胡琴を前に置けり、食畢りて子昂琴を捧げ語つて曰はく、蜀人陳子昂、文百軸あり、馳せて京轂に走るも、碌碌たる塵土、終に人に知られず、此の樂は賤工の役のみ、豈に心を留むるに宜しからんやと、立ろに擧て之を碎き、其の文百軸を以て徧ぬく會する者に贈る、一日の内、聲價都に溢れしと云ふ、渠が曠世の逸才乃ち爾るものあり、王適の稱して海内文宗と謂ふ、豈に我を欺かんや、

峴山懷古

秣馬臨荒甸、登高覽舊都、猶悲墮淚碣、尙想臥龍圖、城邑遙分楚、山川半入吳、丘陵徒自出、賢聖幾凋枯、野樹蒼烟斷、津

樓晚氣孤、誰知萬里客、懷古正踟躕。

此の篇亦蜀に由つて楚に出で、湖廣の襄陽を經る時の作、想ふに前詩と同時のものなるべし、襄陽は古への荊州の地、晋の時羊祜此に都督たり、毎ねに峴山の風景を愛し、樂んで此に遊ぶ、嘗つて酒を置き、從事鄒湛等を顧みて謂つて曰はく、宇宙ありてより、便はち此の山あり、由來賢達の此に登る、我と卿との如きもの多し、皆な湮滅して聞くことなし、人をして悲傷せしむ、若し百歳の後、知ることあらば、願はくは魂魄猶ほ此に登らんと、祜卒して民其の惠澤を懷ひ、碑を山に建つ、望む者流涕せざるは無し、因つて名けて墮淚碑と云ふ、是れ其の地尤も著名の事、又諸葛孔明が隆中の艸廬は實に此の襄陽城西に在り、孔明は蜀の賢相、羊祜は晋の名將なり、而して今は則ち茫茫たる貉の一邱を贏得するのみ、是れ伯玉が一幅懷古の涙の禁ずる能はざる所以、詩

十二句各四句を以て一頓す、詞意甚だ明亮、多く詞を費すを用みず、故に多贅せず、

荒句は前詩の所謂る「荒服仍周甸」の意、荆は古へ荆蠻と稱す、是れ周の荒服たるなり、孔明が八陣の圖を畫せしは必ずしも隆中の艸廬に於てせず、今借つて以て韻に叶はするのみ、城邑遙臨楚、山川半入吳、是れ岷山の形勝を寫すのみと雖、妙は上句「墮淚碣」を頂して、城郭是に昔人非なるの悲あり、下句の「臥龍圖」を承けて、三分の天下終に一統する能ざるの恨あり、周の穆王八駿の馬を聘せて西、崑崙の邱に登り、西王母に瑤池の上に見て、樂んで返るを忘る、王母爲めに歌つて云はく、「白雲在天、山陵自出」と其の意極めて悲涼、古今の人物賢不肖となく、皆な山陵中の物たるを免かれざるを哀しむ、漢武の所謂る歡樂極めて哀情多きものなり、此の詩丘陵の句此を用う、賢聖の句は蓋し羊祜が曾つて

歎。獻。せ。し。所。以。の。も。の。今。は。臥。龍。を。併。せ。て。其。の。中。に。在。り。少。陵。が。出。師。未。濟。身。先。死。長。使。英。雄。淚。滿。襟。と。此。の。沈。痛。を。同。う。せ。り、

韓昌黎は云はく、國朝盛文章、子昂始高蹈、と元遺山は云はく、沈宋橫馳翰墨場、風流初不應、齊梁論功若準平、吳例合著黃金鑄、子昂、此れ皆な口を極めて伯玉を稱揚す、我が前詩の末に論ずる所と相符す、誠に渠が長律に於てすら其の雅正雄健なる筆墨の畦徑に蟬脫すること一に此の如し、況んや古詩感遇の諸篇の人をして目四海を空し、神入極に遊ぶの概あらしむるをや、曰はく、陳子昂以其古詩爲古詩、弗取也、と吁、噓、是れ何等の妄言、

贈蘇味道

杜審言

北。地。寒。應。苦。南。城。戍。不。歸。邊。聲。亂。羌。笛。朔。氣。捲。戎。衣。雨。雪。關。山。暗。風。霜。艸。木。稀。胡。兵。戰。欲。盡。漢。卒。尙。重。圍。雲。淨。妖。星。落。秋。

高塞馬肥據鞅雄劔動搖筆羽書飛興駕還京邑朋遊滿帝畿方期來獻凱歌舞共春暉

蘇味道天官侍郎たりしとき審言其の下僚に居りて選試の集判を司る忽然として人に語つて曰はく蘇味道は必ず死せんと人驚て其の故を問へば曰はく彼れ我が判詞の美を見れば自から當さに羞死すべきのみと杜必簡亦實に一箇の快男子其の四友を以て目せらるゝ味道に於て猶ほ且つ此の如し宜なり渠が傲岸矜誕眼中に人なく終に屈宋を得て衙官とせんと云へること五律の部參 觀すべし此の詩必簡以て味道に贈る却て一詞の之を侵陵せるものなし蓋し中宗即位の年大に先朝の舊臣を黜す味道既に張易之の黨なるを以て斥けられ必簡も亦易之兄弟と交通せるを以て嶺外に配流す幾もなくして召還せられたりと雖其の同難の士齊しく一番の辛楚を嘗め盡くしたるを以て

當年の豪氣漸やく消磨し相憐むの情深かきを加へたるが故なるべし詩に據れば明かに味道當時幽朔に従軍せり味道の從軍は史に明文なし詩中に興駕還京邑朋遊滿帝畿の語あり因つて考ふれば此の詩の成るは中宗東都より長安に還幸し修文館を設けて大に詞章の士を集め必簡亦沈宋等と共に召されて其の直學士と爲りし時に在るべし今更に之を史に徵するに中宗の還幸は神龍二年の冬十月にして時に并州長史張仁愿を以て檢校左屯衛大將軍と爲し更らに朔方道の總管とす景龍二年三月に及んで張仁愿三受降城を塞上に築て以て突厥の入寇に備ふ而して修文館の設けは實に其の年の四月に在り此を以て推せば味道の從軍は全く張仁愿に従つて朔方に在るものにして時に必簡は己に召還せられ前きに同じく譴選せられたる沈宋輩と稍々相見ることを得たるも味道のみ猶ほ此の恩命に

洩。れ。た。る。を。以。て。此。詩。を。作。り。一。日。も。早。や。く。京。師。に。還。ら。ん。こ。と。を。望。む。
 の。意。を。致。せ。し。に。疑。な。き。な。り。大。典。の。解。義。此。の。詩。興。駕。の。句。天。子。の。親。征。
 に。似。た。る。を。疑。ひ。而。し。て。史。に。其。の。事。な。き。を。以。て。彼。の。崔。著。作。融。が。武。攸。暨。
 に。従。つ。て。出。塞。せ。る。を。送。く。る。の。詩。に。亦五律の部に在り君。王。を。以。て。攸。暨。を。指。稱。
 し。た。る。に。齊。し。く。或。は。復。た。攸。暨。を。擬。し。た。る。な。ら。ん。と。謂。ふ。是。れ。既。に。史。
 に。考。へ。ず。又。深。か。く。詩。語。を。味。は。さ。る。も。の。に。し。て。妄。謬。乖。舛。未。だ。此。よ。り。
 甚。し。き。は。非。ず。詩。に。は。唯。興。駕。還。京。邑。と。あ。り。曾。つ。て。興。駕。の。塞。外。に。親。征。
 せ。し。を。言。は。ず。是。れ。明。ら。か。に。中。宗。の。東。都。よ。り。還。幸。あ。り。し。事。を。指。す。な。
 り。且。つ。諸。武。擅。權。の。世。如。何。に。稱。呼。の。濫。を。致。せ。し。と。確。將。た。武。攸。暨。は。爵。
 王。に。封。せ。ら。れ。た。る。を。以。て。君。王。と。曰。ふ。は。或。は。當。さ。に。有。る。べ。き。の。事。た。
 り。と。確。斷。し。て。直。ち。に。攸。暨。が。軍。を。指。し。て。興。駕。と。は。云。ふ。べ。か。ら。ず。余。は。
 必。ず。此。の。事。な。き。を。保。す。る。な。り。德。川。氏。の。世。曲。學。の。儒。幕。府。を。擬。す。る。に。

王室を以てし、視として耻を知らず、大典が如きも亦此等の慣習に誤
 まられ、漫然臆度して終に必簡に趣ゆるに大義名分を辨識せざるの
 一文人とす、是れ余が茲に細かに考證を加へ、批謬を指摘して、以て必
 簡が爲めに、不白の冤を雪ぐの己むを得ざる所以なり、
 起四句味道が従軍の地より筆を着す、南城と云ふものは胡地より之
 を南するなり、而して、邊聲亂羌笛、は第一句の寒、應苦を頂し、殺氣滿戎
 衣、は次句の、戍不歸を頂す、全篇は乃はち此の兩意、若寒一意を以て貫
 ぬかれたり、

雨雪關山暗、の四句は苦寒を狀する所以なり、然れども、胡兵の二語、已
 に下文に一線を過渡し、漸やく轉じて、不歸の意に入るなり、雲淨妖星
 落、の四句は上文、戰欲盡の意を承け、味道が従軍の状態に及ぶ、雲淨く
 星落つれば、兵氛已に消ゆ、是れ、戍士の宜しく歸るべきの候、而して猶

ほ。且。つ。鞍。に。據。つ。て。馬。撥。の。態。に。倣。ひ。筆。を。搖。か。し。て。陳。琳。の。檄。を。草。す。是。れ。其。の。人。未。だ。歸。ら。ざる。なり。結。四。句。の。意。は。既。に。上。段。に。分。疏。し。復。た。餘。蘊。な。も。看。者。自。か。ら。早。やく。心。下。に。領。悟。し。た。る。べし。來。獻。凱。と。云。ふ。も。の。は。味。道。の。爲。め。に。其。の。遣。戍。の。醜。を。回。護。す。歌。舞。共。春。暉。其。の。中。暗。に。雨。露。恩。赦。を。望。む。の。意。を。寓。し。たり。

酬蘇員外味玄夏晚寓直省中見贈 沈佺期

竝。命。登。仙。閣。通。宵。直。禮。闈。大。官。供。宿。膳。侍。史。護。朝。衣。卷。幔。天。河。入。開。窻。月。露。微。小。池。殘。暑。退。高。樹。早。涼。歸。冠。劍。無。時。釋。軒。車。待。漏。飛。明。朝。題。漢。柱。三。署。有。光。輝。

前四句は是れ寓直中四句は是れ夏晚の景後四句は蘇員外味玄が贈らるゝに酬ゆるの意なり味玄は蓋し味道の弟當時佺期と俱に員外郎たり秦の時始めて郎中令を置く其の屬官に三署あり署中に郎中

侍郎を置きて三署に分隸す漢も亦之に因れり唐制に至つて每署に員外郎一員を置き禁中に直宿して以て非常に備へしむ是れ味玄が省中に寓直せる所以を知るべし竝命と云ふものは二人同時に此の官を拜せしなり禮闈とは尙書省に崇禮建禮の二門あり參仕のもの崇禮門より入り建禮門より退朝す此の二門實に出入の要關にして齊しく禮を以て名けたり故に尙書省を指して禮闈と云へり此に由つて味玄の官は尙書員外郎たるを知るなり大官は少府の屬官にして内廷の膳部を主とするものなり凡そ尙書郎入直の時は中官其の枕衾を供し大官其の食膳を供す又女侍史二人をして被を挈げ衣を熏せしむ是れ漢の制度にして直衛の臣を優遇する所以のもの至れりと謂ふべし今此の詩も亦云ふ大官供宿膳侍史護朝衣と然れば唐も亦漢の制度に依りしと見えたり以上味玄が寓直の狀を寫すなり

時に三伏己に晩れ、九秋漸やく近し、直廬の光景自から當さに清絶な
るべし、幔を卷かんか、天上清淺の銀河は動て堂に入るか、と疑ひ窓を
開けは、月下星晶の風露は微に襟を霑ほすを覺ふ、御苑の小池は漣漪
を生じて、殘暑全く退けり、禁墻の高樹は濃陰を垂れて、早涼己に歸れ
り、是れ夏晩の景を寫す妙は、天河月露の宮庭に切なるに在り、而して
此の好景に對して自から吟思を生ず、味玄が詩を作りて、佳期に贈り
しもの従つて見るべきなり、

然れども躬己に承直す、公事其の身に在り、固より吟詠を以て職務を
廢することを得ず、故に冠劍は之を釋くに時なきなり、五更鷄鳴、率先
に參朝して以て起居を候す、故に軒車は漏を待て飛ばさ、いるべから
ざるなり、漢の時田鳳、尙書郎と爲り、容儀端正なり、其の事を奏する毎
に靈帝之を目送り、因て親しく殿柱の上に題して曰はく、堂堂乎たる

は張京兆と田郎となり、是れ尙書郎の故事尤も味玄に切なり、因て
之を用う言ふこゝろは、味玄の容儀固より田鳳に譲らずして、其の才
藻亦贈らるゝの詩の如きあり、明日早朝して事を奏せば、天子必ず之
を嘉獎し、以て其の光輝を三署中に施こすこと、一に靈帝題柱の故事
の如きものあるべしとなり、三署は先きに秦漢の制に依りて之を注
す、唐に在つて、則はち門下中書尙書の三省を指すものと知るべし、
沈佺期、有唐律詩の冠冕、宋之間と名を齊う、沈宋の名千古に亘り
て朽ず、張燕公は曰はく、沈三兄の詩は、須らく他に第一を還すべしと、
其の一時に推重せらるゝ此の如し、其の聲病を回忌し、句を約め篇を
準し、格律を著定して、遂に近體を成せしは、實に錦繡の文を爲すが如
し、學者之を宗尙して、蘇李居前、沈宋比肩の語あるに至れり、蓋し近體
の沈宋二人に始まるは、猶ほ五言の蘇武李陵より始まれるが如く、な

りとの意にして、洵とに曹劉をして降格して之を爲さしむるも、殆んど其の優劣を定むる能はざるものあるべし、然れども今之間の詩と之を對較するに、其の才氣ハ稍彼れに亞ぐもの、如し、中宗の昆明池に行幸の時、上官昭容二人を品第して宋を沈の上に置きしは、洵とに公論と謂ふべし、佺期武后の朝考功員外郎に累遷したるも、中宗の即位に當て、亦杜審言等と俱に嶺表に配流し、修文館成るに及んで、召還せられて直學士と爲る、中宗數、近臣學士と宴集し、工部尙書張錫をして談容娘を舞はしめ、將作大匠宗晉卿に渾脫の舞、左衛將軍張洽に黃鸞の舞、左金吾將軍杜元談に婆羅門の誦咒等を作さしめて樂みとす、群臣大僚則ち甘んじて此の優倡の態に效ふて愧づる所なし、又嘗つて侍宴の文臣をして回波の辭を作らしむ、沈佺期乃ち歌ふて曰はく、回波爾時佺期、流向嶺外生歸、身名已蒙齒錄、袍笏未復牙緋、と帝因

て之に牙緋を賜ふ、此の餘の群臣亦或は詔語を陳し、或は自から榮爵を求む、獨り諫議大夫李景伯曰、回波爾持酒卮、微臣職在箴規、侍宴既過三爵、誼諱竊恐非儀、と帝悅ばず、今按するに、佺期が詞を弄し、寵を丐ふ之を、李諫議の意義嚴正なるに較べては、眞に羞死すべきの醜態あり、然れども宋之問が張仲之の恩に復ふるに仇を以てし、又劉希夷を非命に死せしめし如きに視れば、猶ほ未減斟量すべきを覺ふ、宋は終に自盡を賜ひ、沈ハ開元の初まで存して、壽を以て終はれり、是れ亦天道の然るありと謂ふべきもの歟、

同韋舍人早朝

閭闔連雲起、巖廊拂霧開、玉珂龍影度、珠履鴈行來、長樂宵鐘盡、明光曉奏催、一經傳舊德、五子擢英材、儼若神仙去、紛從霄漢回、千春奉休曆、分禁喜趨陪、

「閭闔」は天門なり、以て宮禁の門に喩ふ、漢書董仲舒の傳に「遊於巖廊之上の語見ゆ、晋灼の注に巖、峻の廊を謂ふとあり、然れば巖廊は其の構造に由て之を形容するもの巖、石の巖に非ず、門は雲に連なり、廊ハ霧を拂ふ、九重の城闕、曙色正に動くの氣象なり、既に玉珂珊瑚として龍馬の影忽ち度り、珠履囊袋として鴻雁の列を正して來る、是れ果して何物ぞ、蓋し長樂觀の宵鐘は既に盡き、明光宮の曉奏は方さに催せるを以て群臣百官陸續として闕庭に參朝するなり、劈頭より一連六句、力を極めて紫宸早朝莊嚴雄麗の景を状す、而して我れと韋舍人とは自から其の中に在るなり、是れ前半段、

漢の章賢丞相と爲り、其の子玄成復た明經を以て繼で相位に登る、時人語つて曰はく、子に黄金滿籬を遺すは、子に一經を教ふるに如かずと、此れ同姓を以て韋舍人父子に擬す、韋舍人は韋承慶にして、現に中

書舍人に官し詔誥を掌りて、而して其の父韋思謙は亦夙とに名を著はせり、用事適切と稱すへし、晋の司馬景王、中書郎虞松を以て表を草せしむるに、其の意に可はず更らに之を改めしむ、時に鍾會亦中書郎を以て松と同僚に在り、松が憂色あるを見て、其の草稿を取り、爲めに文中の五字を更定し、以て景王に上るに、景王大に稱譽を加へ、眞に王佐の才なりと云へり、是れ「五字擢英才」の出典、前句は韋の姓に因り、後句は其の官に就きて、以て之を贊揚す、典雅工整の至と謂はざる可けんや、其の「五字」に意を用ゐたるは、想ふに韋も亦五言の體を能くするものなりしなるべし、獨り中書郎の故事に允協せるのみならず、是れ死事活用の法なり、儼若神仙去、紛從霄漢回、是れ起二句を承くと雖、專はら韋が早朝の狀を帶定して言ふなり、上段「玉珂珠履亦早朝を狀するなり、然かれども彼れは百官を泛稱し、此れは韋一人に就きて之を譽

む、故に重複に涉らざるなり、休曆は休明の曆運の意猶ほ昭代と言ふが如し、結一句は佺期自から言ひ此の英才と同じく早朝するを榮とするの意なり、舍人は已に中書省に屬す、而して沈の考功郎は尙書省の部下なり、故に「分禁」と曰ふ、是れ後半段。

奉和幸長安故城未央宮應制 宋之問

漢王未息戰。蕭相乃營宮。壯麗一朝盡。威靈千載空。皇明悵前跡。置酒宴群公。寒輕綵仗外。春發幔城中。樂思廻斜日。歌詞繼大風。今朝天子貴。不假叔孫通。

未央宮より着筆して起一段とし、天子の行幸を中一段とし、漢時の故宮なるに因りて天子の聖徳を頌し、以て奉和應制の意を見る、是れを結一段とす、亦各四句を以て一頓せり、用うる所皆を漢の本事、而して歩々漢を抑し唐を揚す、立言歸重の體宜しく如此なるべきなり、

漢高始めて咸陽に都して蕭何乃ほち未央宮を修す、高祖見て怒て曰はく、天下洵洵として戦に苦しむこと數載、成敗は未だ知るべからず、是れ何んぞ宮室を治むることの度に過ぎたるや、蕭何答へて曰はく、天子は四海を以て家と爲す、壯麗に非ざれば以て威を重くすることなしと、是れ蕭何營宮の意は實に其の壯麗を借つて以て威を千載に保たんと欲したり、而して今は安くに在るや、壯麗己に盡きて威靈も亦空し、能く山河を千秋の下に固からしむるは宮觀の壯麗に非ずして、人君の徳澤に在り、此れ其の的例に非ずや、此の意を以て端を發す、美を唐の天子に歸するなり、直ちに其の事を叙するに過ぎず、中無数の議論を藏ず、眞に好觀なり、近代吳梅村の絶句に云ふ、蕭相營私第、他年畏勢家、豈知未央殿、壯麗只棲鴉、此は則ち蕭何が勢家の豪奪する所と爲らんことを畏れて、特に其の私第を營むに儉素を用ひ

たる事實を擧げ、彼れが此の先見の明あるに拘はらず、其の君に勸めて、徒らに宮殿を壯麗にし、終に亡國棲鴉の端と爲るを思はざりしは、國に忠なる者と謂ふべからざるの意と爲したり。然れども尺幅中に史家の鐵案を下したるは、極めて本篇冒頭四句の神を取りたるものに近かし。

「皇明悵前跡」は吾皇の明、彼の壯麗の一朝にして盡きたるを悵思するなり、爰に車駕を其の地に出して、宴を群公に賜ふ詞を設くる此の如くなれば、中宗の行幸賜宴は、是れ前代の興亡を鑒みたるものにして、逸豫を圖り荒譙に耽るものに非ず、極めて要緊なきの游醜も亦然はだ關係ある事と爲れり。是れを詩人頌揚の體とす、綵仗は兵衛の儀仗、幔城は幕を張りて駐駕の所とす、即ち帳殿の意なり、正さに行幸を狀して、「寒輕春發」一派春臺熙熙の景象洋洋として充滿せり。

魯陽公戈を揮つて白日の將さに傾かんとするを廻へず、詩家習用の典用、おて以て唐の威靈を見るなり、此の譙の樂しき正さに日の晏けんことを恐る幸に、吾皇の威靈に頼りて之を既に斜なるに廻へずことを得たるなり、而して宸章の美なるは亦以て漢高が大風の歌詞に繼ぐべきものあり、漢の故城なれば漢高の本事を言うるは自からは、是れ當行の語なり、然れども仍ほ魯戈回日の一典を陪とするもの、此の詩漢高を詠じたるものにあらざるを明らかにせんが爲めなり、而して奉和の意亦箇中に見はる、漢高の始めて天下を定むるや、叔孫通をして禮樂を制定せしめ、乃はち今日にして皇帝たるの貴きを知る、と云へり、吾皇の如きは聰明睿聖、威嚴莊重、自然に具備せり、豈に必ずしも叔孫を假りて後始めて其の貴を知らん耶、是れ所謂立言歸重の意なり。

宋之問が應制の體に工なるは五言律詩にして下、已に屢之を言へり、渠が人と爲りを以て其の言を廢すべからざるは此あるを以てのみ、我れ七言古詩の下に於て其の性情の偽なるを極言す然れども應制の體は本と當代を揄揚するに在るを以て時に必ずしも塗飾を妨げざるものあり然かり而して後世試律の源亦實に此に啓らく、學者の尤も知らざるべからざる所なり則天武后龍門に幸せしとき左史東方虬詩先づ成る后之に錦袍を賜ふ俄頃にして之間も亦詩を献す后之を覽て嗟賞し虬に賜ふ所のものを奪つて以て之間に賜ふ是れ詩家の今に至るまで藉藉として歎羨する所のもの亦渠が獨り此の體に擅なる所を見るに足れり、

奉和晦日幸昆明池應制

春豫靈池會滄波、帳殿開舟凌石鯨、度槎拂斗牛、廻節晦黃

全落春遲柳、暗催象溟看、浴景燒劫辨、沈灰鑄飲周、文樂汾歌、漢武才不愁、明月盡自有夜珠來。

中宗正月晦日を以て昆明池に幸し詩を賦す群臣應制のもの百餘篇に充たり帝因て綵樓を帳殿の前に結び上官昭容に命じて其の上に登り詠進の什中に就き特に一首を選して新翻の御製曲に譜入せしむ群臣皆な樓下に集まり争つて何んの詩の此の榮選に入るべきやを候す須臾にして紙落ちて飛ぶが如し是れ皆を選に入らざるものなり羣臣各其名を認め之を懷にして退く惟沈佺期宋之問が二詩の下らざるあり時を移すに及んで忽ち一紙の飛墜するを見る競取つて之を觀れば乃ち沈佺期の詩なり紙末に昭容の評語あり曰はく二詩の工力は悉く敵す然かれども沈が詩の落句詞氣已に竭きたり宋は猶ほ陡健にして驚擧せりと沈佺期乃ち伏して敢て復た争

はず、是に於て宋之間の作獨り中に留り、叶樂の榮に與かる事を得たりと云ふ、然れば之間の此の作は當時百餘篇の中に於て、特に第一甲の第一名を占めしものなり、通首典重高華、堂皇瑰麗、讀一過毎に未だ曾つて上官昭容が鑑識の精甄拔の當を嗟歎せずんばあらず、起四句昆明池の行幸を領起す、是れ破題なり、次六句は二句毎に一層を成し、層層相銜んで生ず、蓋し晦日を寫すもの一層、池を寫すもの一層、幸を寫すもの一層なり、結二句是れ總束、晦日より翻進して巧に昆明に映帶せり、此の二句用意の靈妙、實に渠が勁敵沈雲卿を屈服せしめたる所以なり、

昆明池は漢の武帝の創鑿せし所に於て、則ち此池に關する許多の掌故の武帝の時に出版るもの最も多く、此の詩亦所々に之を探りて以て一篇を組織したり、今先づ詩中用うる所のものを茲に滙録して然かる後詩義の解釋を試みんとす、是れ讀者が披閱上に於て尤も便益ならんことを思へばあり、按ずるに池中に豫章臺あり、石を刻して鯨魚と爲す、雷雨の至る毎に、此の石鯨嗚吼して鬣尾皆な動く云ふ、又其の側に石人二箇を安置し、牽牛織女の形を刻みたり、是れ蓋し池を以て天上の銀河に比擬せしに由るなり、此の篇三四の句之を用う、杜少陵が秋興にも亦、織女機絲虛夜月、石鯨鱗甲動秋風と云へり、此の諸物象の唐時に現存したりしを證すべきなり、武帝の初めて此の池を鑿するに當りて、池底より黒灰を得たり、帝恠んで東方朔に問ふ、朔曰はく、碧眼胡僧の至るを待て之に問ふ可しと、後ち梵人竺法蘭の入朝に及び之を問へば、世界滅絶の時、劫火洞燒す、是れ劫燒の餘灰なりと答ふ、即ち、燒劫の句の用うる所なり、又池中に神池と呼ぶあり、白鹿原に通ず、原上の人魚を釣りしに、綸絶えて去れり、其の魚武帝の夢

に見はれ、口中の鈎を去らんことを求む、後三日にして帝池上に游幸す、大魚の索を銜んで游泳するを見る、帝曰はく、豈に朕が夢みし所のもの歟と、因て鈎を去つて放ち遣らしむ、又三日にして帝復た池濱に至るに、明珠一雙を得たり、帝曰はく、豈に昔魚の報耶と、事は三秦記に見ゆ、末句、自有夜珠來、此の事を活用したるなり、

「春豫」は春日當さに游豫すべきの時、故を以て天子昆明の靈池に幸し、百僚を會して讌を賜ふ、滄波溶溶として帳殿正に開けり、乃はち桂舟に棹して、石鱗の側を凌ぎ、牽牛織女の像畔を度れば、恍乎として眞に天漢に沂るが如く、宛かも彼の張竊の一槎の斗牛を拂ふて回るの想あり、以上四句、昆明游幸、盡く之を包括す、絶妙の起法なり、賞莢は瑞艸、王者賢聖なるときは階下に生ず、此の草、月初より月半に至る、日に一笑を生じ、十六日より月末に至る、日に一笑を落し、晦日に至つて盡く、

是の日、即はち晦日なるを以て、節晦賞全盡」と云へり、此に由つて晦日たるは明白なれども、未だ其の何月たるやを知るべからず、故に早春の光景、春暹柳暗催の一句を補寫し、其の正月たるを點醒したり、昆明の池は原と滄溟に象どる、其の廣きこと海の如くなれば、出日の浴景を看るに宜し、而して池底已に却灰ありと傳ふれば、正さに復た之を檢點すべきに堪へたり、今日の游豈に樂からずや、周の天子諸侯を讌して、諸侯之を歎美し、魚藻の篇を歌ふ、其の詞に曰はく、王在在鎬、豈樂飲酒と、是れ鎬飲の事、又漢の武帝汾陰后土の祠に幸し、群臣と讌して、歡甚し、即はち自から秋風の辭を作りて之を歌ふ、是れ汾歌の事、周漢帝王の盛事、援し來つて、今日の美の此等に擬ぶべきとを見るなり、或は晦日、月なきを以て遺憾なりとするものあらん、然れども、此れ亦決して愁ふ可きを見ず、何んとなれば、此の池固より一雙の明珠の以て

月光に代ふべきものあればなり。明月「夜珠」語に關照あり、亦尋常習用の文字に屬す、而して此を本篇の結處に置きて覺へず。一は晦日に切に、一は昆明に切なり。是を神に入り化に入ると曰ふ。昭容一女子にて爾かく、其の陡健、竊擧を稱す、豈に慧眼の人に非ずや、沈佺期の作も亦一時の選、終に宋に一等を輸すと雖、固より昭容をして暫らく其の優劣を判するに踴躍せしめたるものなり、因て後に具録す

法駕乘春轉、神池象漢回。雙星遺舊石、孤月隱殘灰。戰鷁逢時去、恩魚望幸來。山花緹騎繞、堤柳幔城開。思逸橫汾唱、歡留宴錦盃。微臣雕朽質、羞覩豫章材。

按するに此の詩、孤月隱殘灰は、晦日月隠れて見えざると、池底の切灰見るべからざるとを、五字の中に雙關す、其の工緻亦之問の作にも見

えざる所なり、結末落ちて自家の身上に到り、池に豫章臺あるを以て借つて謙遜の意を表す、完整ならざるに非ず、唯結末に作者の身分を見るは應制の常套にして、宋が作の善く意表に出づるが如くならず、昭容の所謂る落句、詞氣已に竭くとは此を謂ふなり。

和姚給事寓直之作

清論滿朝陽、高才拜夕郎。還從避馬路、來接珥貂行。籠就黃扉日、威迴白簡霜。柏臺遷鳥茂、蘭署得人芳。禁靜鐘初徹、更踈漏漸長。曉河低武庫、流火度文昌。寓直光輝重、乘秋藻翰揚。暗投空欲報、下調不成章。

此れ亦寓直に和する詩、沈佺期の酬蘇員外寓直省中の作に似たり、姚給事時に侍御史に因つて門下省の給事、黃門の職に遷陞す、詩併せて其の事を言ふ、則はち又蘇味道が聞崔馬二御史並登相臺の作と相似

たり、其の用うる所の故事の彼の二篇と相出入するものあるは此れが爲めなり、詩前後二大段各八句を以てす、清論より蘭署の句に至る、姚が給事黃門の官を拜せしに筆を起こし、其の侍御史たり、日善く其の職に協ひたる事を追言して省官の人を得たるを喜ぶなり、是れ前大段「禁靜」の句より末句に至る、先づ姚の寓直の景を狀し、其の詠藻あるを寫し、終に自己が和章を賦したる謙下の意を以て結とす、是れ後大段なり、更に之を拆説すれば、仍ほ四句毎に一頓したるものと見て妨なきなり、

唐の省官多く清を以て稱すること、前きに已に注明したるが如し、清論とは省中の論議なり、朝陽は朝日、以て禁廷に擬す、姚が高才の名籍々として廷闕に滿ちたるを謂ふ、是を以て入つて給事黃門の職を拜する事となりたるなり、漢制給事黃門の職は日暮に青瑣門に入對す、

故に夕郎の名あるなり、後漢の桓典侍御史と爲り、宦者之を畏憚す、典は常に馳馬に乗せり、京師之が爲めに語つて曰はく、行々且止まり、馳馬の御史を避けよと、是れ避馬の故事、侍中の冠は貂尾を以て飾とす、珥は挿の義なり、則ち給事黃門の官の戴く所なり、姚が名聲の藉甚なり、其の侍御史たるべき彼の桓典が如くに人に畏敬せられたるに由るものにして、今や夕郎を拜す、則ち此の貂冠の班列に入りしなり、故に「還從避馬路、來接珥貂行」と曰ふ、黃扉は黃門なり、御史の彈文は白簡を用ぬ、其の威風霜の如きに象とりて又霜臺の名あり、寵就黃扉日と云ふは姚が新たに給事と爲りしを申言するものにして、就日の語は自から冒頭の朝陽に吸應せり、威迴の句は御史たり、日を申言するなり、柏臺の鳥鳥、是れ御史の事、蘭署は即ち省臺なり、此の二句亦唯、其の前後の官職に就きて之を言ふ、曰はく「茂、曰はく「芳、姚を

賛美する所、以なり、前大段

姚已に省官と爲りたれば、例に準いて禁中に寓直せざる可からず、禁闕鐘靜かに宮漏更長し、天上文昌武曲の二星、紫微大帝の居に相鄰なれり、宮廷の制作亦之に準し、正殿の左右、一を武庫とし、一を文昌殿とす、曉天の銀河は漸やく武庫の上に低れ、七月の流火は正さに文昌殿の角を度る、天の將さに曙んとするを言ふ、流火は流星、詩經に「七月流火」とあり、之を用う、以上直夜見る所の景、因つて次句「寓直」の二字を以て之を一束し、又直ちに「光輝重」の三字を以て、姚が榮遷の意を申へ、前大段をも總束したり、姚是に於てか寓直の詩あり、其の藻翰彩を騰ぐ、終に我に示して和を求めらる、是れ明珠の暗投に非ざるを得ん、耶、何んとなれば、我の如きは固より巴人下里の調、強て之が和を試んとするも、實に章を成すこと能はざるものなればなり、漢の鄒陽が上書に

云はく、明月の珠、夜光の璧も、暗夜人に投せば、衆劍を按いて相勝ざるはなしと、此の語之を此に用ひ、上文「流火」「光輝」等の詞に相映發して、異様の組織を成す、是れ文字の灰線なり、後大段

前後の二段穩勻停妥、蘇味道沈佺期等が作と相對して、練格の法を發明すべし、初學の士尤も宜しく回味を施すべきなり、

早發始興江口至盧氏村作

候曉踰閩嶂。乘春望越臺。宿雲鵬際落。殘月蚌中開。薜荔搖青氣。桄榔翳碧苔。桂香多露裊。石響細泉回。抱葉玄猿嘯。銜花翡翠來。南中雖可悅。北思日悠哉。鬢髮俄成素。丹心已作灰。何當首歸路。行翦故園萊。

此れ宋之間中宗即位の初、張易之が黨なるを以て嶺外に配謫せられし

時の作なり、始興江は廣東の韶州府治に在り、即ち古への閩越の地なり、起四句早發を領起し、中八句南中の風物を歴叙し、反挑して、謫選の懐に入る、結四句は旅况蕭條の状を述べ、以て召還を望むの意を致したり、

曉に始興江口より發して、閩中の嶂嶺を踰ゆれば、則ち遙かに越王臺を望む、臺は漢の初め南越王趙佗の山に因りて築きしものなり、北溟の鲲化して鵬と爲りて、南溟を圖る、鵬際と云ふものは、其の地の南陸たるを見は、さんが爲めなり、明月の珠は、蚌中より生ず、蚌は亦南海の産する所、二語並に下文の南中の風物を開出する所以にして、鵬を以て宿雲を形容し、蚌を以て殘月を形容したれば、亦實に早發の光景を帶言するなり、筆勢候曉より一氣串下して、以て後の一段を轉出す、開闔卷舒の妙を極む、

「薛荔」桃柳の句より、玄猿「翡翠」の一聯に至る、是れ題面の至虚氏村の間に見る所のものにして、皆南土の風光なり、薛荔は藤蘿の一種、桃柳は棕櫚に類し、南中の特産たり、玄猿翡翠亦尤も多く南方炎熱の地に産す、青氣は嵐翠の氣なり、曰はく、搖曰はく、翳曰はく、多露曰はく、細泉、妙は並に曉景を離れざるに在り、南中雖可悦、二句上無數の景物を收攝し、北思日悠哉、二轉して、郷國の感に入る、語格散に似て、散ならず、此れ轉接の尤も筆力を見るものなり、

謫選憂辭の甚しき、鬢髮も亦已に變じ、丹心も亦已に灰したり、何時か恩赦の命を得て、歸路に首途し、故園の菜菜を剪つて之を餐するの日を見ることを得ん歟、結四句は南中の悦ぶべきを見る、雖終に北思の懐を去る能はざる所以を言ふ、首は向の義なり、菜は是れ故園の風物上、南中の風物に映合せしむるなり、

放。臣。逐。子。侘。傑。徬。徨。一。て。艱。苦。を。備。嘗。す。と。雖。其。の。君。國。を。念。ふ。の。至。誠。は。曾。て。一。日。も。之。を。忘。れ。ず。是。に。於。て。始。め。て。歌。歌。の。懷。を。見。る。な。り。乃。は。ち。謫。遷。の。苦。頭。髪。を。し。て。白。か。ら。し。む。る。も。の。あ。る。も。豈。に。其。の。一。片。の。丹。心。を。し。て。變。じ。て。灰。と。爲。ら。し。む。べ。けん。や。丹。心。の。五。字。適。其。の。苦。况。を。形。容。す。る。の。語。に。過。ぎ。ず。然。れ。ど。も。之。間。が。人。と。爲。り。覺。へ。ず。言。表。に。溢。出。す。其。の。心。術。の。壞。掩。ふ。べ。か。ら。ざ。る。な。り。若。し。深。文。階。論。者。あ。り。て。直。ち。に。此。を。粘。し。て。其。の。不。忠。不。義。を。自。白。せ。し。も。の。な。り。と。云。ふ。も。の。あ。ら。ば。知。ら。ず。之。問。將。た。何。の。語。を。以。て。之。に。答。へ。ん。

同。餞。楊。將。軍。兼。原。州。都。督。御。史。中。丞。蘇。頌。
右。地。接。龜。沙。中。朝。任。虎。牙。然。明。方。改。俗。去。病。不。爲。家。將。禮。登。壇。盛。軍。容。出。塞。華。朔。風。搖。漢。鼓。邊。月。思。胡。笳。旗。合。無。邀。正。冠。危。有。觸。邪。當。看。勞。旋。日。及。此。御。溝。花。

蘇頌は開元中相位に登る、燕公張説の姚元之と合はずして岳州に謫せらるゝや、其の上る所の五君詠を讀み、獻秋流涕して以て説を釋さんことを玄宗に奏請せしものなり、詳かに五律張説の條下に見ゆ是の篇楊將軍が新たに原州都督を以て御史中丞を兼ね、出て、邊塞を鎮するを送くるの詩なり、既に出で、邊塞を鎮す、重んずる所は原州都督に在り、故に詩中專はら武將の事を極寫し、略ぼ餘筆を以て其の御史中丞たるを帶言せり、

霍去病兵を將ゐて匈奴の右地を撃ちしこと史に見ゆ、右地は匈奴の界域にして唐の原州なり、龜沙は龜茲流沙の兩地を合稱す、龜茲は西域の國名、流沙も亦塞外の西地なり、此の兩地に接壤したるの右地、即ち楊將軍が出で、鎮するの所たり、漢に虎牙將軍の名あり、虎牙は其の威を稱する所以、中朝任虎牙とは今楊が原州都督を拜せしを言

ふ、後漢の時張奐邊將と爲り、身を正し已を潔くして威化大に行はる、復た武威の太守を拜せしに、其の俗妖忌多し、奐示すに義方を以てし、嚴に賞罰を加へ、風俗遂に改まる、百姓爲めに生祠を立つるに至れり、奐が字を然明と曰ふ、又漢武霍去病の爲めに邸宅を營む、去病辭して曰はく、匈奴未だ滅せず、何ぞ家をを用うる事をせん、今二事を用ゐて、以て楊が邊土の惡俗を化する、張奐の如く、王事に勤勞して其の私を思はざる、霍去病の如くならんことを望むなり、壇に登り將を拜す、天子の楊を禮するや、盛なりと謂ふべし、則ち塞を出で軍を統す、楊の國光を耀やかすや、華ならざるべからざるなり、前半段

朔風慘澹として沙を巻き來るも、君を當さに大に漢鼓を鳴らして、以て胡人を震懾すべきなり、邊月の凄清として城を照らすに當つても、君は當さに高かく胡笳を吹て、以て敵兵を潰散すべきなり、孫子に謂

とすや、正正の旗を遶ふる無れ、堂堂の陣を撃つ莫れと、胡兵悍驚ならざるに非ずと、雖洵とに何を以てか我が正正の旗に當ることを得ん、況んや君が身又御史中丞を兼ねたり、其の戴く所の獬豸冠は、峩然として頭上に危立し、邪を見れば直ちに之に觸れんとするに非ずや、吾れ此を以て君が奏功凱旋の日の必然遠からず、此の御溝の花明年盛に開くの候は、君が重ねて京闕に朝するの時たるを信じて疑はざるなり、後半段

朔風搖漢鼓、搖の字震憾の意と爲して見るべし、邊月思胡笳、思は悲思の思なり、然れども笳聲の悲を聞て以て家を懷ふと做して解するを休よ、是れ彼の劉越石が笳を吹き敵を走らすの故事を用ゐたるなり、旗合無遶正冠危有觸邪、二句警健比なし、御史が冠の事は蘇味道の詩中に詳釋す、參觀すべし、

奉和聖製途經華嶽

張說

西嶽鎮皇京。中峯入太清。玉鑾重嶺應。緹騎薄雲迎。白日懸高掌。寒空映削成。軒遊會神處。漢幸望仙情。舊廟青林古。新碑綠字生。群臣願封岱。廻駕勒鴻名。

開元十二年張說既に玄宗の寵遇を蒙り麗正書院の修學使と爲り諸學士と共に或は書を修し或は講に侍す因て首として封禪の議を建て古聖王の例に因つて東岳岱山に幸し封禪せんことを請ふ群臣從つて之を贊し交上表して張が議を採用せられんことを勸めたり時に玄宗東都に幸せんとい途華山を経て御製の長律一篇あり張說乃はち此の篇を作り併せて封禪の宿議を聽容せられんことを望むの意を致したるなり華山は五嶽の西嶽にして遙かに岱山と對峙せるもの上に神仙の遺蹤多し因て以て之を歷陳し便に順ふて玄宗が

東嶽に幸するの心を聳動せんとす封禪主唱の本意を貫徹せんとするに力めたるものと謂ふべし詩は二句毎に一頓す首二句は西嶽華山を正寫す此の山遙かに終南山と相接して唐都長安の望たり故に皇京を鎮すと曰ふ太清は天なり中峰高く聳えて天に冲るを謂ふなり玉鑾の二句は乘輿の華山を經過するを寫す重嶺應とは鑾鈴鏘鏘として山谷に響應するなり緹騎は丹黄色なり侍衛の兵士皆な靺韃を以て服とす故に緹騎と曰ふ雲緹騎を迎ふ明らかに天子の駕の山中に入るなり白日の二句は西嶽の所見華山は上に五崖あり下より之を望めば偶掌形を成せり相傳ふ巨靈神手を以て太華少華を壁開し以て黄河の流を通ず其の掌跡仍ほ存すと又華山記に華山の四面は峻しくして削成せるが如しと云ふ二句直に其の景を寫して高寒逼視すべからざるの氣あり軒遊の二句は是れ西嶽の

故事軒游は軒轅の游幸を約言す、軒轅は黄帝なり、史記の封禪書に云ふ天下の名山は八あり、三は夷蠻に在り、五は中國に在り、華山、首山、太室山、大山東萊山、此の五山は黃帝の常に游んで神と會する所のものなりと、漢の武帝華山に幸し、望仙宮を作りて歲時に祈禱す、即ち漢幸の句の指す所なり、特に此の二事を援引せるものは玄宗が封禪の禮を擧げんことを德恩せんとすればなり、舊廟の二句は西嶽の神祠を言ふ、華陰縣東に西嶽廟あり、廟に玄宗の製する所の華山碑あり、此の詩「新碑」と云ふは當時の建設せる所なるを以てなり、相傳ふ洛書の五十六字は皆な縁なりと、縁字の二字、此に本づく、末二句は封禪を望む所以にして、一篇の本意なり、岱は東嶽岱山なり、封禪の儀特に東嶽を重んずるものは五嶽の首たるが故なり、自己れ之を主唱し、群臣亦頻りに之を請へるを以て、今玄宗西嶽に幸せられしの序を以て、駕を

東嶽に廻らし、泰山に封じ、梁甫に禪して、長く鴻名を萬古に勅傳せんことを禱盼するなり、

張説が此の議、當時源乾曜の之を沮止せんとせしに拘はらず、終に玄宗の允容する所と爲り、開元十三年の十一月を以て泰山に封禪すべき旨を決す、説因て集賢の諸學士と其の儀注を起艸し之を上り、先皇睿宗を以て皇地祇に配して之を祭らんことを請ひ、又兵部郎中裴光庭の建議を以て、突厥其他の外國の使臣を徵して、從封の列に入らしむ、冬十月玄宗の車駕東都を發す、百官、貴戚、四夷酋長、盡く蹕に扈して、從行し、數十里、中人畜野に被り、有司の供具の物を載送する數百里、絶へず、十一月泰山に詣り、從官を谷口に留め、帝騎馬して山に登る、從ふものは惟説等數人のみ、帝禮部侍郎賀知章に問ふて曰はく、前代玉牒の文何の故に之を秘するや、知章對へて曰はく、或は密に神仙を求む

故に人の見を欲せざるなり、帝曰はく吾れは蒼生の爲めに福を祈るのみと、乃はち玉牒を啓て群臣に宣示し、昊天上帝其の餘五帝百神を祀り、帳殿に御して朝觀を受く、是に於て封禪の禮全く畢れり、時に張説多く自己が所親の僚屬を引て山に登り、恩賞賚賜獨り厚く、其の餘の百官に及ばず、中書舍人張九齡頻りに諫むれども聽かず、爲めに中外の怨望を來たせしと云ふ、張説姚宋の後を承け、玄宗の信任殊に渥く、開元の治化を翼賛したりしもの、固より尠少にあらずと雖、玄宗の色に溺れ、仙に荒み、以て其の後半截の壤を馴致したり、所以のもの、燕公封禪の一議、寔に責を免かるゝ能はざるものあり、因て史傳の正文に據り、其の事實を詩下に繋けて、聊か人を知り世を論ずるの資に充つ、

奉和聖製早度蒲關

張九齡

魏武中流處、軒皇問道廻、長堤春樹發、高掌曙雲開、龍負王舟度、人占仙氣來、河津會日月、天仗役風雷、東顧重關盡、西馳萬國陪、還聞股肱郡、元首咏康哉、

蒲關は黄河の西岸に在りて、唐の河中府河西縣に屬す、玄宗の駕此を度りしは、蓋し上の張説の詩華嶽行幸と同時の事にして、華山より歸途乃はち此の關を過ぎりしなり、此の詩も亦四句一解と做して看るべし、首句は蒲關の地、次句は行幸、長堤の二句は蒲關の曉景、以上を一解とす、第二解四句は、專はら車駕の蒲關を早度する狀を鋪叙し、第三解四句は、已に關を度りて後、玄宗の御製あるを述べて結としたり、魏の武侯、吳起と俱に西河に浮かび、中流に下り、顧みて起に謂つて曰はく、美なるかな山河の固、此れ魏國の寶なりと、西河は即ち黄河の西なり、因つて蒲關を魏武中流處とは謂ひたるなり、昔は則はち魏武

が舟を中流に泛かべ。處今は則はち天子の車駕の此を經過するあり。軒皇は黃帝其の崆峒に行きて道を廣成子に問ひし事は上の李儵の詩に見えたり。此の作黃帝を借言せるは玄宗華山より廻駕の途次なればなり。長堤の春樹是れ黃河の岸高掌の曙雲是れ華山の顛。二語蒲關の曉望を寫すと雖語脈は上の二句を分承したり。禹南征して江を濟るに黃龍あり出で舟を負ふ。此れ借用して玄宗の駕の黃河を渡るに喩ふ。老子青牛車に乗じて函谷關を過ぐるに關尹喜先づ東來の紫氣あるを認めたり。此れ玄宗の駕の蒲關を度るを形す。又唐の國姓は李にして老聃の苗裔と稱するを以て特に老子の事を用ゐたるなり。八占の占は占卜の占。是れ占領の占に非ず。仙氣は則はち所謂る東來の紫氣なり。天子の旌は日月を畫かく。故に河津會日月と曰ふ。役風雷とは天仗儀衛の盛風雲を驅使し雷霆を鞭役するの勢あるを景

容したるのみ。玄宗既に關を過ぎ乃はち更らに西して長安に歸る。是を以て東に顧みれば重關盡くと云ふ。萬國陪は當時突厥諸番の使者亦扈駕の列に在るなり。漢の文帝曰はく河東は吾が股肱の郡なりと。此れ蒲關は重要な地たるが故に之を用ゐて舜の臯陶と廢歌せる事に湊合す。臯陶の廢歌に曰はく元首明哉股肱良哉庶事康哉と。以て玄宗の聖製に比し蒲關は股肱郡なるが故に元首の天子乃ち康哉を詠すと云ふの義となりたり。既に文帝に股肱郡の語あるに由つて蒲關を指稱し又臯陶の廢歌に股肱良哉の語あるに由つて聖製を比擬す。全く兩箇の典故を股肱の二字を以て申下して一事を爲せしものにて是を兩層を一層と倣して用うるの法と曰ふなり。

玄宗の御製亦能く沈着蒼健にして曲江が和章に讓らず云ふ。
鐘鼓嚴更曙山河野望通鳴鑾下蒲坂飛旆入秦中地險關逾壯天平鎮

尙。雄。春。來。津。樹。合。月。落。戍。樓。空。馬。色。分。朝。景。雞。聲。逐。曉。風。所。希。常。道。泰。非。復。棄。編。同。

「春來」の四句能く度關の早景を寫して、眞に畫中を行くの想あり、曲江は則ち長堤春樹發、高掌曙雲開と云ふ、同じく早度蒲關の景と雖、一は止、見る所を即賦し、一は奉和聖製の意を以て重とす、故に互に詳略あり、亦以て一時廢酬の體を辨識するに足る、凡う此の時代に在つて和と云ふは其の韻を用ゐず、亦其の韻を次がず、唯其の體に準依して之に和するのみ、故に原唱古體なれば和章古體を用ゐ、律體なれば則ち亦律體を用うるに過ぎず、彼の用韻、次韻は元白に濫觴し、皮陸に擴充す、即ち中晚以後の格たるを知るべし。

和許給事直夜簡諸公

未。央。鐘。漏。晚。仙。宇。靄。沈。沈。武。衛。千。廬。合。嚴。扃。萬。戶。深。左。掖。知。

天。近。南。窻。見。月。臨。樹。搖。金。掌。露。庭。接。玉。樓。陰。他。日。聞。更。直。中。宵。屬。所。欽。聲。華。大。國。寶。夙。夜。侍。臣。心。逸。興。乘。高。閣。雄。飛。在。禁。林。寧。思。竊。杼。者。情。發。爲。知。音。

是の詩は前半截直夜の光景を寫し、後半截許給事が諸公に簡するの詩あるに因り、其の才藻を稱揚し、自己が之に和するの意を以て結びたり、則ち通計十六句、前後各八句を以て一段とするを可とすべきなり。

未央の殿闕、鐘鳴り漏響て、正さに天晚を報ず、九重の仙宇、暮靄漸やく合して沈沈として、寂靜に赴けり、宿衛の武士は各交代して、其の直廬に屯し、綸扉の鎖鑰は皆な嚴扃せられて、萬戶悄然たり、以上四句、泛ろく宮城の晚景を寫し、以て直夜の發端とす、然れども實は未だ許給事が宿直の所に寫し到らざるなり。

左接は門下省なり、已に五律の部に詳注せり、門下省は天庭に咫尺、其の直廬は南に面したれば、窓を開けば明月の直入するあり、樹上の露光は晶晶として、仙人が金掌の上に揺くかと疑ひ、庭面の煙氣は蒼蒼として、直ちに至尊が玉樓の陰に接す、以上四句は直夜の光景併せて許給事が宿直の所を點ず、然れども猶ほ未だ許給事其の人に寫し到らざるなり、

他日の四句は許給事其の人を寫し併せて其の諸公に簡するの詩あるを見はす、他日と云ふものは給事が詩簡を接見せしの日なり、此の二句は對語中に散法を用う、宜しく讀んで、他日聞更直中宵屬所飲と爲すべし、所飲とは吾が欽仰する所の友なり、其の意言ふ、當夜は未だ彼の門下省宿直當番の何人なりしやを知らざりしが、他日給事の詩簡を接するに及んで始めて其の中宵に更代して直廬に入りしむ

のは吾が欽敬する許給事なりしを知りきとなり、盛華大國寶は欽敬の意を申して許給事が才賢を賛し、夙夜侍臣心は其の宿直に因つて黽勉懈らざるを稱するなり、是に於て給事其人寫し到らざる所なし、餘ます所は唯其の詩の如何なりしのみ、

故に逸興の二句は専ら給事が詩を歎美す、然れども上に夙夜侍臣心の句を頂するとき、給事は斷として吟詠に耽るが爲めに職事を曠廢するものに非ず、其の語に分寸ある處に注意すべし、此段の命意は大抵彼の沈佺期が冠劍無時釋、軒車待漏飛と同意なり、偶高閣の逸興に乗じ、詩を賦して以て寄せらる、之を觀るに其の才藻の美なる、誠に禁林に雄飛するに足るべし、是に於て我亦技癢に禁せず、聊か爲めに一章を和す、魏の曹植謂はずや、音樂を聞て竊かに拊舞するものは、或は音を賞して道を知ることあればなりと、我が和章も亦此の如

く、知音の爲めに情發して自から禁抑すべからざるものあるが故のみ、君寧ろ之を思へや、幸に才を争ひ氣を闘はすものと誤認する勿れ、筆を用うる婉曲にして味あり、宋之間が暗投空欲報、下調不成章と云ふの偽謙を事とするものに較ぶれば措詞は或は拙なりと雖、轉曲江が宰相の風度を見るなり。

酬趙二侍御史西軍贈兩省舊寮之作

石室先鳴者。金門待制同。操刀常願割。持斧竟稱雄。應敵兵初起。緣邊虜欲空。使車經隴月。征旆繞河風。忽枉兼金訊。非徒秣馬功。氣清蒲海曲。聲滿柏臺中。顧已塵華省。欣君震遠戎。明時獨匪報。常欲退微躬。

此れ亦分ちて兩半截とす、上半は趙が侍御史の官を以て出て西軍に従役するを言ふ、下半は其の兩省の舊僚に贈るの作あるに因り之に

酬るの意を致せり、布置結構總て上の一篇に同じ、

漢の制蘭臺に石室ありて秘書を中に藏し、御史中丞をして之を掌らしむ、石室先鳴者とは趙が侍御史となりてより夙々に令名ありし事を言ふ、金馬門の待詔は才技を以て召されて未だ正官に就かざるものを指す、次句の意は趙が始めて召されて制を金門に待ちしときは嘗て自己れと事を同くせしを言ふなり、此の發端趙を以て主となすと雖、同の一字に於て作者自己を其の中に包含せしめ、以て結段の地を爲したり、操刀願割は左傳鄭子産の語を用う、彼れは曰ふ、未だ刀を操る能はずして割せしめば、其の傷實に多しと、此れは其の義を翻案して盤根錯節の利器を試みんとする意に換用したり、持斧は亦漢の侍御史の事、其の出て、繡衣直指使者と爲りたるときは、斧を持して盜賊を緝捕するを例とす、此の二句の意は趙は嘗つて自己れと同じ

百
く金門に在り、日より常ねに武事に心を委ね、以て才器を試みんことを願ひしが、今は竟に侍御史と爲り出で、邊塞に使する身となりたれば、洵とに其の初志を貫ぬきたるものと謂ふべしとなり、單に字面の上より之を解釋するも、既に操刀を以て願とせば、斧を持し、雄と稱するは、固より其の本願たるべきなり。常の一虚字、上文同の一字より生出し、又竟の一字を以て第一句の侍御史の官に繳還す、斡旋の力七石の弓を挽くが如し、趙は己にして果して西域に従軍す、然れども此れ固より敵に應じて兵を起すのみ、我より戰を好み、徒らに邊塞を開きしに非ず、王者の師は常さに此の如くなるべし、是を以て君一たび出で、緣邊の胡虜を一掃し、今や殆んど將さに空からんとす、蓋し使車堂堂として、隴頭の月に碾り、旆旆悠悠として、河上の風に靡かば、何人か風を望んで却走せざるものぞ、二句力を極めて鋪張す、實は趙

が滿心得意の秋たればなり、

兼金は孟子の語、其の價常金に兼倍するを謂ふ、以て趙が贈詩に比するなり、君の武威已に前陳の如くして、忽ち復た此の瓊瑤の贈を枉く、然れば君は固より獨り秣馬の功を以て重せらるゝものに非ず、君が才は實に文武を兼ねたるなり、故に氣は蒲海の曲を清めたり、其の武功を申するなり、而して亦聲ハ柏臺の中に滿ちたり、其の文才を申するなり、蒲海は蒲類海にして、塞外の西北に在り、柏臺は屢見たる如く、侍御史の府を云ふなり、氣清蒲海曲、以て隴月河風を結び、聲滿柏臺中、以て石室金門に應たり、以下四句は發端に趙と自己とを雙提したれば、自己の身上により、着筆し、趙が詩を見て、趙が功を思ひ、自己れ獨り上に報する所なきを愧とす、曰はく深く自から己れを顧みるに、我れは嘗つて君と同じく制を金門に待ちしものなり、而して徒らに

華省の職を塵がすのみ、明時に素餐して碌々として主恩に報ずるの功なし、今君が武威の遠に震ふと聞きては益、惶悔に堪へず、此の上は唯、速かに微躬を引退して以て尸位の譏を免れんと欲するのみと、此を讀み畢りて始めて起頭に自他を雙含せしめたる命意を恍然開悟すべきなり、

奉和聖製送尙書燕國公說赴朔方軍

宗。臣。事。有。征。廟。算。在。休。兵。天。與。三。台。座。人。當。萬。里。城。朔。南。方。偃。革。河。右。暫。揚。旌。寵。賜。從。仙。禁。光。華。出。帝。京。山。川。勤。遠。略。原。隰。軫。皇。情。爲。奏。薰。琴。倡。仍。題。瑤。劍。名。聞。風。六。郡。勇。計。日。五。戎。平。山。甫。歸。應。疾。留。侯。功。復。成。歌。鐘。旋。可。望。枕。席。豈。難。行。四。牡。何。時。入。吾。君。聽。履。聲。

史に徴するに開元九年張說兵部尙書と爲る、其の歲朔方節度使を置き、單于都護府夏墟等の六州及び定遠豐安の二軍、三受降城等を領せしむ、其の明年夏四月、說をして朔方軍の節度使を兼ねしめ、同閏五月、說朔方に如き邊を巡す、此れに據れば本篇は則ち開元十年の事なり、是より先き說首相姚崇と合はず、左遷せられて檢校幽州都督并州長史たり、五律に收むる幽州夜飲は蓋し當時の作なり、是に至つて姚崇已に薨ず、遂に此の恩命を拜することを得たり、九齡は說に於て同宗の譜を聯らね、其の大に玄宗に用ゐられしも亦燕公の推薦に出づるもの多し、曲江集に張燕公を祭つるの文あり、其の起手に云ふ、維れ年月日、族子秘書少監集賢院の學士九齡、謹んで清酌少牢の奠を以て、敢て燕國公の靈に昭告す云々と、曲江自かち族子と稱す、是れ大父行を以て說を待つなり、又云ふ、惟れ小子夙に深期を荷ひ、一顧して價を

増す驚駭の敷ふに足るに非ざるも、蓋し枝葉として以て貽さると、深かく其の知遇に感じたるもの、如し、本篇の燕公が朔方に行くを送りて直ちに山甫留侯を以て望を屬するもの、偶然に非ざるなり、起四句は燕公の恩命を拜する所以、次四句は燕公の出京、次四句は天子詩を賜ふて送別せられし、榮を紀し、次四句は其の靖邊の功を奏せんことを期し、末四句は其功成りて還京せんことを望む、段落尤も分明にして、赫藻鴻麗、真に廊廟瑚璉の選なり、

燕公當時兵部尙書を以て同門下中書三品たり、位已に群臣に冠す、故に宗臣と謂ふ、漢書蕭何曹參を贊して一代の宗臣なりと云へるに本づくなり、此の倚託正さに重きの宗臣を以て、出て、遠く朔方に赴かんとするものは、他なし、吾皇の廟算兵を休め、寇を綏するに在るを以てのみ、按ずるに、玄宗夙に邊境を開き、大に武威を外國に耀せんこと

を期す、是を以て終に窮兵瀆武の譏あり、今開邊と言はずして、休兵と言ふものは、文に臨み諱を避け、以て應制奉和の體に諧ふ、一は臣子の肯て斥言せざるの意を見、一は天子の意真に如此ならんことを望むなり、天已に燕公に與ふるに三台の首坐を以てし、而して天子は又人を以て萬里の長城に當てんと欲するを以て、今日朔方の行、此の宗臣を煩はさるべからざるに至りしなり、萬里城の句は檀道濟の語を用ゐ、人を以て城に當て、倚て以て重を爲すの意なり、

今や朔南の地方さに漸やく兵革を偃息せんとするも、河右の疆、猶ほ烽火の燃ゆるあるを以て、暫らく征旌を揚げざるべからず、極めて此の行の已むべからざるを言ひて、以て第二句、廟算在休兵に呼應したり、方偃革、方の一字、將さに息まんとして、未だ息まざるの意を含み、暫揚旌、暫の一字、已を得ずして、暫らく兵を用うるの義を見はす、亦虛字

幹旋の妙なり、是を以て燕公は終に恩命を奉し、九重の寵錫を仙禁よ
り受けて、無上の光華を一身に荷ひ、以て此の漢京を出發せらるゝ事
となりたるなり、寵錫の句勢を趁て、聖制の事を逗出、筆先の意は已
に飛んで下文に渡る。

燕公が此の寵錫を辱くせし所以は、其の恩遇の優渥なるに由ると雖、
亦實に天子の夙とに遠客を勤め、天下山川の形勢瞭として、諸を掌に
指すが如く、従つて朔方の原隰の殊に至尊の皇情を軫動したるに出
でずんばあらず、此が爲めに特に虞舜が薰風の琴を鼓して、以て御製
の詩篇を賜ひ、又漢の章帝が瑤劍題名の故事に沿りて、親署の寶劍を
賜はりなり、原隰は詩の皇皇者華の篇中の語、而して皇皇者華の篇
は天子使臣を遣るの詩なり、本篇の特に此の字面を擇みし、所以を悟
るべし、舜琴の事は習見の典、必ず注せず、瑤は寶の古字、瑤と混視する

ことなかれ、後漢の章帝、尙書韓稜、郵壽、陳寵三人に寶劍三口を賜ふ、其
の上に御筆を以て各、其の姓名を書し、之を刻されてありしと云ふ、燕
琴は天子の文事、借つて御製を形し、寶劍は武器にして、又尙書の故事
あり、以て説が朔南節度使たるに切ならしむ。

燕公が京師を出る、爾かく煌煌として光華あり、先づ以て四夷の膽を
奪ふに足る、是を以て、吾れ知る、其の朔方に趁くや、六郡の兵壯、風を望
んで勇躍し、響の聲に應ずる如く、五戎の敵虜日を計りて、鎮平せんこ
と、風の葉を掃ふが如くならんことを、仲山甫の齊に徂くや、詩の大雅
は、式て其の歸るを遙かにすと歌へり、吾れ燕公の凱旋一に仲山甫の
如くならんことを願ふ、留侯は漢を扶けて功を成す、吾れ燕公の成功
亦張良の復生と稱するに足らんことを冀ふ、六郡は金城隴西、天水、安
定、北地、上郡を稱す、漢の時趙充國此の六郡の良家の子を以て羽林郡

に補充したることあり、五戎は戎夷に匈奴、穢貊、密吉、單于、白屋の五種あり故に云ふなり、曲江が祭文に云ふ、聖后を羽翼し、元化を丹青す、畢陶の謨謀を陳し、仲山の夙夜を盡くすと、此れ亦燕公を以て、仲山甫に喩へたり、留侯を用うるものは其の同姓の義に取るなり、
 結末の四句は各一典を用う、細かに之を注明するに非ずんば、遽かに其の意を疏通し難し、戦國の時魏絳は和戎の功あり、時に鄭伯女樂二八、歌鐘二肆を晋の悼公に納る、悼公因つて女樂一八と歌鐘一肆とを分かちて、魏絳に賜ふて曰はく、子寡人に教えて戎狄を和し、謙華を正すこと今に於て八年、七たび諸侯を合したり、寡人志を得ざることなし、請ふ子と之を樂さんと、是れ歌鐘の句の用うる所、燕公が功を奏して歸來の日は天子の寵賚彼の悼公が魏絳に於ける如きを望むべしとの意としたり、趙充國が屯田疏に、隍陘中道の橋を治め、以て西域を

制せば信威千里に行はれて、枕席の上より師を過ぎらしめんと、其の注に、橋成り軍行く、其の安易なる枕席の上を過ぐるが如きを言ふとあり、是れ枕席の句の用うる所、燕公が朔方を平定して邊安す、路易き亦枕席の上を行くが難くならんことを期するなり、四牡は亦詩の小雅の篇名、小序に四牡は天子使臣を勞ふの詩なりとあり、己に之を勞ふと云へば是れ功成りて京に歸るの時なり、因つて之を借りて、燕公が凱旋を指稱したり、漢の哀帝鄭崇を擢んで、尙書僕射と爲す、數諫諍して帝能く之を聽納す、崇常ぬに革履を曳く、見を求むる毎に、上笑つて曰はく、我れ鄭尙書の履聲を識れりと、是れ亦尙書のご事故に、末句之を用ふる、燕公凱旋の時、天子履聲を聞きて、早やく其の人を識ること亦當さに、鄭尙書の事の如くなるべしと云ふなり、此の四箇の故事之を四句に分用して、語意自から一貫し、絶て詞義晦澁の病を見ず、

得心應手の好本領と稱すべきなり、

今人の詩を言ふもの動もすれば故事を用うるものを痛詆す是れ徒らに大言を放ちて實は其の不學無術を文飾せんとするもののみ知らず詩は必ず白描ならざるべからざるものあり亦必ず故事を充填せざるべからざるものあり白描に由つて其詞却つて典雅なるものあり故事を用おて其意却つて空靈なるものあり兩者各時と事に因りて其の宜しきを揣かる而して本篇の如きは所謂必ず故事を充填せざるべからざるものなり故事を用おて其の意却て空靈なるものなり惟故事を用おて運用の妙を忘れざるもの始めて與に此を語るべし我れ偶感ずる所あり此の詩を疏別するに當つて覺へず今人の眼孔甚だ小なるを悲しむ、

張説の巡邊亦是れ當時歴史上有數の事たり故に聖制に和して之を

送くる獨り曲江一人のみならず姚崇に繼ぎて賢相の名ある宋璟が作の如き亦頗る燕公の爲に重を増すものあり、

帝道溥存兵王師尙有征是關司馬法爰命總戎行畫闔崇威信分麾盛寵榮聚觀方結轍出相遂傾城聖酒江河潤天詞象緯明德風邊草偃勝氣朔雲平宰國推良器爲軍挹壯聲至和常得體不戰即亡精以智泉寧竭其徐海自清遲還廟堂坐贈別故人情

此の詩適曲江が作と其の韻を同うし語も亦相出入するものあり宋璟にして且つ燕公を推すに宰國の良器を以てす則はち曲江が詩の極口賞揚せるは斷じて族子の溢詞に非ざるを證すべきなり時に燕公も亦將赴朔方軍應制の詩あり、

禮樂逢明主韜鈴用老臣恭憑神武策遠靜鬼方人供帳榮恩饒山川喜詔巡天文日月麗朝賦管絃新幼志傳三略衰材謝六鈞膽猶忠作屏心

故道爲鄰。漢保河南地。胡清塞北塵。連年大軍後。不日小康辰。劍舞輕離別。歌酬忘苦辛。從來恩博望。許國不謀身。

此の篇は先づ美を其の君に歸し、次に恩饒の盛を述べ、已に任を受くるに因つて自から省み、又功を立つるを以て自から期し、終に將さに赴かんとするの情狀に收轉す、神旺んに理完く、亦大臣の語たるに愧ぢず、其の博望を以て自から誓ふは、猶ほ曲江の留侯を以て之に望むが如く、齊しく同姓たるより落想したり、考ふるに張詠始め、天兵の節度大使たりしとき、僅かに二十騎を率ゐて節を持し、胡人の部落に入りて之を鎮撫し、因て其の帳下に宿す、副使李憲、虜情の信じ難きを以て書を馳せて之を止む、説復書して曰はく、吾が肉は黄羊に非ず、必ずしも食はるゝを畏れず、血は野馬に非ず、必ずしも刺さるゝを畏れず、士は危を見て命を致す、此れ吾が死を效すの秋なりと、此れ尤も史

傳に大書して昭昭たるものなり、即ち此の一事を以て之を推すも、許國不謀身の一語の自から欺くものに非ざるを知る。

奉和聖製暮春送朝集使歸郡應制 王維

萬國仰宗周。衣冠拜冕旒。玉乘迎大客。金節送諸侯。祖席傾三省。褰帷向九州。楊花飛上路。槐色蔭通溝。來預鈞天樂。歸分漢主憂。宸章類河漢。垂象滿中州。

唐制郡國の政を掌どる譬へば都督刺史の類の如きもの、外より入朝して朝班に與かるるときは、之を朝集使と名づく、此れ高宗の元徽二年より始まれり、宗周は以て唐の朝廷を借言するなり、萬國皆な我が唐の帝室を仰がざるは無し、故に各郡の朝集使、衣冠を着けて以て我が朝廷に入觀し、齊しく天子が冕旒を拜せり、周禮に凡そ諸侯入朝するとき天子逆へて之を畿に勞し、大客ハ則ち賓とし、小客は則ち其

の幣を受けて其の辭を聽くとあり、大客は大諸侯なり、唐に在つては、應さに都督を指稱すべし、金節も亦周禮に見ゆ、天子諸侯に符節を與へて以て行道の信とするなり、此の二句言ふ心は天子朝集使を優遇する所以のもの、至渥にして其の來るや玉乘に駕して之を畿に迎へ、其歸るや又金節を授けて之を餞送すとあり、同じく周禮を用ゐたるは起句宗周を以て唐の朝廷に比したるが故なり、三省は中書門下尙書の三省を謂ふ、朝集使の歸る、天子特に三省の官僚をして盡く其の祖道の席に侍せしめらるゝを言ふなり、褰帷は漢の賈琮冀州の刺史と爲り、出て、其の郡に行くに、車の帷裳を褰げ、事を有り、朝集使の各、其の郡國に歸るを言ふなり、楊花、槐色は暮春の景色を點綴す、上路通溝、皆な禁城内外の路、餞送の地を見はす所以なり、晋の趙簡子夢に帝の所に之きて鈞天の廣樂を聞く、此の篇之を用ゐたるは重もに帝

の所に之くの義に取り、朝集使の帝闕に參集したるを指稱したり、朝集使は既に朝廷に來りて鈞天の樂を豫かり聞き、今や又郡國に歸りて、各天子の愛を分たんとす、是を以て天子御製の詩を賜ふて以て其の行を壯にす、朝集使此を受けて各、其の國に歸れば、則ち宸章の光河漢の辰星の如く、象を垂れて中州到處に烜赫たらざるはなしと謂ふなり、

以上の長律應制奉和の什尤も多く、然らざるものも亦多く、朝廷の大、典に關す、雍容爾雅、初唐の鉅觀を極むる所以なり、蓋し武后にして後、玄宗の初政に到る、天下承平、君臣俱に歌詠、賡酬を事とし、以て鴻業を潤色し、休明を鼓吹す、此の種の作勢ひ多からざるを得ざるものあり、天寶、漁陽の一警、四海播亂、幸に宗社の屋を免かると、雖邦の元氣、此に殄瘁し、朋黨の禍、藩鎮の禍、腫を接して、興り、唐の世を終るまで、寧處す

るに暇まあらず。是を以て盛唐以後詩人雲の如く仙と呼び聖と稱せらるる者も亦此間に輩出すと雖其の爲す所は皆な變風變雅の音復た化日光風雍熙肅穆の觀ある能はざるなり。于鱗摩詰の長律三篇を選りて特に此の一篇を冠す意此を以て蠶閣莊重の一体を結び以て下の沈鬱の格を開くに在るもの、如し詩運の時運と相消長する如此して摩詰の如きは亦實に此の關頭に遭際せし一人なり。莊重は固より長律の體以下の諸篇亦往往此を離れずと雖其の氣象に至つては初唐の垂紳擗笏の風度に比べて迥乎として俾しからず善讀の者は自から此の冥冥中に一隻眼を着すべきなり。

送李太守赴上洛

商山包楚鄧。積翠靄沈沈。驛路飛泉灑。關門落照深。野花開古戍。行客響空林。板屋春多雨。山城晝欲陰。丹泉通虢畧。白

羽抵荆岑。若見西山爽。應知黃綺心。

商洛の山、東南楚鄧の地に連なり、積翠正に沈沈たり、是れ昔日四皓が隱栖の所にして、今李太守が將さに任に行かんとするの地なり、因て此を以て端を發す、以下驛路行旅の景は則ち此の山を望んで以て赴くの途中たるを知るべし、飛泉落照自から幽寥閑寂の意を見る、古戍煙絶へて野花亂れ開らき、空林葉落ちて獨り行客の足音を聞く、一響字下し得て妙絶、林已に空し、落葉滿地にして、四に人踪なきこと自から知るべし、故に偶、行客の之を過ぐるあれば、策策たる足音、耳に入る殊に大なるを覺ふるなり。

板屋春多雨、山城晝欲陰、此れは是れ李が停宿の時の光景を寫す、春日の雨、絲の如くに沾濕す、本と多く聲を聞かず、唯、其の板屋なるを以て偏に此の聲の多きを覺ふ、城市山に據る、嵐氣日夕に來往し、驛快の時

ある。少なし。是を以て。晝も亦陰らんと欲するなり。十字。貴ふ所は神韻に在るも。其中亦無限の理趣を藏す。板屋の句。仍ほ上の響の字の餘波を承けて。自から一種の灰線を成すが如きに至つては。摩詰獨擅の神品と云ふべきなり。

丹泉通號略。白羽抵荆岑。是れ上洛郡の位置にして又首句の「包楚鄧」とあるに一點す。丹水は商州の竹山に出で流れて河南の界に入る。商州は即ち上洛なり。河南は周の時號侯の地なり。號略の字は左傳に見ゆ。略ハ疆界の義なり。白羽は鄧州の地。春秋の時楚に併せらる。荆岑は楚の山なり。抵は抵對の義なり。王子猷笏を以て頰を拄へて曰はく。西山朝來爽氣あるを致すと。此れ借て以て商山を指稱す。夏黃公綺里季は皆を商山四皓の名。李太守任に到りて後亦笏を拄へて商山を見れば。自から四皓が隱遁せし心を知るべしと言ふなり。此の意を以て結

とせるは。起手の商山と云へるに應ずるものにして。常山の蛇勢首尾相擊つの觀あり。

送秘書晁監還日本

積水不可極。安知滄海東。九州何處遠。萬里若乘空。向國惟看日。歸帆但信風。鰲身映天黑。魚眼射波紅。鄉國扶桑外。主人孤島中。別離方異域。音信若爲通。

阿倍仲實の事。今疏釋を須たず。是の篇李太白が「白雲秋色滿蒼梧」と並に千古に傳ふ仲實曠世の逸才に非ざるより。は。那んぞ。右丞供奉等をして把臂傾倒。此等の贈あらしむることを得んや。此詩通篇蒼茫の觀を曲盡して。起手の突兀尤も到り易すからず。而して仲實があをうなばらの一詠。髣髴として。其の意境を同うす。殆んど衝を争ふに足るものあるが如し。

積水茫茫として窮極すべからず、安んず滄海の東更に復た國土あるを知らんや、反挑して起り以て其の遼遠を形す、直ちに雲夢八九を胸中に吐吞するの勢あり、騶衍は謂ふ九州の外更らに九州ありと所謂九州何處か最も遠き君今萬里の波濤を超へて遠く滄海の東に歸らん、とす、一帆縹緲恍として空に乗ずるが如し、則ち九州の遠未だ日本より遠きものあらざるに似たるなり、以下四句は萬里乗空の意を承け、海程の事物を寫す、而して看日の句、日本に緊切なれば、語は固より泛設に非るなり、雲煙華蕩唯日輪を看て以て準的と爲す、波濤洶涌順風を得ずんば那んぞ歸ることを得ん、况んや巨鯨の身天を蓋ふて旋ち黒く、大魚の眼波を射て忽ち紅なるあり、海中の現象、奇奇怪怪名狀すべからず、其の危険なる實に想像の外に在るべし、列子に渤海の東に五山あり、皆な仙人の居る所、五山の根に連着なく潮に隨うて

上下す、帝其の西極に流れんことを恐れ、策強なるものに命じ、巨鯨十五を以て首を擧げて之を戴かしめしに始めて動かずと見えたり、又隋史に日本國に如意寶珠あり、其色青く、大さ雞卵の如く、夜光あり、魚眼精なりと云ふとあり、二句此に本づきて、隨手點綴の妙を見る、必ずしも典故に拘して之を解せざるなり、

「郷樹扶桑外」と日本を申言す、扶桑は日出の所なり、併せて上の「向國惟看日」に應ず、主人孤島中、主人は晁監を指す、上文寫景中自から其の人ありと雖、未だ之を文面に見はさず、此句故に補言するなり、別離の句も亦此の如く、補筆を以て送別たるを明點す、海程の光景一に上文の如くなれば、音信の輒やすく通ずべからざるは、已に讀者の意中に在り、因つて此を以て收結として、此の別の殊とに捨て難きを見るなり、

送儲邕之武昌

李白

黃鶴西樓月。長江萬里情。春風三十度。空憶武昌城。送爾難
爲別。銜杯惜未傾。湖連張樂地。山逐泛舟行。諸謂楚人重。詩
傳謝眺清。滄浪吾有曲。寄入櫂歌聲。

律體は太白が作るを屑とせざる所偶一たび之を爲すと雖要するに
其の明秀高爽の氣を以て一揮して才を見はすもの初めより聲律を
獨稱し對偶に拘束するものに非ず浩浩落落として筆の之く所に從
ひ自から結構を作すのみ是を古詩の變と曰ふ可なり未だ長律とし
て之が論次を加ふ可からざるなり元微之の李杜優劣を論ずる專は
ら此を以て軒輊の分かる所なりとし盛んに杜が終始を鋪陳し聲
韻を排比せるを擧げて李は尙ほ其の藩翰を歴る能はず况や堂奥を
やと論斷を加ふるに至れり然れども長律は固より杜の長ずる所而
して杜の傳ふべきは必ず獨り長律に非ず此れ猶ほ太白は絶句に長

じて而して其の傳ふべき正に必ず絶句に非ざると一般人に能あり
不能あり若し長律は李の所短なるを以て李は杜に劣れりと云ふと
きは杜の絶句詰屈勃率にして法とすべきもの甚だ少れなり那んぞ
此を擧げて杜は李に劣ると謂はざるや李は律體に短故に集中の律
體屈指して數ふべく杜は絶句に短故に集中亦其篇什多からず此れ
前賢が藏拙に工なる所にして詩人の能は斷として備を求むるに在
ざるなり韓昌黎蚍蜉撼樹を以て元微之を目し直ちに斥して群兒と
云ふ一時激する所あるの語と雖亦何ぞ嘗つて實に然らざらん耶
高棟は曰はく五言の排律開元後の作者にして聲律の備はれるは獨
王右丞李翰林を多しと爲す而して孟襄陽高勃海輩實に相與に並鳴
すと胡元瑞は曰はく盛唐の排律を讀むに太白は輕爽雄麗にして明
堂の繡黻冠蓋輝煌し武庫の甲兵旌旗飛動せるが如しと桂臨川も亦

云ふ、太白は天才飄逸、長律は法度森嚴と雖、清骨泯せず、此に由つて之を視れば、太白の長律は、惟杜の千流萬派、洶湧氾濫せるが如き、鉅觀なきのみ、亦何ぞ嘗つて是れ當時の第一流ならざる、而して此の篇の如きは尤も其の清空飄宕なるものにして、沈德潛は云ふ、古風の起法を以て運して長律と爲す、太白の仙才、繩墨に拘せざること、乃はち爾かりと、乾隆御批は云ふ、儲筆空を凌ぎ、列子の風に御して行く、浴然として善きが如しと、並に定評と稱するに足る、則はち亦何ぞ嘗つて是れ縱横排募、動盪變化の作に非ざる、然らば則はち太白の長律に短と云ふもの果して如何、曰はく、惟之を應制に施す能はざるのみ、唯之を試帖に應用する能はざるのみ、

黃鶴樓は謫仙の夢寐にも忘るゝ能はざるの地、其の詩に散見するもの一にして足らず、樓は武昌城の西南に在り、高く漢陽江の流に臨む、

故に本篇儲邕が武昌に之かんとするを送るに由りて、偶平生の憶を直寫するなり、黃鶴樓頭の月に嘯て、以て長江萬里を望む、平生の快事此に過ぎたるはなかりし、而して今春風己に三十度、烏兔忽忽、身は異土に在り、此の情、唯之を空憶に付するのみ、起四句、一氣直下、所謂古風の起法なり、送爾難爲別、銜盃惜未傾、二句は是れ送別の情、惜未傾とは別を惜むが爲めに、未だ掌中の卮を傾くるに忍びず、酒盡くれば、則はち別かれざる可からざればなり、湖連張樂地、山逐泛舟行、三句は武昌の風景の佳、諾爲楚人重、詩傳謝眺清、二句は武昌の人物の美、並に以て首の四句に分應す、帝樂を洞庭に張る事は、莊子にあり、漢水の支派瀟湘で洞庭湖中に入る、故に連と曰ふ、洞庭は古への楚の地、楚の俠客季布は、則はち所謂千金一諾に如かざる者なり、謝眺が宣城は、漢江の下流に在り、宣城も亦太白が畢生終焉の地たらんことを願ひしもの、

黄鶴樓を憶ふに由つて併せて此に及べるなり、此の四句重もに武昌に結定して云ふと雖、山逐泛舟行。一句儲邕其人の中に在るあり、立言固より送別を離れざるなり、漢江の水荆山の下に流る、之を滄浪と云ふ、漁父が濯纓濯足を歌ひしは則ち是なり、結二句の意三十年前吾亦曾つて武昌の地方を詠せしものあれば、和して棹歌の中に入れて以て君を送らんとなり、棹歌の句、已に滄浪の近脈を承け、又泛舟の遠線を引き、而して長江萬里情併せて此に結歸す、全篇を束ね得て極めて鈞量あり、

陪張丞相自松滋江東泊渚宮 孟浩然

放溜下松滋。登舟命楫師。寧忘經濟日。不憚迥寒時。洗幘豈獨古。濯纓良在茲。政成人自理。機息鳥無疑。雲物吟孤嶼。江山辯四維。晚來風稍緊。冬至日行遲。獵響驚雲夢。漁歌激楚

辭渚宮何處是川暝欲安之

張丞相ハ張九齡なり、曲江已に林甫に中傷せられて相位を罷め、貶せられて荆州の長史と爲る、時に浩然白衣の詩人を以て亦荆楚に在り、故に之に陪して其の地の勝概を探討することを得たるなり、岷江の流、荆州松滋縣の北に至り岐れて三派と爲る、其の一を松滋江と曰ふ、此を下りて東すれば則ち江陵の渚宮に達す、渚宮は楚の襄王が離宮にして宋玉の故宅の在る所なり、詩十六句、二句毎に一意を換え、錯綜して之を出す、亦長律の變体なり、

放溜二句は是れ發端、先づ此の行の舟游たるを領起するなり、蓋し松滋江の上に水閘あり、閘口開きて溜水一時に奔注す、故に放溜と曰ふ、僧大典、溜を讀んで流と爲し、二字を解して舟を流水の上に放つの義と爲せるは非なるに似たり、若し此に従はば、下句登舟の二字終に贅

疣と爲るべし、故に取らず、寧忘經濟日。不憚沍寒時。是れ張丞相を言ふ、
 沍寒の時を憚らずとは、歲寒にして松柏の後凋を知る、同意なり、洗
 幘豈獨古。濯纓良在茲。是れ浩然自から謂ふ、自己布衣の山人を以て楚
 地に放浪す、故に楚地の故事に援据して自から比するなり、楚の狂士
 陸通、松下に高臥し、其の巾幘を樹頂に掛く、鶴あり銜んで水濱に去る、
 通因て之を洗ひ鶴と同じく去る、洗幘の出典なり、濯纓は習見の事、唯
 其の楚地に切なるを知らんと要す、寧忘の二句張を謂ひ、洗幘の二句
 自から道ふ、是れ各人各事終に申連を欠きたるが如し、是を以て又政
 成の一聯を下し、兩者を合して一貫せしむ、政成人自理とは、寧忘の二
 句を承けて張が適宦に在りと雖猶ほ經濟を忘れざるの意を見はし、
 「機息鳥無疑」とは自己が洗幘濯纓の高操更に世に求むる所なきを以
 て張丞相に陪游すと雖毫も禮法の拘を受けざるを言ふ、機心全く息

めば鳥復た何の疑ふ所ぞ、喩を設くる極めて妙なり、此の一聯に由つ
 て張と自己とは己に湊して一處に在り、因て起手に反觸して舟中の
 景物に及ぶ、

雲物の蒼茫たるを望んで以て孤嶼の上に吟じ、江山の渺邈たるに對
 して爲に四維の隅を辨ず、舟中流に在るを以て時に方位を誤るの虞
 あり、是れ四維を辨ぜざるべからざる所以、二句は舟游の景而して張
 が爲めに異土流落の感を寫すもの、自から言表に在り、晚來の二句は
 「雲物の句を申して時序に入り、其の日の恰も冬至たるを點じて暗に
 不憚沍寒時」の句の爲めに一解釋を下せり、獵響驚雲夢、漁歌激楚辭、二
 句は上の濯纓良在茲、機息鳥無疑、等より反跌して出で、現在の見聞す
 る所に就て折れて感慨に入る、曰はく今や機心已に息む、而して雲夢
 澤上遙かに獵箭の響くを聞くは何んぞや、纓を濯ひ足を濯ふ、清濁は

原と計する所に非ず、而して滄浪の漁歌、其の聲轉、激越にして、屈原楚辭が哀怨を帯ぶが如きは、何んぞや、隱隱躍躍の中、一は張が賢明を以て、讒舌の中傷を免かるゝ能はざりしを慨し、一は自己が江湖に優遊すと雖、未だ不遇の歎あるを免かれざるを悲む、全篇の本意、全く此に在りて、義を比興に取り、讀者をして、味を象外に尋ねしむ、故に結二句に至つて、佗傑彷彿、吾れ將さに安んか、歸らんとするやの感あり、若し是れ記事のみ、是れ寫景のみと曰はば、其人便はち是れ櫓板漢なり、與に詩を言ふべからず、

按するに曲江集中に初發江陵有懷の作あり、蓋し渚宮に泊するの翌日賦して、以て浩然に示せしものなるべし、詩に云ふ

極望潯陽浦、江天渺不分、扁舟從此去、鷗鳥自爲群、他日懷眞賞、中年負俗紛、適來果微尚、倏爾會斯文、復想金閨籍、何如夢渚雲、我行多勝寄、浩

思獨氛氣

此の時倏爾會斯文の句、原と其の解を得ず、浩然が本篇と對照するに及びて、始て張が此の行、孟と同じくせしを知り、従つて此の句の指す所を明白にすることを得たり、是れ從來諸家の注本の曾つて言はざる所、予が家偶、曲江集を藏するを以て、本篇を評釋するに當り、査核對閱、恍として、左右原に逢ふの想あり、則ち中心欣悅覺へず、之を後に書す、自から亦殆んど何の故なるを知らず、

送柴司戸充劉卿判官之嶺外 高適

嶺外資雄鎮、朝端寵節旄、月卿臨幕府、星使出詞曹、海對羊城澗、山連象郡高、風霜驅瘴癘、忠信涉波濤、別恨隨流水、交情脫寶刀、有才無不適、行矣莫徒勞、

柴司戸は劉が嶺外都督府の判官となり、往て其の幕に赴く、劉は蓋し

朝廷の列卿を以て出で、嶺外の都督と爲りしもの故に劉卿と云ふ
 たり、首四句嶺外より起こり劉が其の都督たる所以を點じ終に柴の
 之が佐と爲るに及ぶ、中四句は嶺外の風物兼ねて柴が職に稱せんこ
 とを期す、結四句は高適が送別の本題なり、
 資は賴籍の義、嶺外は廣州の地、南方の炎徼に接す、雄鎮に依籍して以
 て夷蠻を控制せざる可からず、是の故に朝廷特に其の人を選擇し、命
 世の才を拔擢して寵賜するに節旄を以てす、是に於て平劉は既に月
 卿の班を以て此の重任に勝り出で、幕府に臨み而して今や柴も亦
 星使として其の判官と爲り、詞曹を辭して遠く嶺外に行かんとせり、
 夫れ五羊の城は近かく南海の空濶なるに接し、嶺南の山高かく柳州
 の象郡に連なる、是れ嶺外の形勝に非ずや、况んや瘴癘の毒、波濤の險
 是れ人の尤も行くを憚かる所なり、君は乃はち風霜嚴肅の威を以て

直ちに其の瘴毒を驅除し、忠信審諤の誠を以て易す、其の怒濤を涉
 破せんとす、則はち此等の險惡固より當さに君の畏るゝ所に非ざる
 べきなり、唯、此の一別、再會終に測るべからず、臨岐低回、焉んぞ心に惻
 焉たるものなきことを得ん、即はち我が別恨、長く流水に随つて盡く
 る期なきなり、晋の呂虔は寶刀を長史王祥に授けて曰へらく、苟も其
 の人に非ずんば、刀は反つて殃を爲す、君に令徳あり、宜しく之を佩ぶ
 べしと、今、私の別に臨み、寶刀を贈りて以て交情を表するものは、亦實
 に呂虔が意のみ、君が才や固より往として適せざるは無し、此の行の
 成功あるは論なきなり、故に行矣、莫徒勞と曰ふ、莫は、無かるべし、の意
 禁戒の詞に非ず、誤まる勿れ、
 廣州に五仙人あり、五羊に騎りて逍遙す、故に其の城を名けて五羊と
 曰ふ、象郡は柳州の古名なり、山形象に似たるを以て此の稱あるなり、

此等自から坊注本あるも便を以て之を注明す、前后之に倣ふ、

陪實侍御泛靈雲池

白露先時降。清川思不窮。江湖仍塞上。舟楫在軍中。舞換臨津樹。歌饒向晚風。夕陽連積水。邊色滿秋空。乘興宜投轄。邀歡莫避驄。誰憐持弱羽。猶欲伴鷓鴣。

靈雲池ハ涼州に在り、涼州は西域の要塞なり、是れ蓋し高達夫蜀彭二州の刺史たりし日の作なるべし、達夫別に實侍御が靈雲南亭の讌に陪する詩あり、其の自序に云ふ、涼州は湖に近かし、其の池亭を高架するは、以て威を蕃落に耀せんと欲すればなりと、此の一言、以て本篇の「江湖」二句の好注脚に充つべきなり、實は想ふに侍御史の官を以て出で、涼州の節度たるもの高は、一刺史を以て、其の讌に陪す、故に末段深かく卑謙の語を見るなるべし、

白露は八月なり、時に先つて降ると云へば、此の宴の七月に在りしこと知るべし、靈雲池の清川に對し、轉思の窮らざるものあり、江湖の二句、則ち思不窮の所以を申す、夫れ涼州は固より塞上軍中、而して靈池は倒つて江湖舟楫の興あり、江湖舟楫は娛むべきものなり、塞上軍中、豈に娛しむべきもの歟、塞上軍中は悲しむべきものなり、江湖舟楫、則ち又何をか悲しまんや、江湖舟楫と雖實は塞上軍中の地なり、則ち其の意悲塞上軍中と雖實は江湖舟楫の興多し、則ち其の意娛二句反覆宛轉して、意は循環の如し、思不窮に非ずして何ぞや、津樹晚風、舞換り歌饒し、是れ江湖舟楫の樂、夕陽積水、邊色秋空、是れ塞上軍中の感、結四句歸つて實侍御に到り、自家が陪讌を以て總束す、而して不窮の思は終に之を盡言せず、不窮の不窮たる所なるべし、
舞換臨津樹、造句頗る奇なり、大典之を解して云ふ、舞ひ舟に隨つて回

つて、轉津樹の轉換するが如きを覺ふるなりと、此の解義頗る妙趣あり、今之に従ふ、結意は實は廷臣なるを以て擬するに、鶴鴻を以てす、故に羽羽を以て自から謂ふなり、投轄避聰皆な已に見ゆ、但し避聰は侍御の故事たるを忘る可からず、

達夫が靈雲南亭陪宴の詩、連唱波瀾動、冥搜物象開、新秋銜遠樹、殘雨擁輕雷、簾外長天盡、尊前獨鳥來、の句あり、本篇と互照して、靈雲水木の勝恍として眼前に浮かぶ、

行次昭陵

杜甫

舊俗疲庸主、群雄問獨夫、讖歸龍鳳質、威定虎狼都、天屬尊堯典、神功協禹謨、風雲隨絕足、日月繼高衢、文物多師古、朝廷半老儒、直詞寧戮辱、賢路不崎嶇、往者災猶降、蒼生喘未蘇、指揮安率土、盪滌撫洪鑪、壯士悲陵邑、幽人拜鼎湖、玉衣

晨自舉鐵馬、汗常趨松柏、瞻虛殿、塵沙立、暝途寂寥、開國日流恨滿山隅。

杜少陵の長律は變幻闊深にして、崑崙を涉り、溟渤に泛かび、千峰前に羅列し、萬彙後に汪洋たるの大觀あり、故に元微之の優劣論に、大は或は千言、次も猶ほ數百、詞氣豪邁にして、風調清深に、屬對律切にして、凡近を唾棄すと云ふ、此の言斷して當らざるに非ず、唯、其の精神氣力の尤も驚騰にして、精悍なるものを求むれば、多くは二十韻以下の短篇に在りて、五十韻百韻に至つては終に未だ頽唐の憾なき能はず、然るに微之が意を推究すれば、却つて其の長かきものを盛揚して、以て李太白を壓倒せんとするもの、如し、皮傅の見、非ずと謂ふ能はざるなり、故に元遺山は論詩絕句に於て、少陵自有連城壁、爭奈微之識砥礪、と云ひ、沈歸愚も亦、五言長律は六韻に起りて、後漸次に恢擴し、少陵に

至つて滔々百韻なり然れども句意は重複なからず又重韻あり少陵の才の大なる海の如しと雖連城の壁と成る能はずと云へり是れ定論なり是の詩十二韻獨り少陵集中長律の冠たるのみならず亦實に萬古の大雄篇大傑作なり昭陵は唐の太宗の陵なり太宗は古今無雙の賢君なり太宗の治は三代後の僅かに有る所と稱す少陵は古今第一の詩人なり而して少陵の時は寔に亦古今罕に見るの禍亂の世に際せり夫れ古今第一の詩人を以て古今無雙の賢君の陵を過ぎ古今僅かに有るの治政を追懷して以て古今罕れに見るの禍亂を傷む則はち其の詩安んず萬古の大雄篇大傑作たらざるを得んや請ふ我が細かに之を評釋するを聽け

太宗侍臣に謂つて曰はく古へは山に因りて墳を爲くる我れ九峻山を見るに孤秀にして迥絶なり因て傍鑿して山陵と爲すべしと崩す

るに及んで此に葬る是れを昭陵と名つく長安灃泉の北五十里に在り少陵の舊集誤つて本篇を天寶初年の作とす草堂詩箋は之を少陵が北征の詩の後に次す此れに據れば少陵が昭陵に行次せし日は即ち肅宗鳳翔の行在に即位し稍中原を收復するの機到れる時にして玉華宮九成宮の諸作と同時に成るものなり錢謙益此説に據りて箋を作りしより朱鶴齡仇兆鰲沈德潛浦起龍の諸注以て乾隆御批の定本に到るまで一に之に準依せざるは無し因て今亦之に従ふ詩は截然として上下の兩大段に分かつ起句より賢者不崎嶇に至る十三句有唐開國に溯りて太宗貞觀の治を言ふものは是れ上大段往者災猶降より結句に到る昭陵に行次するに因つて祿山の禍亂を傷むものは是れ下大段なり

最も妙は起手舊俗疲庸主の五字反筆を以て唐の開國を逆起すと雖

亦暗に下段往者災猶降の一解を引出して筆墨飛動するに在り何と
なれば此の句の意六朝の世より昏庸の主相繼ぎ隨の煬帝に到りて
民俗の疲弊其の極點に達したるを言ふものにして之を總括して舊俗
と云ふ則はち今俗の弊自から筆下に在るを以てなり長律の起法是
に於て神變不可思議なり

庸主相次で民俗の疲弊已に極まれり是を以て艸澤の群雄四方に事
を擧げ以て煬帝の罪を問はんとす獨夫は紂なり此れ煬帝を指し其
の天意人心俱に離叛するを形す按するに隋書に楊玄感曰はく獨夫
虐を肆にし身を絶域に陷る此れ天亡の時なりと又舊唐書の贊に高
祖獨夫の運去るを審にし新主の勃興するを知るとあり此れ亦與に
煬帝を指斥して獨夫と爲したるなり太宗生れて方に四歳書生あり
之を相して曰はく龍鳳の姿天日の表あり年將さに二十ならんとせ

ば必ず能く世を濟ひ民を安せんと高祖之を殺さんと欲するに忽ち
所在を失す因て其の言を採り世民を名とす李密竇建德等の群雄蜂
起するに及んで太宗終に高祖を奉じて太原に勃興す豈に識歸龍鳳
質に非らずや太宗の天下を定むる所以は首として關中の地を取り
しに在り關中は秦の都なり故に虎狼の都と云ひ併せて隋を秦に比
す天下の俱に逐はんとする所なればなり以上四語先づ四海の昏暗
を言ひ次ぎに隋を除くに入り群雄を以て之を一總し識歸の二句に
於て歸つて太宗に到り本題に吸收す有唐受命の故唯二十字を以て
之を了せり雄邁絶世と謂はざるべけんや

高祖天下を得て位を太宗に讓る猶は堯の舜に於けるが如し高祖を
諡して神堯皇帝と云ふも此の意なり然れども事業は太宗に定まる
も功は終に高祖に歸せざるを得ず故に天屬尊堯典と云ふ天屬は莊

子の語にして父子の義なり、高祖の太宗に譲る、其の徳を以てすと雖亦天屬の親あり、其の事豈に堯典より尊からずや、而して太宗の治を致す、亦千古に冠絶し、神功遠く禹謨に匹協すべきものあり、是を以て從龍の諸臣風雲に際會し、競つて太宗が絶足の馬に従つて、以て輔佐の功を盡くし、庸主昏疲の天下を既倒に回へして、日月の天路に繼輝して並照する如く、光華復旦の盛を見ることを得たるなり、絶足は馬の名なり、句意太宗が天姿の颯爽たるを借形するものありと知るべし、日月は以て高祖太宗に喩ふるなり、

宋の許玄周は曰はく、文物多師古の四句は、太宗が智勇英特にして、武をもて天下を定めて、而して能く此の如く最も盛徳なるを見るとき、乾隆御批は曰はく、太宗が行政用人、諫を納れ賢を進む、後代の及ぶ所に非ず、文物の四句能く其の要を擧ぐと、此の二語能く之を評し盡くし

たり、文物多師古とは雅樂を定め、律令を制する如きを謂ひ、朝庭半老儒とは虞世南等の諸學士を用うるを言ふ、直詞にして戮辱せらるゝことなし、苦諫亦能く聽受せらるゝなり、賢路にして崎嶇ならず、才賢皆な所を得て、絶て壅塞せらるゝの思なきなり、一部の貞觀政要は、此之を包該するに足る、此の一解亦首句に應ず、蓋し是に至つて舊俗の疲は盡く濟救せられざるなきなり、以て上半段を結び、兼ねて下半段の災變再び至るを起す、以上上半段

往者災猶降、以下の句、諸説聚訟して一ならずと雖、斷として、玄宗が天寶の禍亂に就き慨を致すものなりとするを正とす、願亭林の如きは、以爲らく、此の句、玄宗が武后章后の濁亂を鎮めて、唐室を再興したるを指すと、是れ舊集此詩を編して天寶初年の作とするより誤解したるものにして、若し此の説に従はば、此詩は玄宗未だ祿山の禍を蒙ら

ざる時の作なり、果して然らば下文に恨を流かして山隅に満つと云ふもの、終に病まずして呻吟し寒からずして粟肌するの譏あるべし、又此段四句を仍ほ太宗に繫け、隋季の疲政を盪滌して唐の天下を創めしことを申言するものなりと云ふに至つては、尤も陋見の甚しきものなり、錢虞山は曰はく、蓋し天寶の亂は乃ほ隋末の災の再ひ今日に降るを言ふなりと、此の言尤も明確なり、今之に従ふ然れども虞山は指塵盪滌の句を解して、收復の功を頌すと云ふ、此れ稍語病あり、何んとなれば、少陵が此の作は肅宗仍ほ鳳翔に在るの時にして、未だ長安收復の功を奏したる時に非ざればなり、沈歸愚は謂ふ、天寶の亂隋末に同じければ安んず、太宗の神靈の之を指塵盪滌するか如きを得んと、予と大に此の説を可とす、則ほち此の四句は深憤を陷京の事を寄せて、靈を太宗在天の神に乞ひ、一日も早やく中原を恢復し、蒼生

の殘喘を救くひ、率土の瘡痍を療せんことを望むなり、

故に下之に接して曰はく、壯士悲陵邑、幽人拜鼎湖と、此の二句作者が行て昭陵に次せし正文にして、幽人は杜甫自から謂ふなり、天寶の亂上述の如くにして、長安も亦胡塵に陷る、則ほち懷忠の壯士、太宗が陵邑を過ぎて寧ろ自から悲しまさるものあらんや、幽人我の如きも亦此の地に止宿して覺えず、陵下に拜伏し、嗙嗙慟哭に堪えざるものあり、鼎湖は黃帝昇天の處、借りて昭陵を指し、以て攀轡の痛に禁ぜざるを形するなり、玉衣の二句は並に故事を用ゐて、太宗の英靈今猶ほ在すが如くなれば、必ず指塵盪滌の希望を滿たすものあるべしと言ふなり、玉衣は寢殿藏する所の御衣なり、王莽の漢を篡せしとき、哀帝の御衣寶匣中より抜け出で、堂外に樹立せしと傳ふ、此の句言ふところは、太宗の玉衣も亦必ず此の如く、祿山の逆を怒りて、晨に自から

擧かりて寢殿の外に出しことあべるとなり。又六朝の時蕭獻益州の刺史たり。賊亂あるに逢ひ、楚王廟に祈りしに一鐵騎あり、東より來る俄かにして數百騎あり、風の如くに飛び去る、顧みて廟中を見れば、土偶皆な泥濕して汗の如しと、鐵馬の句蓋し此に本つき太宗の靈能く、鐵馬を驅使して賊を掃盪する應さに此の故事の如きものあるべきを言ふなり。接するに安祿山事蹟に、祿山の潼關に入るや、唐軍己に敗る、賊將崔乾祐、白旂を領して左右に馳突す、狀神鬼の如し、忽ち黃旗軍數百隊あり、賊と闘ひ退て、又戰ふもの數回、俄かにして行く處を知らず、後ち昭陵の祠官奏すらく、是の日靈宮前の石人石馬皆な流汗すと、人始めて太宗の靈を顯はせしを知りしと云ふ。李義山の詩に「天教李令心如日、可要昭陵石馬來。」又韋莊の詩に「興慶玉龍寒自躍、昭陵石馬夜長嘶、皆な此の事を用ゐたる者なれば、唐代に此の説ありしは、知

るべし、故に諸家の注多く、此を引て本篇を解し、鐵馬云は全く當時の實事なりと云へり、文苑英華の如きは鐵馬を以て石馬に改め、祿山事蹟の文に合はしむ、錢虞山の箋注も亦英華に従ふを是なりと爲す旨を云へり、予は祿山事蹟の文を信ずる能はず、竊かに其の少陵が此篇に依りて捏造したる唐代一種の小説なるべしと疑へり、縱然ひ數歩を譲りて少陵より以前己に此の説ありしとするも、少陵は唯之を影寫するに過ぎず、文の表面は全く六朝の蕭獻が事を用ゐしものなるべきなり、若し遽かに鐵馬を改めて石馬とせば、其の甚だ實相なるを訝からざるを得ず、浦起龍亦曾つて之を駁して、錢說の如く昭陵の事實に半據すとせば、玉衣の句は將た何等の事實ありやと云ふ、駁し得て極めて痛快なり、予は起龍に袒せんと欲す、甚しきは少陵の此の詩を禍亂以前の作なりとしたるもの、彼の黃旗軍の事を引きて、杜公

の斯の句識を成せしなりと言へるものあり、曲解の極、反辨を加ふるに足らず、沈歸愚は玉衣の句の神靈陟降を言へるは、離騷の神之來兮、夾兩旗とある趣を取れりとす、此れは則ち當れるに幾し、之を要するに、玉衣鐵馬は少陵が山陵を拜する時の胸中の想像を繪きしのみ、森森たる松柏の間、虛殿を瞻望して、徒らに此の空想を劃し、惘然として塵沙の冥途に立つ、是れ即ち山陵を拜する時の眼中の實景なり、虛の字、冥の字、味ふべし、此の二字あるが爲めに、玉衣鐵馬の神理は自から一貫せるなり、寂寥開國日、二句、上半段を束ね、流恨滿山隅、二句、下半段を結ぶ、開國の盛、今己に寂寥徒らに中原の盪滌を神靈の冥助に借らざるを得ざらしむ、豈に恨涙を流して此の山隅に満たざるを得ん、耶、國家を憂ふるの深かき、恢復を望むの切なる、少陵一飯不忘君の精神、是に於て平火を視るが如し、以上下半段

乾隆帝謂ふ此の詩氣象鬼戟にして規模宏遠なり、華茂典重の中、沈雄悲壯の概ありと、嗚呼唯其の沈雄悲壯の概ある、即ち初唐諸子の及ぶ能はざるものにして、我れ此の種を評して、變雅の音なりと曰ふ所以なり、然れども少陵をして初唐の世に在らしめば、亦必ず此の沈雄悲壯の概あるをけん、詩の時運に關すとは、即ち是なり、又謂ふ玄宗勵精して治を爲す、開元の政化、上太宗に媲へるも、盈を持し、泰を保つ能はずして、宵小を任用し、聰明を蔽塞し、以て天寶の禍亂を致す、太宗の靈に非ざるよりは、則ち唐室墟と爲らんのみ、少陵流離の餘徘徊瞻眺し、時を傷み、往を撫して、恨を山隅に流が、開國の盛を想ふて、而して亂を致す所以の故、言外に、隱然深廣無端にして、波瀾萬狀なりと、是れ眼光紙背に透り、直ちに少陵の精神を批し、得て出づるものなり、我れの評釋は全く此に本づく、玉華宮の末に云はく、憂來藉草坐、浩歌

淚盈把冉冉征途間。誰是長年者。本篇歸結の悲慨と同じ。明らかに同時の作なり。

重經昭陵

草昧英雄起。謳歌曆數歸。風塵三尺劍。社稷一戎衣。翼亮貞文德。丕承戡武威。聖圖天廣大。宗祀日光輝。陵寢盤空曲。熊羆守翠微。再窺松柏路。還見五雲飛。

杜集の舊本、二詩を並べ擧ぐ、故に諸説多く二詩を同時の作なりとし、前篇に於て亂を傷みたれば、更らに此の篇を作つて治を望むなりと云へり、然れども已に題して「重經」と云へば、斷じて「行次」の時に非ず、前には曰ふ「寂寥流恨」と、此には曰ふ「松柏雲飛」と、悲一喜、今昔の觀を成すもの、如し、肅宗長安を收復して後の作なりとするもの當れり、因て之を用う、或は曰ふ「松柏雲飛」は哀王孫の「五陵佳氣無時無」と云へるに

等しく、仍ほ希望を抒ぶるの詞なりと、此れも亦通ぜざるに非ず、今は專はら浦解に従ふ、

草昧の際、英雄雲の如くに割據して起ると雖、民皆な謳歌して我が太宗を迎へし、所以の者は他なし、天命曆數の歸する所なるが故なり、是を以て太宗は能く三尺の劍を以て風塵を掃清し、「戎衣」を以て社稷を創立することを得たり、以上四句は專はら太宗を詠ず、以下は則ち口々に祖徳を述ぶと雖、神は實に世運を含めり、是れ太宗に粘定して言ふものに非ず、然れども固より作者が裏面の微意如此のみ、表面は太宗を言ふものなること論を俟たず、

太宗は能く高祖を翼亮して、終に大位を丕承し、武を偃めて文を修めたり、此の如くに言ひ做して、神は實に後世の子孫が晏安の爲めに禍を致せしことに注射す、故らに丕承の字を用ゐたるは、暗に後代の丕

承。ず。る。能。は。ざ。り。し。を。示。す。な。り。聖。圖。の。二。句。も。表。面。に。在。つ。て。は。單。に。太。宗。に。就。き。て。言。ふ。と。唯。裏。面。の。意。は。肅。宗。長。安。を。恢。復。し。て。能。く。祖。先。の。宗。祀。を。日。星。と。共。に。輝。や。か。し。む。る。を。得。た。る。は。亦。唯。一。に。太。宗。が。聖。圖。の。廣。大。な。る。に。賴。ら。ず。ん。ば。あ。ら。ず。と。云。ふ。に。在。り。即。は。ち。北。征。の。篇。末。煌。煌。太。宗。業。樹。立。甚。宏。達。と。同。意。な。り。

「陵寢盤空曲。熊羆守翠微。是れ長。安。恢。復。後。の。昭。陵。な。り。故。に。氣。象。前。と。同。し。か。ら。ず。空。曲。は。空。山。の。阿。と。云。ふ。に。同。じ。熊。羆。は。借。つ。て。守。陵。の。兵。衛。を。謂。ふ。な。り。再。觀。松。柏。路。其。の。重。經。た。る。を。點。明。す。還。有。五。雲。飛。二。結。祥。瑞。氣。氤。中。興。の。王。氣。殆。ん。ど。開。國。に。將。す。是。れ。肅。宗。の。英。武。か。抑。亦。太。宗。の。精。靈。長。へ。に。在。る。な。り。作。者。が。深。幸。と。す。る。の。意。自。か。ら。見。ゆ。

曰。は。く。草。味。易。の。語。な。り。曰。は。く。謳。歌。孟。子。の。語。な。り。曰。は。く。翼。亮。尙。書。の。語。な。り。曰。は。く。丕。承。毛。詩。の。語。な。り。用。う。る。所。爾。雅。典。厚。の。文。字。な。ら。ざ。る。

は。無。し。故。に。經。史。を。用。み。て。詩。に。入。る。絶。て。斧。鑿。の。痕。を。見。ず。他。人。を。い。て。之。を。道。は。し。め。ば。未。だ。拙。滯。を。免。か。れ。ず。と。明。の。何。景。明。は。評。し。た。り。又。鍾。伯。敬。は。云。ふ。陵。廟。の。作。典。古。悲。涼。功。業。を。説。け。ど。も。竹。帛。の。氣。な。く。神。靈。を。説。け。ど。も。松。柏。の。氣。な。し。と。此。の。評。極。め。て。冷。儻。な。り。此。種。の。作。若。し。初。唐。に。在。ら。し。め。ば。己。に。功。業。を。説。く。必。ず。竹。帛。の。氣。を。帶。ば。ん。ど。要。す。己。に。神。靈。を。説。く。亦。必。ず。松。柏。の。氣。を。離。れ。ざ。る。な。り。少。陵。の。特。異。の。處。亦。就。て。以。て。悟。る。べ。し。今。人。鍾。譚。を。説。く。も。の。は。之。を。鬼。魅。視。し。て。始。め。て。甘。心。す。然。れ。ど。も。渠。が。評。語。の。警。峭。の。處。は。毎。に。人。を。い。て。嗟。賞。せ。し。む。る。も。の。わ。り。鍾。譚。が。詩。歸。明。末。を。風。靡。す。故。に。清。初。の。諸。家。口。を。極。め。て。醜。詆。し。以。て。一。頭。地。を。出。さ。ん。と。す。若。し。其。の。餘。唾。を。拾。ふ。て。唯。排。擊。を。事。と。せ。ば。此。の。人。已。に。錢。虞。山。朱。秀。水。輩。が。爲。め。に。嘯。過。し。了。せ。ら。れ。し。也。

王闓州筵奉酬十一真惜別之作

萬壑樹聲滿。千崖秋氣高。浮舟出郡郭。別酒寄江濤。良會不復久。此生何太勞。窮愁但有骨。群盜尙如毛。吾舅惜分手。使君寒贈袍。沙頭暮黃鶴。失侶亦哀號。

代宗の寶應元年、少陵が依る所の嚴武へ入朝し、西川の徐知道反して蜀の成都大に亂る、故に少陵己むことを得ず、禍を避けて梓州に入り、其の明歲廣徳元年、更らに閬州に之く、此の詩は則ち閬州の作なり、王閬州は即ち閬州の刺史、十一舅は杜の親故、王は杜と交誼極めて厚き者、杜の闔に之きしも全く此に頼らんと欲したるなり、故に十一舅の爲めに特に別筵を設けしものと見ゆ、本集五言古詩に閬州東樓の筵に十一舅が青州に赴くを送るの詩あり、此の篇蓋し同時の作にして、想ふに此の別筵先づ船に乗じて郭外に出で、終に東樓に飲饌したるものなるべければ、此の詩は舟中彼の作は樓上にて成りしもの

ならん、詩起四句、別筵を虛寫し、中四句、別况を虛寫し、結四句、賓主を實點す、惜別の情は語語に見はれたり、

先づ景語を以て始む、萬壑の樹聲、千崖の秋氣、極目蒼茫、不盡の意あり、詩家は最も此の起手を争はんと要す、舟を浮かべ郭を出で、酒を舉げ、饑と爲す、王閬州の盛情感するに餘あり、然れども、流離患難の際、骨肉相倚て、僅かに相慰籍す、而して今や忽ち別れざるを得ず、則ち如此の良會は終に復た久うすべからず、此の生の勞頓一に何ぞ甚しき此に至れるや、我れ窮愁の域に沈淪して、爾來但骨を餘ますのみ、而して成都の亂後、群盜尙ほ毛の如し、則ち獨り一身の苦のみならず、世の亂も亦此の如きあり、此の身を以て此の世に處し、又此の別を爲さざるを得ず、聲涙の俱に下るを覺へざるものあるを見るなり、吾舅は分かれんことを惜む、故に惜別の作あり、王閬州は此の心を諒す、故に綿

袍の贈あり沙頭日暮れて黃鶴哀號す彼亦是れ失侶の悲ある乎我の中心亦洵に何を以てか懷を爲さんや此の四語身の留詩を點清し王閩州の主誼を帶表し又失侶の黃鶴を以て自から酬別の意を況す情到り筆到り神到り氣到る然れども是れ少陵が家常の茶飯干鱗の此等を取りて却つて投贈哥舒開府二十韻奉送嚴鄭公入朝十韻謁先主廟喜聞官軍臨賊境二十韻有感五首等の大作を遺せしは未だ其の解を得ざる所なりとす

春歸

苔徑臨江竹。茅檐覆地花。別來頻甲子。歸到忽春華。倚杖看孤石。傾壺就淺沙。遠鷗浮水靜。輕燕受風斜。世路雖多梗。吾生亦有涯。此身醒復醉。乘興即爲家。

春歸とは春日成都に歸るの義なり廣徳二年の春嚴武再び蜀を鎮し

て成都の亂將に平がんとす故に杜も亦艸堂に歸り再び之に依りしなり起四句は敘事。中四は寫景。結四は遣情なり。

臨江の修竹、綠に苔徑に蔭し、覆地の落花、紅を茅檐に點ず、是れ即ち所謂の浣花艸堂なり、曾て永く此に居らんことを願ふて、兵塵の及ぶ所、勢ひ難を避けざるを得ず、終に此に別かれて、梓閩の間に飄泊したり、爾りしより來、甲子頻に換はり、己に二年を徒過して、今漸やく歸り、到れば、忽ち復た春光の爛熳たるに遭ふ、以上所謂の敘事にして、春歸せし所以の經歷を述ぶるなり、艸堂の景、亂を経しと雖、依然として恙なし、是に於て、藜杖に倚つて、孤石の嶄巖たるを看、酒壺を傾けて、淺沙の明淨なるに就けば、遠鷗は水に浮かんで、心靜かにして、飛かず、輕燕は風を受けて、態斜にして、人に近づく宛として、舊主人の歸來を識るものに似たるなり、以上寫景、遠鷗の二句、古人嘖嘖として稱歎す、螢花

叢話に云はく老杜の詩好んで受の字を用う。池光不受月。輕燕受風斜。の類是れなり。東坡尤も輕燕の句を愛し、以爲らく燕風を迎へて低く飛び乍ち前み乍ち後く却つて受の字に非ざれば形容する能はずと。楊徳周も亦之を詠じて盡きず之を味うて餘ありと云へり。沈歸愚は謂ふ。鷗燕の性情態靜の字斜の字を以て傳出すと。浦起龍は謂ふ。上句の妙は靜の字に在り。下句の妙は受の字に在り。と見る所各小異あり。と雖此の一聯の虛字を運用したるを擧賞するは則ち一なり。世路雖多梗。吾生亦有涯。言ふこゝろは今蜀郡の亂は漸やく平らぐと雖。世路の梗塞猶ほ多し。杜陵の故園に歸つて優游年を送くらんことは固より望むべきに非ず。然れども吾生は亦己に涯あり。若し梗塞全く除くの日を待たば只恐らくは河の清むを待つが如くならんのみ。故に今且つ蜀亂略ぼ平らぎたるを幸として他郷と雖聊か自から安

んじ。醒醉興を遣り吾意の適する所に隨ふて家を爲さんと欲すと。なり無可奈何の極乃ち放曠の詞を爲して自から慰む甚だ樂しむもの。如くして其の意は反つて極めて沈痛。

江陵望幸

雄。都。尤。壯。麗。望。幸。歎。威。神。地。利。西。通。蜀。天。文。北。照。秦。風。煙。含。越。鳥。舟。楫。控。吳。人。未。枉。周。王。駕。終。期。漢。武。巡。甲。兵。分。聖。旨。居。守。付。宗。臣。早。發。雲。臺。仗。恩。波。起。涸。鱗。

江陵は肅宗の上元元年に於て荊州を以て南都と爲し更らに江陵府と名づく。代宗の廣徳元年に到りて吐番の兵猖獗を極め終に入つて長安を侵し西京再び陷る。代宗出で陝州に幸し難を避く。是の時少陵は蜀の梓州に在り天子の己に陝に幸して更に江陵の南都に幸せんとするの議あるを聞き此の詩を作りて早やく其の議を果たさん

ことを希望す、蓋し江陵は蜀の東隣なり、若し天子の此に駕を移すあ
 れば、少陵蜀に居て乘輿に趨瞻するに易すし、葵。花。傾。日。の。精。誠。自。か。ら。
 當。さ。に。然。か。る。べ。き。な。り。題。し。て。江。陵。望。幸。と。云。ふ。も。の。は。江。陵。の。土。地。を。
 代。表。し。て。車。駕。の。此。に。幸。せ。ん。こ。と。を。望。む。の。意。獨。り。少。陵。一。人。の。私。衷。の。
 み。に。非。ざ。る。を。形。は。し。た。り。舊。注。多。く。身。江。陵。に。居。て。幸。を。望。む。と。解。せ。る。
 は。非。な。り。詩。前。半。は。江。陵。の。形。勢。後。半。は。望。幸。の。本。意。先。づ。其。の。形。勢。を。盛。
 ん。に。鋪。陳。せ。る。は。車。駕。の。來。幸。を。促。す。所。以。な。り。
 首。句。は。前。半。を。領。し。次。句。は。後。半。を。領。す。是。れ。全。篇。の。大。綱。な。り。江。陵。は。荆。
 南。の。雄。鎮。改。め。て。南。都。と。爲。り。し。よ。り。規。模。一。層。の。壯。麗。を。加。へ。た。り。而。し。
 て。今。や。復。た。車。駕。來。幸。の。議。あ。り。之。を。聞。く。も。の。皆。な。踴。躍。盼。望。し。歎。然。と。
 して。更。ら。に。一。倍。の。威。神。を。添。ふ。る。を。覺。ふ。抑。江。陵。の。地。利。た。る。西。は。壤。を。
 巴。蜀。に。通。じ。其。の。天。文。の。星。宿。は。北。の。方。遙。か。に。秦。中。の。分。野。を。照。ら。し。東。

南は則ち江漢に沿ふて吳越の地に臨む故に渺渺たる風煙越國の
 鳥を含んで飛來し片片たる舟楫吳地の人に由つて控送せらる形勝
 の雄なる此の如し寧ろ天子の眷顧を得るに價せざらんや前半段
 而して此地實は未だ周王の駕を枉げざるなり周王は未だ駕を枉げ
 ざるも漢武は終に巡幸せんことを期せり周王漢武並びに借言のみ
 此地未だ駕を迎へざるも天子の意は實に此に來幸せんとせらるゝ
 に在るを言ふなり未枉終期二虛字に由つて望幸の精神を挑撥し出
 づ代宗の陝に幸するや衛伯玉に才幹ありて重寄に當つべきを以て
 乃はち江陵の尹を拜し御史大夫を兼ね荆南の節度觀察使に充つ甲
 兵の二句は此の事を指し且つ望幸の精神より之を付度して特に此
 の地の居守を宗臣に委ねらるゝものは天子來幸の意あるに由るも
 のなりとなせり己に此の舉あり則ち願はくは早やく雲臺の儀仗

を發して駕を此の地に枉げ、更らに廣く恩波を推して、我の如き涸鱗の車轍の間に响沫し、斗升の水を得んことを望んで能はざる者を救起せよ、未一句覺へず、一身の私衷に入る之を望むや、切に之を禱るや、至れり、其の情洵とに憫傷すべし、後半段

上元の初、江陵建都の議あるや、少陵大に之を非とし、建都十二韻を作くりて盛んに其の不可なるを鳴らせり、而して本篇は却つて駕の江陵に幸せんことを望む、大に矛盾せるもの、如し、詳かに前後の事勢を考へて、此の疑團は始めて氷釋することを得べきなり、蓋し彼の時は長安已に收復して、惟、河北のみ未だ平らがず、專意に北向して、以て禍本を除かんことを力むるは、實に當時の急務にして、此の際に當り、都を荆南無事の地に建て、虚に國勢を張りて、民を勞し、衆を動かすは、迂疎の甚しきものなり、因て建都の議に反對して、意外の虞を生ぜん

ことを言ひたるなり、本篇の時局は此と異なり、吐蕃方さに披猖にして、長安は胡塵に陥り、乘輿陝中に播越す、乃はち其の君をして一步も遠く危害の地を避けしめんとするは、臣子忠愛の至誠にして、加ふるに自己亦涸鱗轍鮒の窮厄に淪す、安んず、來幸を盼望せざるを得んや、或は其の初心に負くを疑ふものあり、是れ事勢を通觀せざるもの、皮相の見のみ、若し此を以て少陵を議せば、眞に所謂る蚍蜉大樹を撼かすものなり、

代宗の亂を致せしは非人を信任し、老臣を用ゐざりしに由る、故に吐蕃一たび闕を侵かして、官吏奔散し、車駕供給の資に乏しく、扈從の將士皆な飢餓を免がれず、己にして魚朝恩の營に幸し、詔を下して兵を徵すも、諸將小人の讒構を怕れて至る者あることなし、當時形勢の危殆なる想ひ見るべし、陝中に幸し行在に達するに及んで、太常博士柳

伉の上疏を用ぬ、讒人程元振の官を削りて以て天下に謝す、是に於て諸將始めて安す、郭子儀終に衆軍を合して吐蕃を撃ち長安を克復することを得たり、因つて子儀を以て西京の留守とす、西京已に復す、復た遠く南幸するを用ゐず、故に江陵巡幸の議は茲に息みたり、大典の詩解本篇甲兵分聖旨、居守付宗臣を以て郭子儀の西京留守たるを指すものとす、若し此の如くなるときは本篇の望幸は甚だ謂はれなきの事となるべし、從ふ能はざるなり、

奉觀嚴鄭公廳事岷山沱江圖

沱。水。臨。中。座。岷。山。赴。北。堂。白。波。吹。粉。壁。青。嶂。插。雕。梁。直。訝。杉。松。冷。兼。疑。菱。荇。香。雪。雲。虛。點。綴。沙。艸。得。微。茫。嶺。雁。隨。毫。末。川。霓。飲。練。光。霏。紅。洲。蕊。亂。拂。黛。石。蘿。長。暗。谷。非。關。雨。丹。楓。不。爲。霜。秋。城。立。圃。外。景。物。洞。庭。傍。繪。事。功。殊。絕。幽。襟。與。激。昂。從。來。

謝太傅丘壑道難忘

沱水にして中坐に臨む、故に白波は粉壁を吹けり、岷山にして北堂に赴く、故に青嶂は雕梁に挿めり、是れ實に嚴鄭公が廳事に掛くる所の岷山沱江の圖なり、姑らく書を認めて眞と倣して、此の水此の山直ちに此の北堂の中坐の來るかど疑ふ、既に他の書手の眞に逼まるを刻狀して兼ねて、我が詩句をして活動せしむ、即ち杜が古詩奉先劉少府山水障歌の起手上不合生楓樹、惟底江山起煙霧、と同一筆法にして一篇の意匠は此に在るなり、嚴鄭公は嚴武なり、

直訝杉松冷、以下の十二句、毎句山水を分寫す、杉松は是れ山、菱荇は是れ水、雪雲は是れ山、沙草は是れ水、嶺雁は是れ山川、光は是れ水、洲蕊は是れ水、石蘿は是れ山、暗谷は是れ山、丹楓は是れ水、立圃は是れ山、洞庭は是れ水なり、而して曰く、直訝曰く兼疑曰はく、虛點綴、曰はく得微茫

曰はく「隨毫末」曰はく「飲練光」曰はく「霏」曰はく「拂」曰はく「非」曰はく「關」曰はく「不」
 爲「數虛字」を運用して其の畫意を隱返したるも、仍ほ明かに是れ畫な
 りと言はずして、玄圃洞庭に比例し、形容語を借りて之を一束す、字面
 の表には絶て画圖たることを露はさざるなり、仔細に之を尋繹して
 始めて知る、杉松の冷かなるは山の眞境なり、而して直ちに之を訝か
 れば即ち山の画境なり、菱苜の香ききは水の眞境なり、而して兼ね
 て之を疑へば即ち水の画境なり、雪雲の點綴せるは山の眞境なり、
 而して實は虚なり、即ち山の画境なり、沙草の微茫たるは水の眞境
 なり、而して縹かに得たり、即ち水の画境なり、毫末は筆なり、練光は
 絹なり、嶺雁にして筆に隨がひ、川蛭にして練に飲む、豈に其物即ち
 是れ画に非ずや、毫末練光一は以て雁影の微細を狀し、一は以て水光
 の激濫を況して、轉画意に關合する所以のもの、此の如し、即ち霏と

曰ひ拂と曰ふ亦豈に画手點染着色の工を言ふものに非ずや、谷逕の
 暗き若し眞境ならば或は當さに雨に關するなるべし、画境たるが故
 に斷して雨に關せざるなり、楓葉の丹きは眞境なれば固より霜降の
 爲めなり、画境たるが故に、明らかに霜の爲めならざるなり、然れば
 字字句句は是れ画にして、又字字句句其の画たるを明言せず、首段に
 於て「臨」起「吹」挿と云へる四虚字の神理を搖曳して以て一大段と爲
 す、眞に極奇極巧極微極靈の文字と謂ふべきなり、

繪事功殊絶、此に至りて始めて始めて画圖たるを點清し、幽襟興激昂、此に至
 りて始めて奉觀の意を點清す、因つて謝太傅を以て嚴鄭公に擬し、其
 の丘壑の情を以て鄭公が身上より山水の上に拍合せしむ、章妥句適
 にして、行文浪靜かに風恬なるが如し、是を鋪陳排比と曰ふ、長律を誤
 つて排律と云ふは此の一躰あるに座す、卷首に於て之を辨じたるが

如く杜陵にして之あるは適其の才の洪纖盡く具はらざる無きを見
 る。後人專意に之を攻めば、則ち淪して小家數に入り終に雕蟲篆刻
 の讎なき能はず。是れ學者の尤も辨せざるべからざる所なり。仇兆鰲
 は云ふ、昔人此詩を論して宋人詠画の祖とせり、但其の山水を分寫せ
 るは亦謝靈運が始寧堡を過くるの詩に本づく、杜は用ゐて以て画を
 詠ず、更らに較詳細精工なるのみと、是れ其の淵源を明かにするなり、
 又胡夏客は云ふ、起聯は莊重にして、接聯は精警に、收語は穩足なり、此
 れ最も入格の篇なりと、所謂入格とは後世の所謂排律に似たる
 を以て其の格に入ると爲すもの、長律に混ざるに、試律の格を以てす
 るものに非らずと謂はんや、若し乾隆帝が此を評して精嚴流麗點睛
 の處は虚字に在り、讀者宜しく之を細玩すべいと云へるに至つては、
 至當の論、嘴を容るべきなし。

乾隆の御批又謂ふ、少陵の心は國家に繫げり、往々にして題に因つて
 闢入す、今嚴武の爲めに題畫して此に及ばざるは、蓋し志將さに遠引
 せんとす、故に語は旁及せざるなりと、此れ本篇が少陵の常作に似ず、
 絶て國家の事に關係したるものなきが爲めに辨護したるもの、如
 し、然れども詩人の意境は正さに廣く、縱然ひ少陵が忠君愛國の至誠
 なりども、豈に其の一言一動細となく大となく盡く皆な宜しく國家
 の事に關係すべしと謂ふべき耶、渠と雖も豈に必ず情を山水に怡ま
 しめんと欲するなき歟、渠と雖も豈に必ず風月に留連するなきを保
 せん歟、若し必ず此の如くならざれば、則ち少陵に非ずとせば、是れ
 少陵を以て村夫子視するものなり、一經自から守るの腐儒視するも
 のなり、題画は自から是れ題画なり、國家の事は自から是れ國家の事
 なり、其の題に由つて闢入するものあるは、之を作くるとき適百感胸

臆に逼まりて復た言に形はすに止むを得ざるものあるを以てのみ、
經常一様の時に在りて画山水に題す其の家國の事に及ばざるは論
勿きなり何ぞ必ずしも復た遠引の志の有無を問はん乾隆の批語は
持平の定案多し然れども亦時に此の腐論あり是れ沈德潜等が一種
門戸の見に感化せられしものにして渠が錢謙益の人と爲りを惡む
の餘其の集を燬して世に行はしめず甚しきは德潜が撰定せる別裁
集に於てすら其の錢吳等明の遺老を收むるを嗔りて痛罵毒詈を加
へたる如き齊しく己甚の行を免れざるは職として此に由るなり

冬日洛城北謁玄元皇帝廟廟有吳道士畫五聖圖

配極玄都闕。憑高禁籞長。守祧嚴具禮。掌節鎮非常。碧瓦初
寒外。金莖一氣旁。山河扶繡戶。日月近雕梁。仙李盤根大。猗
蘭奕葉光。世家遺舊史。道德付今王。畫手看先輩。吳生遠擅
場。森羅移地軸。妙絕動宮牆。五聖聯龍竟。千官列雁行。冕旒
俱秀發。旌旆盡飛揚。翠柏深留景。紅梨迥得霜。風箏吹玉柱。
露井凍銀床。身退卑周室。經傳拱漢皇。谷神如不死。養拙更
何鄉。

此の詩本選に在つては杜詩の最後に録すと雖實は杜の集中近體の
開卷第一首たり朱鶴齡が考ふる所に由れば詩中五聖云云の事實は
玄宗の天寶八載閏六月の事なるを以て此の詩は當さに天寶八載の
冬の作なるべしと言ふ此れ或は當さに然かるべし玄元皇帝廟は老
子の廟なり唐の世老子を以て其の祖なりとし皇帝の諡號を贈り祭
祀の隆を極む按ずるに封演が見聞記に唐の高祖の武德三年晉州の
人吉善なるもの羊角山に行きて白衣の老父を見る曰はく吾が爲め
に唐の天子に語れ吾は是れ老君にして即はち汝が祖なりと高祖之

を信じ廟を其の地に建つ。是れ唐の老子を崇祀せる始めなり。高宗の乾封元年、岱岳に行幸の還途、親しく老君の廟に詣で、追尊して、玄宗皇帝と曰ふ。是れ老子に帝號を加ふるの始めなり。玄宗の時に及んで、老子を尊信する最も厚く、老子の文河上公の舊注時に不經に渉るものあるを以て、帝親から之が注を作り、學者をして校習せしめ、天下の學官に令して之を朝廷の考試に用ゐしむ。又史記の列傳に伯夷を冠とせるを以て、勅して其の次を改め、老子の傳を開卷に置かしめ、又兩京の諸州に制して所在に玄宗皇帝の廟を建てしむ。天寶元年に至つて、改めて太上玄宗皇帝宮と名つけ、二年更らに長安に在るものを改めて太清宮と曰ひ、洛陽に在るを太微宮と曰ひ、其餘各處に在るを紫微宮と曰ふ。此の詩は洛城北と云へば、即ち太微宮に謁したるの作なり。天寶八載閏六月、玄宗太清宮に謁し、玄宗皇帝に封號を冊して聖

祖大道玄宗皇帝と曰ひ、又高祖太宗高宗中宗睿宗の五帝に、大聖皇帝の號を加へて、廟中に配饗す。此れ即ち五聖の事なり。唐世老子を國祖とする由來大抵是の如し。故に少陵が此の作亦老子の功德を叙述し、反覆申詳す。是れ其の國體を貴ぶ所以にして、洵に集中鉅麗の冠冕たり。李因篤曰ふ、此篇乃ち公が開手の長律、鳳翔初めて舒べ、九苞煥采あり。宜なり。其の一世に雄視するや、是れ此の詩の開卷に在るより立論したるものにして、未だ開手の長律なりと斷言するの、其當を得たるや、否を知らざるも、于鱗の移して之を最後に置きしは、洵とに何の故なるを知るに、苦しむなり。詩は四句を以て一意を易ふ、獨り、画手看前畫。以下の一解八句を以て一段としたり。蓋し意は玄宗皇帝の廟に謁するに在りと雖、吳道子が五聖の像尤も人目を動かすものあるを以て、特に意を加へて之を寫したればなり。

首四句は全篇の總冒なり、其の廟貌祀典尊と稱し祖を追ふの意、四句中に畢具せり、配極とは北極に配するの意、廟洛城の北に在るが故にしか云ふなり、立都は老子の居る所、老子の道德、玄を以て最上の至理とす、故に老子廟を謂ふて立都と爲すなり、闕とは深閉の意、廟の森肅なる一字を以て之を形容したり、憑高は廟の位置なり、禁籟は以て往來を防止する所のものにして我國の俗に竹矢來と謂へるに同じ、廟の四面は之を繚するに禁籟を以て、妄りに人の出入するを禁ずるなり、守祧は廟祝なり、周禮に此の官名あり、掌節も亦周官の名、唐の時立元廟に令丞各一員を置く、然れば周官を借つて以て令丞を分指したるなり、廟は國祖を祭れるを以て特に此の官を置き、其の歲時の具禮を嚴重ならしめ、併せて非常の災變を鎮護せしむるなり、廟の大、概此に見ゆ、故に以下は層を逐ふて之を分叙したり、

「碧瓦初寒外、二句略ぼ時序を點じ、題面の冬日と云へるに一照して下文別に之に應ずるものあり、然れども文勢は廟貌より一順に説下す、唯廟を形容するの詞と做して見るべきなり、碧瓦にして天宇初寒の外に超出す、其の高迥の氣象想ふべし、而して金莖の銅柱と一氣に相旁ふ、其の連亘の宏敞なる亦知るべきなり、故に京畿の山河は盡く前に朝宗して繡戸を扶撐し、天上の日月も亦下に光臨して、雕梁に接近す、以上四句は廟制の盛を言ふて上段配極憑高の意を申するなり、老子は生れて能く言ひ、李樹を指して曰はく、此を以て吾が姓と爲さんと、唐の李姓なり、老子を尊んで祖と爲すは實に此に本づく、故に仙李蟠根大と云ふ、漢の武帝は猗闌殿に生れたり、帝王の生所なるを以て借つて唐の歴代の帝宮を謂ふ、錢謙益は猗闌は武帝の故事たるを以て、専はら立宗を借稱するなりとす、然れども己に奕葉光と云へば

玄宗一人を指したるものに非ず、又此句單に玄宗を指すとせば、後の今王は贅元たるを免かれざるの觀あり、故に従はず、史記の列傳に老子を載すと雖、其の世系元と甚だ明白ならず、因て世家遺舊史と云へり、錢は史記の之を列傳に載せて世家に載せざるを言ふものなりとす、此れ又従ふ可からず、説は後に見ゆ、道德付今王とは玄宗尤も老子を崇信して手から其の道德經を注釋せられたれば、爲めに語を設けて老子の神靈殊に今皇の聖明に感じ、道德の玄理を授與したりと云ふなり、以上四句は老子を崇祀する緣由を書し、以て首段守祧[守節]の句に應じたり、首段の意此に至りて申明せざる所なし、故に下文は其の廟中の畫に及ぶ、

朱景玄が畫斷に吳生東都玄廟の五聖千官を畫かく、宮殿冠冕勢ひ雲雷を傾け、心は造化を奪ふ、神品の上に居れり、とあり、少陵が見る所

は即ち此の畫なり、正さに其の畫の神妙なるを言はん、と欲して先づ之を畫きしもの、傳より始む、筆地綽綽乎として餘態あり、曰はく畫手は是れ我が前輩の吳生にして、夙とに擅場の譽あるものなりと、吳生は吳道子なり、玄宗召して宮中に入り、名を道玄と改めしめ、毎に其の畫を觀て咨嗟して曰はく、吳生の畫は筆を下して神あり、張僧繇の後身なりと、其の激賞せらるゝ此の如し、擅場と推す所以なり、其の畫く所の森羅萬象、皆を地軸を移運するが如く、是を以て妙絶の名宮墻の内外を喧動せり、道子曾つて地獄變相の圖を作る、渠が一世の傑作と稱す、森羅の句此を指すものに似たり、地軸を移すとは大抵筆造化を奪ふの意なり、宮墻の語漸やく返して廟中の畫に入る、故に之に接して五聖云々と云ふ、今廟中の畫を觀るに五代の列聖龍衰の袍を聯ね、千官の從臣雁行の序を列す、帝王の戴く所の冕旒は光彩俱に秀

發し、千官が捧ぐる所の旌旆は、勢色盡く飛揚して宛として其の端嚴
 整肅の狀を親睹するが如し、道子の畫手に非ざるよりは、争でか此あ
 るを得んや、以上の八句即ち廟中の畫を正寫するなり、
 「翠柏」の四句は此の游の冬日たるに就き、廟中の物より其の景を帶言
 す、其の線索の伏する所は遠く碧瓦初寒の一句に在り、是れ己に説明
 したるが如し、翠柏、紅梨、風箏、玉柱、露井、銀床、皆な廟中の有る所、二、三の
 虚字に幹旋せられて乍ち森爽の氣を帶び活動して寒候の風色とな
 れり、句法は岷山、沱江圖と其の揆を一にす、深留景とは陰森の中に日
 光を見るなり、迥得霜とは梨子霜の迥氣を得て始めて紅熟せるなり、
 風箏は廟檐に掛くる所の風鈴なり、今俗に紙鳶を謂つて風箏と爲せ
 るは本篇の義に非ざるなり、時正に寒峭、氷柱、四檐に垂れ、風鈴と相敲
 動して聲あり、露井は無屋の井なり、銀床は輓轆を飾るに銀を以てし

たるものなり、寒意は凍の一字に於て之を見る、
 結四句は歸つて玄元皇帝に到り、老子の道德高邁なるを頌揚す、身退
 身周室とは老子周の柱下の史と爲り、周徳衰へたるを知り、乃ち青
 牛に乗じて去る、是れ周室を昇しとして身を退きたるものにして、老
 子の見識の高を言ふ、經傳拱漢皇とは老子の道德經傳へて漢代に至
 り、河上公出で、其の奥旨を文帝に授く、是れ其の經傳はりて漢皇を
 して拱手して聴かじめしものにして、老子の教法の遠きを言ふなり、
 其の本文に曰はく、谷神不死、是謂玄牝、と、王逸は注して、谷神とは谷の
 中央に谷なきものを謂ふ、形なく影なく、逆ふことなく違ふことなし
 と、然かれば、谷神不死とは老子が經中の甚深微妙不可思議の第一義
 なり、又老子は常ねに拙を養ふを以て、大宗旨と爲す、此の兩句の意は、
 老子の谷神にして、果して其の言ふ所の如く、永劫不死不滅のものな

り。せ。ば。其。の。神。靈。は。定。め。て。永。く。此。の。莊。麗。の。廟。中。に。鎮。坐。せ。ら。る。ゝ。な。る。べ。し。拙。を。養。ふ。を。以。て。主。と。す。と。雖。此。の。廟。に。し。て。外。更。ら。に。何。の。鄉。に。向。つ。て。去。る。こ。と。あ。ら。ん。や。其。の。命。意。此。の。如。し。莊。麗。の。廟。宇。に。養。拙。の。主。義。に。反。對。す。る。が。如。き。と。の。あ。る。を。以。て。爲。め。に。之。を。辨。護。し。以。て。國。體。を。完。う。し。た。る。な。り。然。る。に。語。尾。稍。過。勁。に。似。た。る。を。以。て。終。に。之。を。諷。刺。の。詩。な。り。と。す。る。の。説。を。滋。生。し。聚。訟。の。紛。起。す。る。を。致。せ。り。今。其。の。説。の。重。も。な。る。も。の。を。後。に。擧。ぐ。

錢謙益は全く此の詩を解して、譏諷の微詞なりとす、故に其の箋に曰はく、「配極の四句は玄元廟の宗廟の禮を用ゐて、不經なるを言ふなり、「碧瓦」の四句は其の宮殿の險制たるを譏るなり、「世家遺史記」とは史記の世家に列せざるを謂ふ、開元中に勅して列傳の首に升すとも之を世家に升す能はず蓋し微詞なり、道德付今王」とは玄宗が親しく道德

經を注し及び玄學を置けるも、然かも未だ必ずしも道德の意を知らざるを謂ふ、亦微詞なり、畫手以下は吳生の畫圖を記す、冕旒旌旆耳目を炫耀す、兒戲に近かきを譏る也、老子の五千言、其の要は清靜無爲にして國を理し身を立つるに在り、是の故に身退けば則ち周衰へ、經傳はれば則ち漢盛なり、即令ひ死せざらしむるも、亦當さに名を藏し拙を養ふべし、安んぞ肯て人に憑り形を降して、妖と爲り神と爲り、以て世主の崇奉を博せんや、身退以下の四句、一篇諷諭の意、總て此に見はると、

浦起龍は此詩を頌揚の體を得たるものとす、故に其の解に曰はく、本篇は字字典重にして句句高華なり、事に據りて直書し、議論を參へず、純はら、是れ頌の體なり、而して之を細釋するに、配極の四句は亦鉅典に似たり、亦悖禮に似たり、碧瓦の四字は亦壯觀に似たり、亦險制に似

たり、蟠根「奕葉」は亦綿遠なるに似たり、亦矯屈なるに似たり、遺舊史は亦反挑するに似たり亦實刺するに似たり、付今王は亦同揆に似たり、亦假托に似たり、紀書の處も亦尊崇するに似たり、亦戯に渉るに似たり、谷神「何郷」と云へるも亦呼吸接すべきに似たり、亦神靈依らざるに似たり、而かも讀み去つて毫も主角なし、佳と爲す所以なり、錢箋は語語指斥せりとす、意は是ならざるに非ず、但學者善く之を會せず、偏に譏刺の一邊に在りて看去れば、則ち之を失すること遠し、蓋し題は朝廷の鉅典に係る體は宜しく頌揚すべし、他事の諷諫尙ほ顯陳すべきの比に非ざればなりと、

沈德潛が偶評は云ふ、通體諷を含くみ、末尤も婉曲なり、老子の學は谷神不死を以て主と爲す、如し其れ果然ならば、方に無何有郷に拙を養ひ名を藏すべし、豈帝王の崇祀を以て榮とせん、耶詞微にして顯これたりと、是れ前説を主張するものなり、乾隆帝が御批は云ふ、頌揚の體、諸を清廟明堂に擬す、其の氣象は之に似たり、唐人の老子を崇祀する事、不經に屬したれば、譏を千古に貽せり、然かれども、甫は當時の臣たり、推崇固より應に此の如くなるべし、其の典重中に飄逸を帯び、精工中に排宕あるは、則ち大手人に異なる處なりと、是れ後説を推擴したるものなり、顧ふに浦起龍の解は、譏の詞に非ざるを辨ずれども、未だ斷して譏の意なしとは言はず、因つて此に至つて其の詞意俱に無き所たるを顯言したり、以上列擧する所の説の採擇は、一に之を讀者に放任せんとす、然れども吾れ正に錢謙益が唐の老子を祀つれるに何等の不平かありて、必ず字字句句之を譏諷なりと附會せるの意を解するに苦しむ、蓋し宋儒の學説一たび出で、儒佛老莊の間、必ず鴻溝を劃し、儒者は佛老を

排斥して異端邪說なりとせずんば飽かず此の門戸の見半然拔けず、
則はち終に此の僻解を下すに至りしもの歎知らず事ハ不經に似た
るも其の祖として追崇するに於て何の妨ぐべきなし、則ち少陵唐
の臣子として之を頌揚する亦何の咎むべきかあらんや乾隆の定説
確然として不易なり吾れは盡く之に適從せんとす、

聖善閣送裴廸入京

李頎

雲華滿高閣、苔色上勾欄、藥艸空階靜、梧桐返照寒、清吟可
愈疾、携手暫同歡、墜葉和金磬、饑鳥鳴露盤、伊流惜東別、灞
水向西看、舊託含香署、雲霄何足難、

前四句は聖善閣中四句は裴廸と與に聖善閣に登る、後四句は送別な
り、聖善閣は洛陽の佛閣なり、雲華高閣、苔色勾欄、藥草は空階に滋して
靜かに梧桐は返照を受けて寒し、佛寺、秋、日、幽、清の狀、掬すべし、此の佳

景あり、則ち上に清吟せば自から疾病を愈すに足る、因て裴と與に
此に登れば墜葉は蕭々として金磬の響に和し、饑鳥ハ啾啾として露
盤の上に鳴けり、此れも亦閣中の景然れども上四句ハ閣に就て其の
景色を總領し、此れは人に就て其の眼中より見る所の一事一物を寫
せり、伊流は水の名、洛陽に在り、故に東別と云ひ、灞水は長安に在り、故
に西看と云ふ、裴は今將さに東洛陽を去つて西長安に向はんとする
なり、雞舌含香は尙書郎の故事、含香署は尙書省を謂ふ、裴本曾つて尙
書郎に官す、然れば今の京師に之く、必ず更らに身を雲霄の上に致
すの榮顯あるべしとなり、

長律は杜に至つて開廓殆んど盡く、故に一たび彼れの雄渾偉大の篇
什を讀みて、其の餘諸人が風景に留連し性情を陶寫したる作如何
に勻整を極むるとも、彼等に較らべては甚だ慊然たるの思あり、以下

の諸篇を讀むもの或は當に此の憾あるべし然れども詩の風韻高趣は却つて又此に在りて彼れに在らず詩を學ぶものは各其の性情の近かき處より入らんと要すと雖兩者は斷じて偏廢すべからず是れ我が前きに所謂る根抵與會の別なり此の詩通篇穩妥を旨といたるも墜葉の二語の如きは宜しく警句として之を摘すべきなり

早秋與諸子登號州西亭觀眺 岑 參

亭。高。出。鳥。外。客。到。與。雲。齊。樹。點。千。家。小。天。圍。萬。嶺。低。殘。虹。挂。陝。北。急。雨。過。關。西。酒。榼。綠。青。壁。瓜。田。傍。綠。溪。微。官。何。足。道。愛。客。且。相。携。唯。有。鄉。園。處。依。依。望。不。迷。

突兀として起り一氣に開拓す氣象濶壯是れ嘉州が獨擅たり前半截力を極めて之を寫す故に後半截は滄滄描し來り其の節を緩にして以て收む章法相配し得て更らに好し

亭は高く飛鳥の外に出でたり故に客の到るや白雲と齊し此の種の落筆實に夷の思ふ所に匪ず亭の高此の如し則はち其の觀眺する所のもの必ず遠鬱葱たる樹間に點綴せる千家は小なるを豆の如く穹蒼の天垠圍繞せる萬嶺は低くして邱に似たり忽ちにして殘虹の隱滅して仍ほ陝州の北偶に掛るを認む因て而して急雨の今や函關の西邊を過ぐるを知れり號州の地は壘を陝州に接して西函谷の關を望む二句地名を用ふる者は號州の西亭たるを明かにせんとすればなり我れ今諸子と俱に酒榼を携へて青壁に攀緣し以て此の西亭に登臨す時正に秋なり一路の瓜田綠溪の水に沿ふて正さに熟せるを見る夫れ瓜は東陵侯の種で以て隱栖したりしものなり我の如き微官亦何ぞ道ふに足らん惟諸子の清風を愛するが爲めに聊か相携て此に來り以て一日盤桓の樂を成すのみ眺望の遠前述の如くなるときは

千里蒼茫其の何處なるを辨識する能はず獨り我が郷園の處あり我
を以て依依として望眼を迷はざらしむ郷思の切なる以て見るべき
なり瓜田に由つて想ふて微官に到り微官に由つて想ふて郷園に到
る而して上文千家萬嶺殘虹急雨照らして此の依依不迷の望眼中に
入る絲絲此に束して一罅漏なし何等の完密

清明宴司勳劉郎中別業

祖詠

田家復近臣行樂不違親霽日園林好清明烟火新以文常
會友惟德自成隣池照窻陰晚杯香藥味春欄前花覆地竹
外鳥窺人何必桃源裏深居作隱淪

田家復近臣五字劉郎中其の別業とを雙提す其人は則ち近臣に
して其の地は却つて田家に在るなり行樂して而して親朋に違はず
必ず交遊と之を共にす是れ劉郎中が雅抱併せて今日會宴の由を見

るなり霽日の二句は其の時の清明たるを點ず以文の二句は今日の
會宴を正寫する所以なり窻陰晚に臨んで池水自から照らす夕陽に
映すればなり藥草味を助て春杯更らに香し酒の美なるが爲めなり
欄前の花は地を覆へども掃はず竹外の鳥は人を窺ふて馴るゝに似
たり此の四句極めて田家別業幽寂閑曠の景を狀す近臣にして此の
地に居る其の人品言はずして知るべし故に未又桃源を以て陪と爲
し其の仙趣を得たるを美して結としたり句は毫しも修飾せず妙處
は天真爛熳たるに在り以文會友惟德成鄰論語の語を用ふ今日より
之を見れば未だ甚だ穉氣あるを免かれざるに似たり

祖詠は洛陽の人開元十二年の進士少うして玉塵詰と吟侶たり摩詰
濟州の官舎に祖詠に贈るの詩あり云ふ結交三十載不得一日展貧病
子既深契澗余不淺と想ふに亦流落不偶にして極めて時に獲られざ

るものなるべし、殷璠が詩評に祖詠を謂つて、剪刻省靜にして思を用
うる尤も苦氣は高からずと雖、調は頗る俗を凌ぐ稱して才子と爲す
に足ると云へり、詠の如きは固より亦名家の數然れども、唐一代の詩
を尺幅中に選する本編の如きに在つては、未だ必ずしも之を其の列
に加へざるべからざるものには非ず、五言古詩の崔署に於ける七言
古詩の衛萬薛業等に於ける皆な此と同例なり、下の鄭審も亦然かり、

奉使巡檢兩京路種果樹事畢入秦因詠歌

鄭審

聖德周天壤。韶華滿帝畿。九重承渙汗。千里樹芳菲。陝塞餘
陰薄。關河舊色微。發生和氣動。封植衆心歸。春露條應弱。秋
霜果定肥。影移行子蓋。香撲使臣衣。入徑迷馳道。分行接禁
闈。何當扈仙蹕。攀折奉恩輝。

玄宗の開元二十八年正月、兩京路并に城中苑内に遍ねく果樹を種へ

しむ、鄭審蓋し巡檢使として種樹の任に當り、事畢つて長安に歸る、因
て此の事を詠歌して、以て天子の徳草木に及ぶを見るなり、鄭審の傳
は詳らかならず、傳へ云ふ是れ三絶を以て名ありし鄭虔が姪にして、
杜少陵の詩に、何人爲覓鄭瓜州の句あり、其の下に今の鄭秘監審なり
と自注す、即ち是れなりと、此れに據れば、亦開元天寶間の名士、名を
少陵の集中に掛くるを見れば、其の詩に工なりしは知るべきなり、詩
は直に其の事を述ぶ、甚だ平衍にして出色の所なきに似たり、

聖徳より着筆し、接するに時令を以てす、然れども韶華の二字は是れ
種樹の根、徒設に非ざるなり、渙汗は天子の明詔を言ふ、易に本づく、鄭
玄の注に其の號令を散ずる汗の出で反らざるが如きを謂ふとあり、
然れば是れ雙聲の形容語なるも、仍ほ言下に綸言如汗の意を含める
ものを知るべし、千里樹芳菲、一句題面に入る、陝塞關河は即ち兩京